科学な都市の四方山話

久本誠一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

科学な都市の四方山話

【Ｎコード】

Ｎ８７０７Ｑ

【作者名】

久本誠一

【あらすじ】

え、俺が誰かって？さーな。一応ＥＳＰで、『機械皇帝』の看板ぶら下げて１８年生きてきたことは確かだ。だってのにいきなり出てきたおっさんにはやれ『クローバーの王』だそれ『ジョーカー』だのいらん肩書勝手に付けられて、ったく、あの時道で偶然拾った女の子にいきなり逃げられてからとゆーもの、俺は一体どーなっちまってるんだ！？・・・・・・でもまあ、とりあえず一つだけ分かることがある。俺の、俺だけの名前は難波清明（なんばあきら）だよ。それ以上になる気は無ぇし、それ以下に堕ちるつもりも無ぇよ。・・・・・な

あ作者さんよ、俺の見事にやる気のねえ自己紹介なんかであらすじ埋めちゃって大丈夫なのか！？それと今だから言うけど、この話最初の方はスッゲー下手だぞ。一応最近は『自称』ちょっとマシになってるけど、最初は本当にひどいからな、気をつけて読めよ。

※えーと、なになに？ふむ、どうやらウチの作者のヤローは受験勉強をいい加減やんないとマズイ時期に来てるらしい。で、しばらく更新が超の付くぐらい不定期になるそうだ。悪いな、こんなしょーもないもんを読んでくれてる人。作者の代わりに心の底から謝っとくぜ。

前章（前書き）

まず、この話の『あらすじ』を読んでくれた皆さんに。言い訳がましいですが、はっきりいってあの『あらすじ』は、あまり正確ではないです。なんとなく読んでみて内容を想像した人がいれば、まず間違いなくそれは間違ってます。堅い話が書けるほどの筆力はありません（キッパリ）。だいたいジャンルの（ＳＦ）にしても怪しいものですし・・・・・

要するに。ここは読まずにすっ飛ばして、いきなり本編に行っても不都合はありません（↑！？）。
いわゆる処女作と言うやつですが、どうぞよろしくお願いします。

前章

難波清明（なんばあきら）、高一の≪シティ≫在住１７歳。
名前については初対面の人に面と向かって『せいめい』呼ばわりされることがほとんどであり、「俺は陰陽師じゃないっての・・・・・（ため息）」といった返事を返すことにしているのだが、本人はそこまで気にしていない。と公言しているが、『せいめい』呼ばわりされるたびに地味にへコんでいたりもする。
・・・・・話がそれた。続きに取りかかろう。身長はわりと高めの１７５～１８０ｃｍ程度。特に部活には入っていないが、身体能力はある程度高め。髪は染めておらず、生まれつきの黒髪のまま。顔立ちは上の下から上の中のあたり。モデルというほど二枚目ではないが、まあまあハンサムといってもいいだろう。
外見の特徴は、まあこんなところだ。その他の特徴として、彼はＥＳＰ（エスパー）としての能力を持ち合わせている。その能力名は機械帝王（マシンエンペラー）（コードネーム）。
人間として性格は結構荒っぽいが、なぜか人当たりはいい。芯が太いというより厚顔無恥で、とんでもなく強情になる面もある。
まあ、やや変わっているものの、ＥＳＰなど珍しくもないこの≪シティ≫では平凡な少年だった。そう、平凡な少年だった。
ある一日・・・後に当人が『あのあたりで俺の生活はしっちゃかめっちゃかになっちまったんだよなぁ・・・・・面白いけどな！』と明るく振り返ることとなる、ある日までは。

１：四方山話の滑り出し（前書き）

はい、ついに本文がはじまりました。ちょっと感無量（早ぇよ）。流し読みはやめていただくと、嬉しいです。ボタンの押し違いで３回も同じ文（全文）を書きなおしたことが、完全にムダになるのはイヤなので・・・・。

あ、そういえば、主人公の清明君の名前についてですが、某陰陽師の字は『晴明』でした。別にハナシには影響ありませんが、この場で訂正させてもらいます。

こんなテキトーな作者の作る話ですが皆さん、どうぞよろしく。

1：四方山話の滑り出し

その少年・・・・難波清明（なんばあきら）は、もう夜も１０時になったというのに、ひたすらにひたむきに、そして必死に、全力で走っていた。その一生懸命な姿は、ある種の職人的な気品すら漂っているようにも見える。

「いいかげんに止まれぇぇぇっっ！コンのガキがぁぁっ！！」
「もう謝ったぐらいで済むと思うなよ、この野郎ッ！！」

・・・・・・・・・・・・・・まあ、後ろからＢ級映画に出るゾンビの群れのように迫りくる目つきの悪い・・・・・できることなら関わりあいになりたくないようなおにーさん達とその脅し文句を無視したら、の話なのだが。

とにかく、清明は逃げ続ける。その表情もこころなしか『必死』というより『ヤケクソ』になってきていたが、だれもそれには気づいていなかった。

そして、１５分後。

彼は、それまでの隠れ場所からのそのそと這い出してきて、感心とあきれが半分ずつ混じった口ぶりで思わずといったふうに、

「ったく・・・・よーやく逃げ切れたかな？ふう・・・・・しっかしまあ、よくこんなマンガみたいなことが成功したもんだねぇ・・・・・人生って、ほんっとに何が起こるかわかんねーもんなんだなぁ・・・」

などと独白し、本人談『マンガみたいな隠れ場所』・・・・すなわちフタつき強化プラスチック製ごみ箱のことを、しみじみと見る。

まあ、ごみ箱は当然ながら返事をせず、街灯の明かりにこの手のゴミ箱のお約束である青色ボディを光らせているだけだったのだが。
しばらくの間はなんとなくゴミ箱をそうやって見ていたのだが、すぐに

――――あまりゴミ箱をじ～～っと見ていてもしょうがねえよなぁ、やっぱし。よし、とりあえずはここから脱出すっか！

という（非常に分かりやすい）思考回路が働き、まずは路地のはしっこから首だけだしてきょろきょろと（自分の）安全を確認し、とりあえず人はいない、と判断する。そこで、

「よし、帰ろ」

そう言い放ち、いざ一歩を踏み出
・・・・・・・・・・・・・・・・・・そうとする直前、視界の端になにかが見えた。

――――ん？んん？あの・・・ごみ袋の寄せ集めにも見えるあれ・・・は・・・・もしかして、まさか・・・・・

彼の予想は当たっていた。そこにいたのは、ちょっと距離があるうえにやたらと照明が薄暗いのでこれまで気がつかず（それでも相当間の抜けた話だが）、今も顔どころか男女の区別さえつかないのだが、

そこに（倒れて）いたのは、間違いなく、人間だった。

――――おいおい、これって、まーた厄介事？勘弁してくれよぉぉ（泣）。

滑り出し・・・・・からの初対面（前書き）

え？タイトルがよくわからん？まあ、読んで下さいよ。そうすればきっとわかる・・・・かな？あれ、改めて読み返したら自分でもよくわからんぞ（笑）。

まあ、とにかく、それではどうぞ。

滑り出し・・・・・・からの初対面

彼・・・・難波清明(なんばあきら)は、そいつを発見した時、まずは首をブンブンと振り、そちらの方を見ないようにしながら何度かまばたきし、目の周りの筋肉を軽く指先で押さえて・・・・・・・・なんというかこう、『3分間クッキング☆とっさにできる現実逃避☆』とでもタイトルをつけたら似合いそうなぐらいに激しく、現実逃避しまくっていた。それはもう、もしそばから見ている人がいたとすれば、呆れや情けなさよりも前に、笑いがこみ上げてくるほどに。・・・・・まあ、本人は一生懸命だし、生温か～い目で見守ってやるのが一番であろう。

が、そんな現実逃避も、さすがにネタ切れの時がやってくる。ただ、『さすがに』とはいえそこまでの時間、実はたったの計3分。おお、3分間クッキングにふさわしい。・・・・・・アホか。

まあ、他になにかする時間つぶしことも思いつけなかった彼は、実に嫌そ～にゆっくりと振り返り、開口一番に、

「うわ、やっぱりいるし・・・・・・」

・・・・・・・いなくなってるとでも思ったのか？というツッコミを入れてくれる人材は、不幸なことにどこにもいなかった。・・・・・まあ、それは置いとくとして。

「うぅ、どちらさんだろ・・・・・」

このセリフに込められた意味は、実は結構深い。例えば相手がおっさんで、単に酔っぱらって倒れてるだけの場合。そこらへんの公園あたりから水を汲んできてたっぷりとかけておけばすぐに目を覚ますし、後は放ったらかしておけばいい。だが喧嘩でのいわゆる『

敗者』が気を失って倒れているようなら、いきなり復活して八つ当たりを始める前にとっとと逃げ出すことから最悪『医療遣(いりょうつかい)』や『救急護班(きゅうごはん)』を呼び出すことまで考えなくてはいけない。

「まあ、とりあえずは確認だな・・・・ちょっと失礼っ、と・・・って、うわっ！」

気絶した人を軽く支えながら半身起き上がらせ、とんでもなくびっくりした。そこにずっと倒れていたのは、どこからどう見ても間違えようのない、女の子だった。もちろん、女の子を見てびっくりしたのではない。彼女が、目に毒なくらいの美人だったのだ。

背中の半ばまで伸びた奇妙なことに藍色の髪、街灯にぼんやりと照らされほのかな銀色に光って見えるきめ細かな肌、そして落ち着いた感じをたたえながらも、どこか可愛らしさの残る美貌。

だが、その光景に見とれているほどの暇はなかった。

「・・・・・・ん？こいつぁ、まさか」

何かを感じ取ったのか妙に低い声色でつぶやいてから、それまで彼女の背中を支えていた左腕を、そうっと顔の前にもってくる。

・・・・・・ビンゴした。けっ、また大当たりだな、俺。今日は何か？世界のものごとの全部が全部、俺の最悪の予想どーりに動くようなアン・ラッキーデーなのか、え？

その手は、手首から先のあたりが、血をどっぷりと浴びて紅く光っていた。

初対面・・・・・そして心中独白

「ちっ・・・・・・」

それが、第一感想。たしかにそっけない。それは認めよう。

でもな、ひとつ考えてみてほしいもんだよ。『異端だから』あるいは『普通の人間じゃないから』、へんてこりんなのだと『悪魔の申し子に違いない』・・・・・・・その程度の理由で、≪シティ≫以外ではなにかと人間扱いされてこなかったんだぜ、俺たちの大半は？だから、俺は血を見ることに、少なくとも≪外≫の連中よりかは慣れているし、しっかりと受け止めることができる。

あー・・・・・・うん、まあ、それについては、学校でも『トラブルメーカー四天王：加速装置の清明』なる二つ名（いや、三つ名かな？）をもらうこととなっているほどの、不良系おにーさんたちを相手にした喧嘩数の多さも関係していたりいなかったりするんだけどよ。

ってまあ、そんなことはいい。だけどそれが、俺がいかにも死にそうな女の子を前にして、悲鳴も上げなきゃパニックにもならなかった理由だ。むしろ、またか、と思い、そんな俺を苦々しく思う。気に食わないが、『慣れ』ってのはそんな感情もひっくるめた総称なのかもな。・・・・・・いや、忘れてくれ。今の考えは難しすぎて、俺自身にもまったくわからん。

とりあえず、哲学っぽいことやってる場合じゃねえな。まずは、傷の確認からやってみよう。えーと、とりあえず明かりが、

「欲しいなっ・・・・・と！」

声をかけざま、後ろのほうの街灯めがけて能力を発揮させる。瞬間、光量が軽く10倍に跳ね上がった。これこそ俺の能力名（コードネーム）の由来たる能力、機械皇帝（マシンエンペラー）。軽〜くそれを向けるだけで、ありとあらゆる機械を、安全装置などの制約を全て無視して、自分の思いどうりに命令し、操ることのできる能力。もっとも、便利な反面弱点もかなりあるんだけどな。ただ、それをいちいち話してるほどに俺はヒマでもお人よしでもないんでね。さて、肝心の傷は・・・と・・・

「・・・！！」

チッ・・・こりゃあ、結構まずい。医療遣（いりょうつかい）をいちいち呼んでるヒマすらない！何でやられたかはしらねーが、まだ生きてるだけでもすげえ。体の弱いやつなら、こんなもん喰らっただけで即死してもおかしくねえぞ、こりゃあ。と、なると、どうする？どうすればいい？

・・・・え？能力を使わねえのかって？わかったよ、教えてやる。さっきチラッと触れた『弱点』ってのの一つがこれなんだよ。機械にはほぼ万能だが、動植物にはまるっきり効かない。トンデモ級（クラス）の機械がゴロゴロしてる≪シティ≫ではいろいろとできるが、機械のほとんどない（この世の中、『機械が全くない』なんて場所ありえないからな）・・・例えばジャングルのど真ん中あたりでは、ほとんどフツーの人と変わりねえんじゃねえか？行ったことないけどな。さあ、これでわかったらおとなしくしてろよ？俺は今、現在進行形で忙しいんだからよ。

「・・・・だめだ。どー考えてもしょーがねえ・・・」

ハア？何を言っとるとですかお前らは（おっと。つい言葉が乱れちまったな）？！あのな、この俺が、人のことにしろ自分のことに

しろ、そうそう簡単にあきらめたりするわきゃねーだろーがあああ！！とーぜんまだ続きがあんだよ、続きが！

「・・・・ここはひとつ、迷惑かけさしてもらうとすっか・・・」

・・・・まあ、気に入らないけどな。他のやつまでこんな厄介そうなことに巻き込んじまうのは。

初対面・・・・・そして心中独白（後書き）

今回の話は、タイトルどうり清明君の独白オンリーです。よくわからん思考する奴ですね、彼（笑）。

ただその反面、というか当然の結果というか、ストーリーそのものはほとんど動いていません。ワッハッハ（汗）。そのかわり、彼の過去や今に関する伏線をいくつか入れておいた・・・・・つもりです、ハイ。

ひとつ残念なのは、次の話もこれまでどうり堅っ苦しいものになりそうなことです。全然彼に気をゆるませるヒマがないもんで・・・・・。ですが、せっかくなので根気よくつきあってくださいねっ！

・・・・しかし、ずいぶん怪我人への応急処置が下手くそですね、清明君。まずは気道を確保しなきゃいけないのに・・・・。

巻き戻し・・・・・ｂｙ天下谷桑折（前書き）

今回、新キャラが出ます。まあ、１～４話まで延々と清明君と名無しの女の子しか出てこなかったので、むしろ遅いぐらいですが。それでは、お読みください♪

巻き戻し・・・・・・ｂｙ天下谷桑折

彼がうだうだと悩み続け、ようやくとある《・・・》人物の所に行こうと決心して動き出す・・・・・その１０分前の話。

その時、黒いまっすぐな髪に気の強そうな顔立ちの彼女は、さっぱりわからない・・・・とまではいかないものの、やっぱりよくわからず、しかもそれが通らないという非情な地獄の紙（ガッコの宿題）を前に、ひとりイライラとしてい、自分の学校の『ミス新入生ＮＯ・１』にも選ばれた（学校非公認。生徒会の完全なる悪ノリ）顔にもその理由のもっとも大きなものとなった覇気（はき）がない。だがそれは宿題によるものには見えず、むしろ他のことで悩んでいるように見える。

彼女の名を、天下谷桑折（あまがいこおり）という。

彼女・・・天下谷は、その後も少しの間イライラと触ると危険的オーラを全開に発しながら机を指でたたいたり、微妙に失敗気味のペン回しをしたりとしていたが、一分もしないうちにガタンッ！と音をたてて立ち上がると、

「ああっもう！全っっ然集中できないじゃないの、あの馬鹿！！」

・・・・・・・いきなり絶叫・・・・・むしろ咆哮（ほうこう）（笑）した。それも不機嫌という字を満面に張り付けたような声で。それから彼女は乱暴にイスを戻してから後ろの棚を引っかき回し、軽く考えながらパジャマから普段着に着替える。その後部屋を出てジャケットをはおり、誰もいない――――――一人暮らしのため――――――リビングをつっきって玄関へと向かう。

――――――――――まったくあの馬鹿あの馬鹿あの馬鹿！！なんで私がこんなことやってんのよ！！だいたいアイツがあんなタイミング良すぎる時なんかに通りかかるから！全部アイツのせいじゃな

い！じゃあ私はなんでこんなことやってるの！

感情の動きが一回転して、すべて自分にはね返ってくる。そこで一度冷静になり、自分がなぜここまで一何かをしようとしている《・・・・・・・・・・・》のか、その理由を探してみる。

「なんでここまで、って・・・・・そりゃあ、あの馬鹿には結局、まだ、お礼・・・・・うん、お礼も言ってないし・・・・あと・・・・そうだ、あの宿題も、もしかしたらもうできてるかもしれないし、そしたら、その・・・教えてもらえばいいし・・・・・」

二人きりで。そんな単語が脳裏に閃き、誰も見ていないし聞いていないことは分かっているにもかかわらず、赤くなった顔を隠すようにしながら周りをキョロキョロとつい見まわしてしまう。

「と、とにかく！ア、アイツの所に行って、まずお礼言っとかないと！」

無理やり自分にケリをつけ、外に出ようとする。と、

ピ～ンポ～ン♪

軽快な音のチャイムが、いきなり鳴り響いた。

（・・・・・誰っ！！！）

そう思う間もなく、インターホンからあの馬鹿の声がした。

『桑折ぃぃぃっっっっ！！いるかぁぁっっっ！俺だ！難波だ！悪いが今すぐ開けてくれっっ！』

（・・・・・・！！！嘘っ！！）

あまりといえばあまりにも急な展開に、卒倒しそうになりながらドアを開ける。

と、そこには、

血まみれの彼がいて、その腕のなかには、女の子が一人、腹のあたりから血を流していた。

巻き戻し・・・・・ｂｙ天下谷桑折（後書き）

えー、いかがだったでしょうか。
桑折さんですが、こういうキャラはまだ慣れていません。なので書いている方としても結構難しいです。ですから、何か変なところがあれば、ぜひご意見下さい。特に女性からのものをお待ちしています。なにぶんこっちは男なもんで、女性目線からの情報が無いので・・・・・。

それではっ！

5：IN天下谷宅・・・生命のカウントダウン（上）

天下谷家の門の前に立ったとき、さすがに体力には自信のある清明（きよあき）も、いささか・・・相当息を切らしていた。時間にして約１０分。人一人抱えながらにしては上等なタイムだが、人命救助にとっては致命的な時間（タイム）。そして、そのことは彼自身も頭ではよくわかっている。わかっているが、

「ハア、ハア・・・・く、そ、もう、少し・・・」

早く、速く、来ていたら。そうしたら、もっと安心できたのだが。が、そんなことを考えてもしょうがない。彼はくたびれた足を引きずるようにして、彼女の家の玄関に立ち、チャイムに手を伸ばす。と、そこで、ある冷たい考えが、前触れもなく頭の中に入ってきた。

『もし、もしも、家に誰もいなかったら？』

全身に悪寒が走り、冷や汗がでてくる。見ると、チャイムに向け伸ばしたままの手も、小刻みに震えていた。ばかばかしい、と思い：：：：たがっている反面もしそうなら、という恐怖が全身を包む。

――――――まったくもって情けねえ、これじゃあ何も変わってないじゃねえか。いまだに俺もガキのまま、ってことか。

心の中で吐き捨て、虚勢を張りながらインターホンを押す。押して、自分のイヤな予感を振り払うかのように、叫ぶ。

「桑折ぃぃぃっっっっ！！いるかぁぁっっっっ！俺だ！難波だ！悪いが今すぐ開けてくれっっ！」

・・・・・・ほんの１秒程度だったが、やけに長く感じられた。えらい勢いでドアがバアアァァァァン！！！と開いてちょうど外に出るところだったらしい天下谷桑折が飛び出してきて、彼の抱えてい

る女の子にすぐ視点を移す。

　と、ここで、再び嫌な考えが忍び寄る。

『いくらコイツが医者の娘だって、いきなりクラスメイトがこんな訳わかんない荷物連れ込んできたら、驚くに決まってる。いいのか？こんな所で時間を無駄にして、本当にいいのか？』

――――――くっ・・・・うるさいうるせえ黙ってろ！！

　心の中に向かい強く命じるが、声はさらに大きくなった。もはや自分ではなく、他の誰かが精神(こころ)の中に直接、しゃべってきているかのように。

『ほう？それが返事か？この俺が親切心から、わざわざ親切心から言ってやってるんだぞ？その娘(こ)は死ぬな。それもお前のせいで。アーッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャ！！傑作だな、え、皇帝様？ヒャッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャッ』

――――――ん？精神(こころ)の中に・・・・直接？そうか！ようし黙れ！お前(テメエ)はどこの誰だ！俺の周りからとっとと失(う)せろ、この野郎！！！

『おおっと・・・わかったよ、皇帝様。思ったより早く気付いたな・・・今回は俺の負けだよ、皇帝様。また会おうぜい！ヒャッヒャッヒャッヒャ』

　笑っている最中に、声はふっつりと消えた。精神的な緊張からその場に倒れかかりそうになり、かろうじて踏みとどまる。そして、自分の前に立っている桑折の顔を恐る恐る覗きこむ。

　と、そこで、

「・・・・とりあえず、入ってよ」

え？いいの？そう思うほどきっぱりとした声で、彼女は告げた。
ポカンとした顔をしていたらしく、苦笑しながらセリフが追加された。
「その人、患者さんなんでしょう？だったら中に入れて、ほら、早く！」
「ああ・・・・わかった」
そう返すことしかできなかったが、彼は内心、感謝の思いでいっぱいだった。

5：IN天下谷宅・・・生命のカウントダウン（上）（後書き）

今回、だいぶ中途半端なところで終わってますね。
この今回の話を上下巻にする理由は、まず「一身上の都合」というやつがひとつ。もうひとつが、この山場（自称）が、純粋に一話に収まりきらなかったからです。
それでは、（下）も読んでくれると嬉しいです♪

ＩＮ天下谷宅・・・・・生命のカウントダウン（下）

「・・・・・で、俺にどーしろと？それ以前になんなんだ、この状況は？」

「聞こえなかったの？馬鹿な顔して突っ立ってないで、少しは手伝えって言ってんの。わかったんならとりあえず明かり強くして・・・・・出来るんでしょ？」

「いや、そりゃま・・・・・じゃなくて！！俺が言いたいのは、なーんーでお前は、このだくだく血が流れてる状況で落ち着いてられんだよ！」

「やっぱ職業柄ってやつ・・・かもね。ちょっと寂しいけど。それに、私の能力（チカラ）のことはよーく知ってんでしょ？だいたい、アンタだってずいぶん平気そうな顔してんじゃない？ほら、さすがに重傷なんだから急いだ急いだ！」

・・・・・・信じられるか、オイ？これが死にかけてる人間の前でするような会話かよ？ったく、これも『科学の進歩』ってヤツなのか、そーなのか？

え？お前も実際ずいぶんと余裕なんだなって？・・・・・まあ、そりゃな。あれだけ血ぃ見りゃあ、少しは慣れてくるさ。でもま、んなことはどーでもいい。だから、あんなモンいちいち蒸し返さないでくれよな？

「どうしたの！少しは手伝って！」

おっと。それじゃあ、照明光度を引き上げてやるとしますか。・・・・あらよっと。こんなトコでいいだろう。

「こんなトコか？」

「ちょっと強すぎ！もう少し小さく！」

・・・・・命令された。ハア、しょうがねえ。今回は助手として、全面的にアシストしてやるか。

「・・・それで？お次は何をしろと仰せで？」

「もういいわ。いったん出てって」

「え――――――！？何それ！？せっかくこっちが覚悟決めて言うこと聞いてやろうと思ったのに？俺の意思は完全に無駄で、きっぱりと無視！？人の考えを一歩先から叩き潰すんじゃねえこの最低最悪女あぁぁ！！！」

――――――お？なんかずいぶん冷た～い目で睨まれたぞ？ちっくしょ、何言われても出てってやらねえからな！さあ来い！お前の切り札（ジョーカー）はなんだ！

「・・・・・・・・別に残るならかまわないけど。ただ、服を脱がせて《・・・・・・・》から治療するつもりだから。・・・・・なにか質問は？」

――――――え？結局どうしたかって？逆に聞こう、お前らならどうすんのよ？少なくとも俺は、回れ右して出てったからな。

・・・・・・・あー、まあ、そりゃあ、うん、素直に認めると、後ろ髪はムチャクチャ引かれまくったけどよ！確かにそうだけどよ！でもおとなしく外・・・ったってやたらと広いリビングだけど・・・・で座って待ってたんだからな！覗かなかったぶん偉いだろーが！・・・なに？図々しい？フン、うるせーよ。

それから１０分後。高級品らしく、実にふわふわとしたソファー

の上に寝転がって（それでもまだ余裕がある。そんなデカイものがいろいろ置いてあるのにきゅうくつに感じない部屋の広さ・・・恐るべし）いた清明（あきら）の目を、桑折（こおり）がいきなり覗きこんだ。
「うおっ！？・・・・って、どした？治療、終わったのか？」
どうだった、とは聞かない。その成功を前提とした《・・・・・・・・・》、彼女のことを信用しているとも取れる質問を嬉しく思い、答える声もやや弾んでいる。
「当然！もうじき目も覚めるはずよ。
・・・ただ、聞きたい事ははっきりと聞いておくが。
・・・・・それで？あの女性（ひと）、誰なの？アンタの知り合い？」
ああ、やっぱり来たか、そう彼は思った。だがそもそも、あの彼女はいったい誰なのか。そんなことをつらつらと考えてみる。と、その沈黙を別の意味で受け取ったのか、
「・・・・もしかして・・・彼女？」
「ウム。これまで内緒にしていたが、実はそうなのだ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・そう・・・・・・・」
「ん？アレ！！？嘘、何でこんなに落ち込んじゃってんの？なんかすっげー暗くて湿ったオーラが出まくっちゃってるし！いや嘘だよ嘘！！ただの行きずり！通りがかり！赤の他人！」
「ホント！！！？」
「・・・うわー・・喰いつくのはやっっ・・・・・・しかし、俺に彼女いないのがそんなに嬉しいなんて・・・ハッ、もしかしてお前・・・・
桑折は、だいぶ顔を赤くしてうつむいてしまう。少なくとも次の瞬間までは・・・・

・・・・前からそんな気はしてたけど、こりゃ相当サディスティックな性格だったんだなー・・・嫌われるぞそーゆー性格・・・・・・」

「誰がっっっっ！！！」

「ァ痛！？」

ロマンチックも何もあったもんじゃない。反射的に顔を真っ赤にしながら振り落とした拳は、おもいっきりかつ必然的に、その真下にある顔面を直撃していた。

――――――あう。俺、なんか間違ったこと言ったのかよ・・・・。

そんなことを考えていたら、みるみるうちに視界が暗くなった。

ＩＮ天下谷宅・・・・・生命のカウントダウン（下）　（後書き）

シリーズ初の上下編、終了！
・・・・上下編にする意味、ホントーにあったんだろうか。別にそんなつながってないし（汗）。
ま、まあそれはともかく、次からまた話は動いていく予定です。
そろそろ彼女も名前出ししてやらないとなー・・・・。

ではっ！

ＩＮ天下谷宅・・・・・んでもって大立ち回り

清明が目を覚ましたのは、それからだいたい２時間後だった。
「う～～・・・・痛つつ・・・ったく、骨だの歯だの折れてなきゃいいけどなー・・・・・って痛つ！うぅー桑折のアホ～、おもいっきりブン殴りやがって・・・・・」
ぶつくさと文句を言いながら起き上がると、そこはさっきと同じソファの上で、ご親切にタオルケットが一枚体にかぶせてあった。・・・・・・・その行為に免じ、実にファンシーな柄については突っ込まない事にしようと思う今日この頃である。

まあ、そのことはさておいて。
「あれ、あいつは・・・・・・？」
ぱっと見、周りにはいない。
「・・・・・ふむ」
軽く起き上がって、だだっ広い部屋の中をウロチョロとする。１０分後、リビングを探しつくした彼は、次にこれまたやたらと長い廊下に出てみる。

と、誰かが、いた。

後ろ姿しか位置的に見えないが、少なくとも桑折や例の女の子ではない。女性にしてはなかなかの高身長を誇る彼女たちも、さすがに２メートル半（目測）はない。桑折は一人暮らしなので、家族という線も消える。と、なると・・・・・・
「アンタ・・・・・誰だ？」
低く声をかけながら、『誰か』の真上の電灯に、ゆっくりと能力を集中させていく。誰かすらまだわかってないのだが、どこからどう見ても攻撃する気満々である。が、『誰か』は、無視してるのか

聞こえてないのか、まるっきり反応せずのっそりと彼に背を向け歩き去っていこうとした。過去形な理由は単純。この一日でいい加減神経がすり減って喧嘩っ早くなった彼が、それをさせなかったからだ。

「誰・だっ・て・・・・聞いてんだろーがあああ！！」

叫びざまに機械皇帝（マシンエンペラー）で電球をショートさせ、その一瞬に相手との距離を詰める。さすがに『誰か』も振り返ったようだが、無視。そのまま勢いを殺さず全体重をかけた右ストレート！

だが、その一発はあっさりと空を切る。そして、前触れもなく、わき腹に冷たいような感覚を感じて・・・・・

彼の意識は、再び消えた。

――――――ああ、よーくわかってる。確かにアレは俺のミスだ。誰かもわからん相手に殴りかかっちまってるのはマズかったし、電球ぶち壊したのも悪かったと思う。最初の一発にいきなり渾身の力込めたのは致命的なアホだ。そこは否定しない。けどな、あの一発はまちがいなく当てられたはずだ。当たるはずだったんだ。そこは信じてくれ。言いたいのはそれだけだ。

ＩＮ天下谷宅・・・・・んでもって大立ち回り（後書き）

えー、いかがだったでしょう。『大立ち回り』ってわりにはバトルシーン少ないですが・・・清明君、えらいあっさりと負けちゃいましたね（笑）。

なかなか彼女の名前も出せませんが、次回では出す・・・・うー、あー、出せると、いいなー（笑）。

それではまた次回。

大立ち回り・・・・・で、その振り返り

「うわあああああああっっっ！！！」

・・・・・・・・・・ハア・・・・・・・・目が・・・覚めた。・・・・・ってん？んん？んんん？

「夢・・・・？今のが・・・・夢だぁ？オイちょっと待て俺。今のが・・・あんなのが夢だってのかよ？」

落ち着いてじっくり、周りを見てみよーじゃないか、俺。体の上にはタオルケットが・・・・・アレ？ない。じゃ、じゃあ、体の下にはソファーが・・・・おお！？これも無いぞ！！どっからどー見てもただの床だ！いったいどーなってんだ！？と慌てる俺に、呆れたような声が聞こえてきた。

「ずいぶん寝相悪いのねー・・・・・・。ソファーから回転して落っこちるなんて、今時小学生でもやんないわよ」

その声の響きに、俺ともあろうものが減らず口も返さず――――――ま、迷惑な性分なのはわかってるけど、なんか言われるたびについつい言い返しちゃうクセがついてるからな。これはいまさらどーしようもない。少なくとも、俺に直すつもりはないからなぁ――――――に、そっちの方を振り返る。その瞬間、俺はアレが夢であった証拠をつかむことになる。・・・桑折だ。桑折がいる。

「ハア・・・・・良かった～」

「？」

「いや、夢の話。別にどーってこたねーよ」

まだよくわからない、という顔でこっちを見つめてきたが、とりあえず無視。そっか、それにしても床の上にいたのはソファーから落ちたからで――――――ったく情けねえの――――――、タオルケットが無かったのはアレが夢で最初っからそんなモンは無かったからか・・・・・あ～待てよ、もしかすっと・・・

「なぁ桑折、俺が（お前のせいで）ずっと寝てた時、なんかタオル

とか掛けてくれた？」
どうせ馬鹿にした返事しか来ないだろーと思ったが、意外にもあっさりうなずいてきた。・・・・・何故か、顔を真っ赤にして。
「え、ええ・・・・そりゃあ、まあね。だって、風邪でもひかれると・・・・うん、風邪でもひかれると困るし！だからそーゆー事！」
ふむ、なんか知らないけどセリフの後半にえらく力がこもっている。ただ、とりあえずタオルがあったことは本当のようだ。それじゃあ、次はなにを聞いてみよ
「そうだ、そ、そんなことより！さっきの娘（こ）がどっかいったんだけど、知らない？」
「なにぃ！？ここでいきなりの爆弾発言！？そーゆーの反則だろ！！ってかお前医者（の卵）だろうがあああっ！！何でここにいるんだよ！？」
・・・・・な、困った性分だろ？これじゃあまるで俺がケンカ売ってるみたいじゃないか。

行動開始！・・・・・・?脱出Ｐａｒｔ?（前書き）

んーと、やっと彼女が目を覚ます。ただ、名前はまだですが。まあ、そこはおいおいということで（笑）。それでは、どうぞ。

行動開始！・・・・・・？脱出Ｐａｒｔ？

時間は少し前に戻る。

――――――・・・・・ここ・・は・・・？

それが、彼女が最初に思ったことだった。麻酔でも打たれたのか、体もうまく動かないし、頭も今一つはっきりしない。それでも、自分がまだ生きていること、体がベッドに縛られていないことは、なんとかわかった。が、ここがどこかわからない以上、安心はできなかった。

――――――まずは、此処（ここ）から出てみるべき。

そう踏んで、動くことができるかどうか試しに指を一本動かしてみる。が、すぐに鋭い痛みが麻酔を通して走り、思わず顔をしかめてしまう。だが、おかげで少し目が覚め、身じろぎしたせいで自分のいる場所が病院のような施設だということがわかった。周りの様子と一緒に、自分の体に包帯が巻かれているのも見えた。その手当てを見て、

――――――状況から見ても、あっ…ちの側ではなさそう。もしあっちに捕まっているなら、傷口に酸ぐらい塗られていても不思議ではない。でも、まだ油断はできない。もし、これが罠なら？あるいは、単に拷問や尋問のために生かされているだけなら？

そこまで考え、自分の思考を打ち切る。どうなるかわからないことは、いちいち心配しない方がよさそうだ。どうせ体も動かないし、罠だとしても逃げられない。

――――――ただ、本当に此処は何処(どこ)なのだ？

すると、ドアの外から足音が一人分聞こえてきた。慌てて目を薄くつぶり、こっそり侵入者の顔を見る。どうせ拷問や薬物(じはくざい)の専門家でも来たのだろうという彼女の読みは、いい意味で外れた。そこにいたのは自分と同じ年恰好の女性だった。そう、我らがドクターにしてここの院長、天下谷桑折である。

・・・・・まあ、彼女は当然、そんなことを知るはずがないのだが。ちなみに、彼女の第一感想はこんなものである。

――――――この女は何だ？ずいぶん若いようだが、こんなのが私から情報を引き出せるとでも思っているのか？それとも、ここの院長の情婦(いろ)か何かなのか？

・・・・・・・・同じ内容をくり返すようだが、彼女はこの家に『医者』という存在が一人しかいないことを知らない。無知は力なり。

１０：行動開始！・・・・・・？脱出ｐａｒｔ？

彼女は少し迷った後、結局自分の意識が戻ったことは悟られないようにすることにし、目をうっすらと開けたまま桑折の様子を見張ることに専念した。一瞬、この女一人であれば気絶させてそのまま逃げ出すことも考えたが、他の人間がいたらコトだし、第一このボロボロの体で行うにはあまりにもリスクが大き過ぎる。あの女の戦力もよくわからないではないか。

――――――くっ・・・、情けない・・・・

自分は、動きたいときに動くことすらできないのか。肝心な時は、結局何一つ役には立たないのか。そんな思いがかけめぐる。が、その目から悔し涙は出ない。涙は出さない。泣きだして心が折れたりしないよう、感情を全て自分から遮断する。そしてそれは、成功した。いつも通り。いつものように。

そんなことも露知らず、桑折は彼女に背を向けたままひどく慌てたように氷嚢（ひょうのう）のようなものを戸棚からひっぱりだしたかと思えば、そのままとたぱたと部屋から出て行った。何が来るか、と少しは緊張していた彼女にとって、その行動は・・・・・なんというか・・・・脱力モノで・・・・意識がそのまま吸い込まれそうに・・・・

「・・・・・・・くっっっっっ！！」

・・・・・かろうじて、意識が保てた。やはり、体が相当弱っているのだろう。頭をはっきりさせるため、寝転がった状態で頭を左右に振る。

と、ここで彼女は、桑折がうっかり犯したミスを発見する。・・・・・ドアが半開きになっている。彼女は、そこで迷わなかった。

――――――もちろん罠かもしれない。だが、この上でじっと寝てい

るよりはマシだろう。

そう決意して痛む体を無理やりに、誤魔化しながらも部屋の端まで行き着く。たかだか数メートルの距離だが、今の自分にはつらかった。が、その表情に辛そうな色は見当たらない。『辛い』という感情をも強引に押し殺し、彼女は壁に寄りかかりつつも、前に前に進んでいく。

――――――いいだろう、もしこれが罠であれば――――――そう彼女は思った。

――――――仕組んだ者の手の上で、徹底的に踊って壊し、罠の仕組みごとひっくり返してやろう――――――

行動開始！・・・・・・?脱出Ｐａｒｔ?（前書き）

また作者の悪い癖が出てます。全っ然話が進みません。今回も時間では一時間も進んでない・・・・・が、作者はもうここでふっきれてしまいます。

まだ読もうという（奇特な）人、これからもこんな調子になってしまいそうですが、よろしくお願いします。それでは、どうぞ。

行動開始！・・・・・・？脱出Ｐａｒｔ？

――――ひっくり返してやろう――――

そうは思ったものの、まず仕掛け通りに動かないことには、ゲームそのものが始まらない。ただ問題は、体の傷と疲労が思ったよりはるかに深刻で、一歩動くのにも精神力を集中させなければならない。さもないと床に崩れ落ち、そのまま気を失いそうだ。

「くっ・・・・・・・」

廊下から玄関（多分）までの道のりは、ざっと5～6メートルほどの直線距離。ただ逆に言うと、その直線な廊下がずっと後ろまで続いているために、後ろから人が来れば一発で見つかってしまう。隠れられるような場所は一つ二つあるのだが、そこに素早く転がりこむことのできる自信は・・・・そして気力も・・・・ない。それがよくわかっているからこそ彼女は、懸命に壁に寄りかかりながらも足を動かしてゆく。だが、出口は一向に近づいたようにみえず、むしろ遠ざかっているような気さえする。

――――まさかな。考えすぎであろう。――――

そう考えた時、この≪シティ≫だからこそありえるとある一つの可能性に気付き、思わず足を止めてしまう。

――――もし、空間をいじるようなＥＳＰ遣いが一人・・・・・・いや、なにも空間ごといじる必要はない。ちっぽけな幻術を一つ、自分にかけるだけで。たったそれだけで、本当に私を出口から遠ざけることができる！

「・・・・・だ・・が・・・まだ、・・・そうときまったわけ・・・

では・・・・ない！そうだ・・・としても・・・・・・止まる・・・ことは・・・・・私は・・・・しない・・・はずだ！」

弱々しい声だったが、自分の覚悟を声に出したことで、多少なりともスッキリした。そして、ともかくもう少しこの方向に歩き続けようと、とりあえずの方針も決まる。

――――――――――そして、十分もたったころだろうか。

ついに彼女は、体を引きずりながらもようやく、外の澄んだ空気を吸うところまで至っていた。しばらくの間呼吸を整え――――――といっても万全には程遠いが――――――た後、再び移動を開始する。だいぶ時間を使ってしまったが、まだ大丈夫だろうか？

そして彼女は、歩き出す。・・・・・・・が、自分の居場所がどこかわからないことに気付き・・・・・端正な顔をほんの少し赤らめながら、なにかのヒントになるだろうかと、今まで自分のいた家――――――寮やアパートの目立つ≪シティ≫のなかでは、かなり分かりやすい目印になりそうだ――――――の表札を見る。

「・・・・なんだ？てん・・・いや、あま・・か・・い？天下谷（あまかい）？」

その後も1～2分の間首をかしげながら考えていたが結局、

――――――何か違うような気もするが、まあ字面だけでも十分だろう。

そう結論付け、とりあえずその場に背を向けて、今度こそ歩き出す。彼女はそのまま、二度と振り返らなかった。

幕間

名前も知らない『彼女』が出て行って数分・・・・・遅まきながら桑折が気付き、清明がそれを聞かされた所でのお話。

本人曰(いわ)く桑折からの『爆弾発言』を受け取った瞬間。清明は、とりあえず一言怒鳴っておいてから――――ハタ迷惑な話だが、これも喧嘩ばかりしているうちに勝手に身に付いた能力らしいのだ・・・もう少し細かく解説すると、

一、一緒に行動しているやつが何かミスをしちゃう＝とりあえず怒鳴る

二、自分・知り合いが馬鹿にされる又は挑発される＝とりあえず怒鳴る

三、喧嘩で相手に卑怯な手を使われそうになる　＝とりあえず怒鳴る

・・・・・・・改めて言おう、ものすごくハタ迷惑な話である。それも条件反射で行うので、相手のことも自分の立場もまるっっっきり考えない発言が多いからなおさらたちが悪い――――が、まあそれはともかくとして。そんな発言を叩きつけられた桑折は、一瞬だけ黙った後、だんだんその大きめの目が潤んできたように見えて・・・・・

――――あらら？え、泣いちゃう？あ、マジで泣いちゃうの？う、うわ～、さすがにまずかった・・・・かなー？

そんなことを考え、殊勝にも謝ろうとして口を開いた直後！

「な！ん！で！・・・・・・・アンタからそこまで言われなきゃいけないのよっ！！一体アンタはどこの国の王様だー？！」

「うおうっっ？！」

彼は、心底驚いて奇声と共にソファから転げ落ちた。そしてソファの上に這い上がりながら、

「えっと・・・機械の国の・・帝王様、かなー、なんて、ハハハハハ・・・・・」

乾いた笑い声を、ひきつった笑顔と共に漏らす。そしてそのまま、恐る恐る彼女の顔色を覗き込む・・・・・するとそこには不気味なほど優しい笑顔でニッコリと笑っている彼女がいて、でもよく見るとその顔の横には青筋が数本走りその両手は白くなるほどきつく握りしめられてプルプルと小刻みに震えていて・・・・・・・

「あ・・・・・えーっと・・・その、すいませんでした桑折様！だ、だからそんな怒らないで下さ・・・・・ってうわァァァァァッッッッっ！！！！」

以下の騒ぎは省略。ただ5分後部屋の中に残っていたものは、模様替えでも行ったかのように色々と移動された家具、部屋の中央で息を切らせて顔を真っ赤に火照らせながら仁王立ちになる天下谷桑折、そして隅の方に転がされている元は人間だった生ゴミだったとい・・・・・

「うぅ・・・・・いや、俺も一応まだ生きてるからな？ア痛！・・・・・あー、やっぱ自信ねーわ、コレ・・・・・」

・・・だそうだ。

行動開始！・・・・・・?追跡Ｐａｒｔ?（前書き）

行動開始！も、はや2章目（？）です。今度は、フラリと出て行った彼女をあの2人が追いかける形となります。桑折さんの能力も公開しますよ～。

行動開始！・・・・・・？追跡ｐａｒｔ？

・・・・・・で、あの地獄のよーな馬鹿騒ぎがやっと収まった時には、なぜかなぜか三十分ほどの時間がたっていたわけで。・・・・なぜだろーねー桑折サン？

「こ、この時間だとさすがに、外・・・歩いてる人はいないわねー・・・・アハハハハ」

「・・・・・・・・・・・・」

「ほ、ほら、だから、お、遅く出て正解・・・・・・じゃ・・・・ない・・・・かしら？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「え・・・えっと・・・その・・・あの・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・ってふざけんなぁ！！こんな時間に歩きまわるはめになったのだって、もとはと言えば間違いなくお前のせいじゃねーか！ていうかこれはナニ？これはなんかの拷問（ごーもん）のひとつかぁ？そうなのか、そうなんだな？でなきゃなーんーでーお前に！　服を！雑巾にされた！　この俺が！　こんなカッコして歩いてなきゃいけねーんだよ！・・・・・・ハア、ハア・・・・それに大体な、なんで」

そこまでいった時点で、さすがに言い返された。・・・・・・っておい！まだ俺が喋ってんだろーが！だいたい、あそこまで人様をぶっ飛ばしといて、なんでこんなに『はんせー』ってもんがねぇんだよぉ・・・・・・トホホ・・・・。

「いい加減にしなさいよっ！！！アンタがあんな不思議系女の子拾ってくるから悪いんでしょうがっ！多少はこっちも悪いと思って手伝ってやってんのに、たまぁ――――――――――――――――っに黙って大人しくしてやれば、何でそんなに調子に乗ってんのこのナルシっ！！」

おおおっ！？す、すんげえ突っ込みどころだらけだな！百歩譲って『不思議系』ぐらいしか当たりがねえ！

『多少はこっちも悪い』？９割方お前のせいじゃねえか！

『たま――――――――――――――――っに大人しく』？いつンなことがあったよ！？

それから、俺の服については結局一言もなし？ボコボコに殴られた俺の傷（打撲傷）もノーコメント？

それに、最後のセリフもだよ！お、俺が？俺がナルシスト？しかもちょーしに乗った？嘘八百ぶっこいてんじゃねえ！――――――――――でも、んなこと言ったら街中でもボコスコにのされちまいそうだしなぁぁ・・・・ここは自主規制かけとくか・・・・。

「大体アンタは、今日に限らず毎回毎回・・・・・」

「何ぃ！！？まだ続けんのか？お前は俺のお袋かよ！？」

・・・・・あー、ダメだこりゃ。今ので力尽きたし、第一馬鹿らしくてやってられねー・・・・何かもー、コイツのことはどーだっていいや・・・・・

「聞いてんの？」

いきなり、脳天に拳が振り下ろされる感じの痛み。あぐぅっっっ！

「こ、これ以上怪我人ぶん殴ってなんか楽しいのかよ？やっぱサデ

ィ・・・・」

ぐわあっっっ！！う、うう・・・さっきのより痛いぞ・・・うう・・・何でこいつはあーゆー便利な『手』を人ぶん殴ることに使うかねえ・・・・え？『手』ってなんだって？ったく、面倒くさいけど解説してやるよ。耳の穴かっぽじってよーく聞いてろよ？

天下谷桑折・・・・こいつの能力は、能力名（コードネーム）で『創造手（マジックハンド）』・・・・創造手ってトコ、くだんねーよな・・・・俺はその名付け親のセンス、嫌いじゃあないけどな。

んで、能力の内容は、一言にすると『三本目の手』ってとこ。もうちょい詳しく説明すっと、空気やらなんやらを集めて固めて、見えない『手』を作って元から3本あるかのように自由に使えますよ、とただそれだけの能力。大きさはまあ、普通の手と同じってトコ？ただ力は結構強くて、人が一人乗っかったソファぐらいなら軽々と持ち上げる。・・・・・え？ああそうだよ！さっきソファごと持ち上げられて、そのまま壁に叩きつけられたアホウはこの俺、難波清明だよ！ったく、わかりきったことなんだから、いちいち聞かないでくれ。・・・・・・・ハ、ハナシ戻すぞ？

だから、その、よーするにだな、そんなに力の強い『手』も、棚から薬瓶取ったり、電気を付けたり切ったりするのに使ってちゃあ、浮かばれないと俺は思うぞ、うん。ま、人のことは言えんがね。

行動開始！・・・・・・？追跡ｐａｒｔ？

・・・・・んで？はためーわくな『手』についてはこれで全部だったよな・・・・たしか。あの『手』、ホント痛いんだよな。正直思い出すだけでイヤになってくる。というわけで俺はもう考えない！二度と思いだしてやらん！桑折がなにやら叫んでいるような気もするけど、ここは無視！

ガツゥッッッッッッ！！

・・・・・ぐ、ぐぐう・・・・はっ、マズイマズイ！こ、ここは無視！絶対無視！無視と言ったら無視！無視無視無視！・・・・・・・・あー、なんつーか・・・・

「ったく、ガキかよ俺は・・・・」
「ハア、ハア・・・・・、？そりゃ・・・・、そうじゃ・・・・・ハア、ハア、・・・ない・・・の？」
「って聞こえてたのかよ！しかも自虐ネタに息切らせながら絡んでくんな！うっれしそうな顔しやがって、終(しま)いにゃ殴るぞこの野郎！」

しまった、ついつい反応しちまった！くそ、こうなるとやかましいんだよなー、桑折って・・・・・・あ、なんだろう、急に全部どうでも良くなってきた・・・・・ああ、もしかしてこれが悟りってやつなのか？だとしたら悪くねー気分だ・・・って、ん？んん？何かあっちの方で桑折が怒鳴ってるぞ？だけどな、ふふふふふ、悟りを開いてパワーアップした難波清明をなめんなよ？お前が何を言おうとも、ことごとく無視してやるぜ！

「む！アタシだって、一応女の子ですからね！こともあろーに『野

郎』ってなによ『野郎』って！！そんなことばっかり言ってるからいつまでたってもモゴモゴ・・・・・・・」

ん？どうしたんだ俺の口？モゴモゴして聞こえなかった後半部分無視して、いきなり条件反射？てかまた悪口の言い返し？もう俺だってこれ以上殴られたくないのに・・・・・ないのに・・・・だめだ、せっかく悟ったってのに長年のクセが抜け切れねえぇぇぇ！？

「一応？今お前、『一応』っつったんだよな！？おお、ついに自分でも認めてくれたのか、この超暴力的怪物が・・・・・」

ドゴォォッッッッッ！！

バキィィッッッッッ！！

だ、だから嫌だったんだよ、コイツに減らず口叩くのは！

うぅ、頭も背中も痛いけど、コッチの方をまた顔赤くして睨んできてるのがすんげえ怖ぇぇ・・・・・あ、これはもしかしてあれか？俺に謝れと？今すぐアタシにむかってきちんと詫びを入れなさいと、そーゆうわけか？

・・・・・って、何で俺が謝るんだよ！？喧嘩は先に手ぇ出した方が悪いってのは、世界のお約束だろうがよ！！嫌だね！絶対嫌だ！！

・・・・・・ってあれ？悟りはどこ行ったんだ？なんで元に戻ってんだよ、俺ぇ！

ズガアァァァァァァン！！！

う、うわー・・・・コンクリートに大穴が開いちゃったよ・・・よ、よし。命あっての物種だな、ここは。

「ぐ、ぐうう・・・・す、すいませんでした、全て私が悪うございました・・・・」
「ハア、ハア・・・・・・だ、大体アンタはね・・・・」
「ってまたそのパターンかよ！？」

行動開始！・・・・・・?追跡ｐａｒｔ?（後書き）

この二人の夫婦漫才みたいな掛け合い、いつまで続くんでしょう（笑）。
そもそも、なにしに外まで来たのか覚えてるんでしょうかねえ・・・・
では、また次回～♪

１５：行動開始！・・・・・・?追跡Ｐａｒｔ?（前書き）

そろそろこのイライラするような夫婦漫才編（今作りました。笑）
も今回で切り上げます。
少しは話のペースも早くしていくつもりですからねー。

１５：行動開始！・・・・・・？追跡ｐａｒｔ？

・・・・・・・・・・眠い。

「・・・・・ねえアンタ」

「今度はどーしたんだ？帰るってんならさっさとやってくれ。夜食でも奢るってんなら今持ってきてくれ。・・・・・んで、どっちなんだ？あ、俺としては夜食だけ出してとっとと帰ってくれるってのがさいこＵ・・・・・ああー、えっと、その、・・・・・うぅ、すいませんでした・・・・」

うぅ・・・・・眠いからか口も良く滑る・・・・・あー、それにしても眠い・・・。

「ホンットになんでアンタはそーゆーやつなのかねぇ・・・」

「あん？なんか言ったか？ワリィ、聞こえねえ。ったくもう眠くて眠くて・・・・・眠くて眠・・く・・・ってほあ！？」

「あ、アレ？ちょ、ちょっとアンタ？ホ、ホントに寝た？今寝てたの？ぷっ・・・・・くくっ・・・」

うう。屈辱だ。なんで歩きながら寝るぐらいで笑われなきゃいけないんだ・・・・もう怒っ・・・・怒・・・・お・・・・ｚｚｚ・・・・。

ガツーン！！

「うぎゃあああああ！」

その後？あんなもん、何年たってもおもいだしたくねーもんなの

は確かだな。第一眠いからよく覚えてないし。だからあの辺１０分ぐらいでなんとか知覚できたものは、えと、あれだ、頭の上で星がチカチカーっての（表現が幼稚だ？うるせー黙ってろ！）と、すぐそばで医者のくせに笑い転げるのに必死で俺は完全無視の桑折・・・・・ってふざけんじゃねえ！俺はどう見ても立派な怪我人ってヤツだろーがよ！

「・・・・・・ぐ・・・ぐう・・・な、なあ桑折？一応確認するけど、お、お前って一応・・・あ痛！うう、瘤ぐらいできたのか？・・・お前って一応、外科も内科もやれる医者なんだよな？なんかすっっっっっげえ怪しいモンを感じるんだけど・・・」

「ひい・・・ひい・・お、お腹痛い・・・え？し、失礼ね・・・・・ぷぷっ・・・ちゃ、ちゃんとした医者・・くくっ・よ・・・ア、アハハハハハッ！・・・ひい、ひい・・・」

やかましいわ！何言ってんのか半分しか聞こえないし！だいたい、どんだけツボにはまってくれてんだよ？なに、俺の足になんか付いてんのか？目線下に落としてはいかにも我慢してます風に体震わせやがっ・・・て・・

「ん！？おわぁっっっっ！！？ってかさっきのゴミ箱？」

あー、まあそりゃあ、ゴミ箱に片足突っ込んで、気付かないまま歩き回ってりゃ、笑うだろーね～・・・・・・・・・・・・・・・なんてゆる～く終わらせると思ったのか？ったく、顔赤いだろーな、俺。恥ずかしいわっ！

で、でも、桑折はもう放っとこう。どうやら真面目な話っぽくなってきたな、こりゃ。このゴミ箱、製造番号からいっても間違いな

い。あの時俺が隠れる時に使わせてもらったやつだ。と、なると・・・

「一体誰が・・・誰がこんなもんわざわざこんな真逆のところまで持って来たんだ？」

「へ？何が？」

ああそっか、こいつは知らなかったんだな。んー、どっから説明した方がいいのかねぇ・・・・・・と、そこで、

「あっしですよ、皇帝様？」

いきなり声が掛かった。

ピエロとキング（上）

「んな！？」

・・・・・・お、驚いた・・・・・・。そこには、チビのおっさんが一人立っていた。背が低めなことを除けば、ほんっっっとにどこにでもいそうな、中堅どころのサラリーマン、といった顔立ち。だ、だけど・・・

「う、ウソだろ？気配が・・・・」

くっ・・・。このおっさん、ただ者（もん）じゃねえ。桑折は俺と違って喧嘩慣れしてないから、上手くやれば気付かれないかも知れねえ。だけど、俺もだぜ？この俺までこんな距離に近づいて、しかも声かけられるまで気付かなかった・・・・・あぁ？さりげなく自慢すんな？自慢なんてモンじゃねーよ、これは。あーっ、うん、まあ、喧嘩三昧はともかくとしてだけど・・・な。でも、これだって自慢にゃなんねーよな。

んなことを考えてたら、そのおっさんがもう一度、口を開いた。やたらとうっれしそうに、ニヤニヤと笑いながら。

「キヒヒ。どぉうしたんですかぁ、皇帝どのぉ？あっしのこと、覚えてねーんですかい？」

うおお・・・・・・な、なんというか・・・こう・・

「な、なんというか・・・・・・す、すごいギャップね、あの人・・・・」

・・・・ありがとな、桑折。俺の感じたことを、一言で表してくれて。やっぱ勉強できるヤツは言葉の選択も正確だ、うん。・・・・・・・。・・・・・・・。・・・・・・・・・・・・・。ハア・・。よし、現実にも目を向けよう。イヤだけど。なんかすごい関わりたくないけど。えーと、なんて言ってたっけ？

『覚えてねーんですかい？』

「知らんわっ！！！」

・・・・・・あ、ヤベ。ついついまーた怒鳴ってた。でもなあ・・・・・こんな変なおっさん、一回見たら忘れるワケにもいかんだろ、普通。

と、そこで、おっさんはもう一回口を開いた。顔はそのままだが、口調はがらりと変わる。

「いいのかい、皇帝様？アーッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャッヒャ！」

やっと閃いた。

「・・・・・・・ん！！・・・・・・て、てめえ、あん時の・・・・あんときゃずいぶんと世話になったよな、オイ！」

「――――――どうだい？思い出せたよーだな！すばらしいぞ難波清明！それでこその君だ！僕も頑張った甲斐があったというものだ、ハッハハッハッ！」

く・・・・・や、やりづれえ・・・なんでさっきとはキャラも一人称も変わってんだよ・・・・・って、そうじゃねえ！

「も、もしかしてアンタの知り合・・・」

「ぜってー違う」

桑折・・・・・頼むから、今は口挟まないでくれって。俺だってもう、何が何だかわけわからねえんだからよ・・・。それにしてもこのおっさん、いったい何考えてやがるんだ？

ピエロとキング（中）（前書き）

はい、中編です。
この意味不明なタイトルの理由もここで・・・・・・アレ？出せるかな（笑）？

ま、まあ、とにかくどうぞ～。

ピエロとキング（中）

「・・・・・・・・・・・・。」あ、これは俺。ん？何もしゃべってねえ？うるせー。

「・・・・・・・・・・・・。」んで、こっちは桑折。だからしゃべってねえって？やかましいわ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」これはあのおっさん。意味深な沈黙に見えなくもないけど、こりゃアレだな。自分がスベッたことに今更気付いちゃってすっげえ困っちゃってるタイプのだんまりだな。間違いない。顔赤いし。ちょっと俺らより長いし。

「あ、あの・・・・・・あ、あなた誰・・・です？」

とりあえず、口火を切ったのは桑折。ふむ、ここで『さすが真面目ちゃ～ん！』とかいった茶々を入れるとロクなことがないってのは俺だってわかってる。わかっちゃいるけどやめられな・・・・・ってふざけんなぁ！！思考停止ィッッッ！！！

「・・・・・・それでアンタは何さっきからごそごそ独りで喋ってんの？」

う、聞こえてましたか。さてどんな悪口ぶつければ一番こんな時でも効果があるか、と一瞬不毛なことで現実逃避を図ろうとした俺を止めたのは、意外にもあのおっさんだった。

「その・・・・・し、失礼した。コホン（咳払い）。あ、あー、それで、難波清明君だね？」

えっと・・・・・・せめて落ち着いてから話しかけて欲しいんだけどな。ムチャクチャ気まずいじゃねえか！ったく、しょーがねーからスルーしてやるよ、ここは。ん、そう言や桑折もなんか喋ってたよな、たしか。ぎゃはは、無視されてやんの。

「まあな。んで？俺、一応用事あるんだよ。だからとっとと脇どいてくんねえか？あんまりコッチも今機嫌良くはねぇからさ、怪我しねぇウチによ！」

「ちょっ・・・・・！アンタ、さすがにその言い方はマズイんじゃ・・・・！」

「（はあ！？お前、こんな深夜帯にこんな怪しすぎるおっさんだぜ！？しかも俺は嘘をひとっつもついてねえ。今は急いでて、機嫌が良くねえ。だからこれ以上邪魔するってんならあのおっさんはガチで殴り飛ばす！何が不満なんだよ？）」

「（不満とかいう問題じゃない！・・・・・・でも、アンタそんなにさっきの娘（こ）のこと心配で・・・・・ゴニョゴニョ・・・・・・・・）」

「（ハア？悪ィ、後半からなんて言ってんのかわかんねえ。つか聞こえねえ。もうちょいハッキリ言いなおせこのアホ！）」

「・・・・・ッ！この鈍感ッっっっ！！！」

ハア！？だからその『鈍感』ッてのはどっから出てくんだよ！！

あ、（ ）の中は小声の会話な。

・・・・・・・ま、

「このアホが馬鹿みたいな大声で叫んだ挙句に馬鹿みたいに暴れや

がって、そのせいで全部意味なんざ無くなっちまったけどなぁぁぁぁぁぁ！！！！」

「な、何よいきなりっ！！アンタが鈍感だから悪いんでしょう！！？」

「お、何か！？俺のせいだとでも言う気かぁ！？てめぇどの口がんなこと堂々と言えるんだ！！？」

・・・・・ああ、もちろん忘れてないぜ？完っ全に会話に取り残されたおっさんがこの間ずっと、一っ言もしゃべらな・・・・あー、喋れなかったってだけのハナシだよ、んなもん。まあ、これで会話に入って来れたら十分な勇者だけどな。

「ふむ・・・・・・仕方ない、か。よし・・・・・・『クラブの１０』として忠言しよう！『王（キング）』！『王女（クイーン）』！静まりなさいっ！！」

わ、勇者だ。でも面白くないのは、本当にそれでなんとなく俺達が黙っちまったことだ。まるで、こう、急にそうしたほうがいいような気がして・・・・よ。ま、殴られる前に終わったのは思わぬ収穫ってやつだ。なんだけどよ・・・・

「なあ・・・・、おっさん。あんた一体何者（なにもん）なんだ？」

すると、おっさんはようやく話が通じた、と言わんばかりの笑顔になって、

「ようやく話が通じるようだね、難波清明君。」

「ほぼそのまんまじゃねーか」

「？」

「こっちの話」

いや、どうでもいいことだけどな？

「・・・・・それで？」

「と、言うと？」

「とぼけんじゃねーよ。答えはどうしたんだよ、おっさん？」

「ふむ・・・・・私、か・・・・・どうしたものか・・・・・・・だが、やはり教えないと危険だろうしな・・・・・だが今教えるというのもいささか・・・・・・しかしここでピエロ（ジョーカー）を手放すのも痛い・・・・・さて・・・・・・」

その後もしばらくおっさんは悩んでいたが、やがて意を決したように、

「よし、わかった！いいだろう、では君らにはわかること全てを話しておこう！もうこの際、その方が安全だろう！」

一声叫んだあと、こちらの方を睨むようにして（ちょっと驚いた。あの目つき、そこらへんの不良なんぞよりずっと鋭い）から、おっさんはいきなり話し始めた。

「君たちは、こんな言葉を知っているかね？いわく、『人生はとび

きり複雑だが、所詮ただのゲームでしかない』」

ピエロとキング（中）（後書き）

う～・・・・結局出せなかった（笑）。

でも、次には出しますからねっ！

ピエロとキング（下）

「「人生が・・・・ただのゲーム？」」

ん、ハモったな。まあ別に放っておこう。

・・・・・え？シカトはないだろうって？よーしわかった、正直に言おう。あのな、下手に口出して殴られんのは御免なんだよ、俺だってな！なんか文句あるか！？

「随分、仲がいいようだね。良かった良かった」

おっさん・・・・・た、頼むから！今は口出すなこのアホォォォ！！しかもなんなんだその内容はよおっ！何が！？何がいいんだおっさん！？

「んなことは無（ね）え！」

「ち、違います！！別にそんなんじゃ・・・・・」

「・・・・・どこがだい？まあ、人それぞれなんだろうな」

「やかましいわっ！！な、なあ頼むわ。早いトコハナシを元に戻してくんねーかな？この分だともうすぐ本気（マジ）ギレするよ、俺？ガチでボコスコに殴り回すからね？」

・・・・・おい、桑折。そこまで怯えた顔しなくてもいいだろうが。別に俺だって毎日喧嘩ばっかやってるわけじゃ無いんだぞ？人より断然多いのも否定できないけどよ。

「おやおや、いいのかい？彼女さんに怯えられてるぞ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。へ？今アナタハ何トオッシャイマシタカ？

・・・・・・・・・・・・これは不意打ちだ。不意打ちすぎる不意打ちでまさに不意打ちだ。ん？今何回『不意打ち』って言ったっけ、俺？

「・・・・・・・・・。（絶句）」

「・・・・・・・・・。（〃）」

「おや？まさかこの後に来てまで『違う』とか言い出す気かい？今時珍しいくらい奥手なアベックだね、お二人さん？」

「あ、アベックって・・・・・・もう相当な死語だぞ・・・・・・・」

あ、なるほど。とりあえずツッコミに回ったか、俺の口は。でもそうだよな、今時『アベック』て。

「ん？古いかい？」

「「十分以上に古いわっ！」」

うわ、またハモッた。最悪だ。最低最悪だ。最大級に最低最悪で、まさに最悪なバッドタイミングだ。・・・・・・って、これじゃワケわからん。

うぅ・・・・せ、せめて話を元の位置に戻そう。でないと、俺が人間的にどこか壊れちまいそうだ。

「そ、それで！？いつになったら人生〇ームから先に進むんだ、おい！？とっとと続き言え、続き！！」

「別に人生ゲー〇なんて縮めてくれなんて頼んだ覚えは無いんだがね・・・・・」

「い、いいから答えて下さい！！」

桑折、ナイスアシスト。でもな、さっきのセリフに対してどんだけ怒ってんのかは知らねえけど、顔、真っ赤だぞ。それもムチャクチャ。それじゃあ返って逆効果じゃあ・・・・・ちっ、なら俺がせめてこれくらいは言っとか無ねえとな。

「おっさん？今ハナシこじらせたら・・・・・・マジで人相変わるまでエンドレスで殴る」

さすがにこれで身の危険を感じたのか、やっとおっさんの話は始まった。つ、疲れた・・・・・。

「ふむ。ではさっきの続きだが・・・・・万が一のために聞いておくが、君たちは『人間：パターンT』という言葉を知っているかね？」

え、どうなのかって？もちろん、俺も桑折も黙って首を横に振ったさ。知らねえモンは知らねえよ。ってかおっさん、またキャラ変わってるよな？

「まあ、そうだろうな。その方がありがたい。では、そこから説明しよう。まず、この地球には大きく分けて二つの世界がある。一つはここ、≪シティ≫側だ。そしてもう一つは≪外≫の側。この二つ

の世界はかれこれ数十年間パワーバランスが取れている。これは小学生だって知っていることだ。だが、『おかしい』とは思わないかね？片方が極端すぎるんだよ。地球上の広さ・資源・人口のほぼ全てを持つ『世界』に対し、面積は北海道以下、資源も大したものが採れる訳でもない、人口にしてもせいぜい一万分の一・・・・いや、もっと少ないだろう――――――――こんな≪シティ≫がなぜ数十年も『世界』と互角にやってこれたのか、不思議には思わないかい？」

「ちょ、ちょっと待って下さい！それは≪シティ≫にいるのがＥＳＰだから！そういうことじゃないんですかっ？！」

「ＥＳＰ・・・・か・・・。確かに、それもあるはずだ。そして、そんな環境だからこそ成り立つ超最先端の技術・・・・それの存在も理由の一部だろうな」

「な、なら！！」

「だが」

そう言って、桑折の話をおっさんは遮った。

「それにしてもおかしい。ＥＳＰだって人間だから、能力を使わない状態で銃に撃たれたら死ぬ。直接向かい合ったって、心臓を杭で打つ必要はない。そこらのナイフで十分だ。なら――――――なぜ戦争を仕掛けられていない？有り体に言おう。今の≪シティ≫と『世界』が戦争をしたら、百回中百回≪シティ≫が負ける。ではなぜだ？――――――――――この疑問を覚えておいてくれ、次の説明が少しはすんなり理解できるようになる」

ピエロとキング（下）（後書き）

ア・・・・・アレ？『次の説明』って何？これで『ピエロとキング』篇も（下）だよ？

・・・・・冗談です。ご安心を。ちゃんと説明はやります。しかし、思ったより長くなっちゃったなぁ・・・・・。

『富豪のダイヤ』

と、そこで、いきなり後ろから、声がした。

「アレ？まだ次があんの？いや知ってるけどね覚えてるから？でもさでもさ、めんどうくさいのは何回も何回もソレ聞いてんのに、まーーーた聞くはめになった僕なんだよ？そこら辺どー思ってんの、おっさん？」

・・・・・・・・・・・・ん？後ろから声？今のは俺のセリフじゃない！それと念のため付け加えると、俺はそんなこと思って無え！ただちょーーっと話が長いとか話が長いとか話が長いとか・・・・・・アレ？そ、それと後は・・・・・正直めんどくさいとか正直に言わなくてもめんどくさいとかつまりはめんどくさいとか・・・・・・ってオイ！！やっぱ俺も変わりないじゃねえの！うわー自己嫌悪キツー。

「ほう・・・・。流石（さすが）に『富豪のダイヤ』。メンバーが何代変わろうと、基本の性格は変わらぬか、この泥棒猫」

ん？・・・・・・・・・・・・・・・オイ。

「・・・・・・・・・それ、褒めてんの？まったく、そんなこと言ってるアンタら『人望のクローバー』だってコソ泥のチンピラみたいなことはよくやってきてるんじゃないの？」

・・・・・・・・・・・・・・・オイオイ。

「フンッ・・・・・・一人前に口だけは動く若造か。なるほど、あそ（ダイヤ）

こにはぴったりだな。まさに捨て駒むきの男か」

・・・・・・・・・・・・・オイオイオイ。

「何っ・・・・・！でもなおっさん、僕だってそんな挑発に乗るほど安くは無いんだよ？それに、今回はまだ名乗りに来ただけだから、喧嘩を売る気も買う気もないよ？改めて名乗ろうか――――――――『富豪のダイヤ』一番手・・・・・・能力名は――――――――――」

「お前ら、いいかげんにしろおぉぉぉぉぉぉ！！！！」

長い悪口合戦に業を煮やして怒鳴ってやると、２人とも驚いたような目でこちらの方を向いた。

・・・・・・オイ桑折、んなイタイ人を見るような目で俺を見るな。そしてさりげなく俺から距離をとるな。バレバレだし地味に傷つくぞ。

「清明君――――「へえ？あんた、『清明』っての？んで、今回のそちらさんの王（キング）？まあこれからひとつよろしく・・・・・・ってか？ハッハッハ！！それで？何の用だい？」」

「・・・・・・お前、一体何者（もん）なんだ？」

そう。俺だって、別に人様の話を邪魔するつもりは無い。ただ、ついさっき気配も出さずに俺の背後（うしろ）を取った奴の顔は・・・・・どう見ても明らかに・・・・・・・・

「俺・・・・・？」「アンタ・・・・・・？」

その顔は、髪こそ茶色いものの、まさしく難波清明――――――つまりこの俺そのものだった。

20：『人望のクローバー』

・・・・・・・・おい。おいおいおい。おいおいおいおいおい。いやいや、ちょっと待って？落ち着いて考えてみようぜ、俺？はい、深呼吸。

「・・・・・吸ってー、吐いてー、吸ってー、吐いてー・・・」

ああ、周りからの視線×3人分がひたすら痛い・・・・俺は決して痛い人じゃないんだよぉ・・・・・・・ってうん？3人分の視線？ちょっとまとぇ・・・じゃねえ、ちょっと待てオイ！なんで俺の顔した怪しい奴2号（1号は目の前にいるおっさん）にまで憐みの目向けられなきゃなんねえんだよ！

（えっと・・・・ねえ、クローバーのおっさん？アンタらのとこの王（キング）、ココ大丈夫？）

（む、むう・・・・）

さらっと本人の前で失礼なことを聞くな俺（そこの）。そして答えに迷うなおっさん。完全に傍観者の顔してんな桑折。

「・・・・・お前ら相当ひどい奴らだな」

「いきなり何言い出すのよ！」

「おいおい清明君、どうしたと言うんだい」

「ねえ、そこのそっくりさん？君さ、人に向かっていちゃもん付け

た自覚ある？」

・・・・・お、お前らなあ・・・特に最後のがムカついたぞオイ・・・・あいつ殴りてぇ・・・・！ってか、本気で聞こえなかったとでも思ってんのか？

でも、ここまではまだ俺も我慢してられたんだ。ただあの『俺』がそこで追い打ちを・・・

「んー、まあいいかなー？頭以外は丈夫そうだしね？・・・・・・・これならクローバー（こいつら）は楽勝だな、ボソボソ・・・・・」

・・・・・な？まともな神経なら怒って当然だろ？で、俺は考えるより先に手を出すことを自認するタイプだ。ん？誰だ今「開き直ってるだけじゃん」とか言ったのは？お前から先に殴るぞ！

・・・・・・で、そんなワケで拳を出したんだよ。右の、いわゆるストレートを。で・・・・

「んなっ・・・・・」

「ふーん？まあ、一般人ならこんなもんかな・・・？でも、そんな大したことは無いね？」

俺にとっちゃ確かに、それを止められたのもキツかった。馬鹿にされたのもな。けどな、あのむかつく茶髪の俺が言った『一般人』ってとこに一番腹が立ったんだよ！

少し考えてみろ。一般人？一般人だ！？ならなんで俺たちは差別される！！人にない特殊能力（ESP）があるってだけで、なんで怖がられて、怪物扱いされて、こんな壁（《シティ》）の中でしかまともな暮らし一つできねえ？それでもまだ俺らのことを『一般人』なんて呼ぶ気か！！もう一回そう呼んでみろ！？もう一度俺の前でそれを言ってみろよ！！

「いいよ？・・・・・寝ぼけたこと吐（ぬ）かしてんじゃないよ、この一般人さん？」

「お、お前っ・・・・・！！」

「そんな程度の覚悟で・・・・そんな程度の気分で、この世界に首突っ込むな！？お、お前さえいなけりゃ僕も・・・・・僕も何も無かったんだぞ？！！今、この場でもう一度名乗ってやるからな！？僕は通称『ダイヤの王（キング）』――――――――――能力名（コードネーム）は『限界能力（オーバーヒーター）』

!!難波清明、貴様にこの場で宣戦布告する！」

２０：『人望のクローバー』（後書き）

はい、なんだかもうワケが分からない内容になってますね。
大丈夫、最終的にはまとめ上げます。
では、ちょっとだけ先のヒントを。

Q：『ダイヤ』、『クローバー』ときたら後は何でしょう？

答えはまたいつか、本編で！

『純愛のハート』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・っ！！」

・・・・・・・・・・えーっっと・・・・・・何だ、あのなんかムチャクチャ痛い奴(オレ)は？

え、宣戦布告？今時二人称が『貴様』？あと、『何も無かった』てどゆこと？んーとそれから・・・・ああそうだ、『限界能力(オーバーヒーター)』なんて能力名(コードネーム)、俺聞いたこと無(ね)えぞ？・・・・・・・って俺！よくあんな長いセリフの要点一回で覚えられたな！いや意味はわからんけども！うわ、地味に凹む！！あんなへんてこりんなセリフ覚えちまった自分に凹みまくる！！！

「はあ、はあ・・・・・・・・・・・」

あれ、あちらさんは息切れ？まあ、あんな顔真っ赤にして全力しかも息継ぎナシで叫べば、少しは疲れも出てくるだろーな・・・・。

え？俺たちはどーしたのかって？オーケー、まず一つ目の会話。

「・・・・・・・・・・なあ桑折・・・・」

「・・・・・・何？」

「あの俺似の茶髪・・・・・・なんというか・・・・」

「・・・・・ええ」

「・・・・・・やっぱアレだな、痛い奴だな」

「・・・・少なくともアンタとどっこいどっこいぐらいには、よね・・・・・・」

・・・・・・・やっぱ相当ひどい奴だよな、コイツ？ってか俺そんなに変な事ばっかやってんのか？最近コメントを求めるごとに馬鹿にされてるような・・・・・。まあいい、次だ次。

「な、ななな・・・・・・・・・・・・・っ！！」

「うおっ！？お、おっさん！？どうしたんだ！！？」

「あ、王（清明君）！！不味いことになった！！まさかこんなスタート直後に宣戦布告を叩きつけられるとは・・・・・！」

「わ、わかった！わかったから！いやごめんなさい実はさっぱりわからん！！でもとにかく一度落ち着いてくれおっさん！！」

「あわわわわ・・・・くっ、しょうがない！ゲーム参加を早めさせてでもバランスを取らないと、王（キング）不在で話が進んでしまうんだ！！だから今から我々（クローバー）の場所に来てくれ、頼む！！」

「えぇぇぇぇぇぇ！！？・・・・・・・ってさっぱり分かんねえよっ！！」

なんと、ノリ突っ込み発動！・・・・・・・したくねー。はあ、

話が通じるだけまだ桑折の方がマシだな・・・・・・・。
そう思って桑折の方を見ると、
・・・・・・・・・・・・・・っ！！
「こ、桑折！？」
ウ、ウソだろ・・・・・？なんでまた急に？てかホントに何故？俺ら、誰か悪いこと言ったのか？・・・・・ってレベルじゃねえよな、こりゃ。
ここまで言えば大体の予想ぐらいはつくだろう？・・・・・うん？正直かつ素直に分かりやすく説明しろぉ！？早い話分かんねえんだな！？ったくめんどくせえ・・・・・・・。
要するにな、桑折は確かにさっきの場所に立ってたんだよ。ただ・・・・その・・・つまりだな・・・・
「自分の能力（マジックハンド）思いっきり構えて殺意満々にこっち振りかぶるのはやめろおおおお！！それ最高で３００ｔは出せる手なんだろうがああっ！！マジで死んだらどうするうぅぅっ！！」
あー、説明ゼリフみたいなこと口走った自己嫌悪・・・・・
ってこれさっきもやったよな？
へ、何か言ったか？・・・・・・ん？現実逃避？・・・・・・否定できねえよ文句あるかっ！！今こっちは忙しいんだよっ！

『純愛のハート』（後書き）

え？『ハート』の人が出てきてないって？
じゃあ、ここで一つネタばれを。
・・・・・・薄々気が付いているとは思いますが、そこにいるあの人が『ハート』の王ですよ～。

一つ足りない三つ巴（前書き）

新章スタート！・・・・・・っても時間的にはやっぱり大して進んでませんが（汗）。

まあ、とにかくお読みください。

一つ足りない三つ巴

「お、おい！？いきなり何だってんだ！？・・・・・・・・・・・・・・って わっ！！？」

ボオオオオン！！！

「ど、どうしたんですか、女王（クイーン）！！・・・・・むっ！！？」

バアアアァァン！！！

うわー、２人とも危ないことを・・・・・・・って和んでる場合じゃねえな。むしろ、これは俺が一番危険だな、うん。

へ？桑折がどうしてんのかって？ハッキリ言おう、予想はつく。

いいか？ＥＳＰのこういう大暴走ってのは、わりと・・・・・じゃないにせよ、よくあることだ。数秒前まで何ともなかったのに、いきなり野生の獣――――――まあ、見たことはねえけどな――――――ばりに破壊行為に精を出す。研究者（俺は大嫌いだね。人を化け物扱いして、『研究』なんぞしやがって）の間でも意見が結構分かれてて、まだ仮説しかたってない。ただ、これまでのデータによると、暴走中はＥＳＰの能力（チカラ）が軽く１０倍になり、知能は期待するだけムダな程度にまで落ち込む。元に戻るまでの時間がだいたい３分と某変身巨大二色ヒーロー並みに短いのが唯一の救いだ。

早い話が、あの二人はいまから約三分生命の危機（リアルで撲殺）にさらされるってワケ☆

「さ、さては兄弟！！君まさか余裕ぶっこいてんなぁああ！？」

叫びながらダイヤ（俺）が、結構身軽なフットワークで『腕』の一撃をよける。そのまま倒れこんだ延長線上にいるおっさんと鉢合わせし、一瞬動きが止まる。・・・・・ばかだなあ。

「って傍観者！？」

「当然だろ、阿呆！！俺はココでやり過ごす！」

おう、説明が抜けてたな。今俺は、近くのビルのてっぺんにいる。理由は、その、それが、つまりだな・・・・・

：これより回想シーン：

『あー、説明ゼリフに自己嫌悪・・・・・』

『あ、君がクローバーだね。なるほど、ダイヤ（ウチ）の主君（キング）様そっくりだね！』

『誰だよ！？』

『うん？私は・・・・・なんと『ダイヤ』の者なのだっ！さあ、驚けっ！』

『わーすげー』

『驚いてないなっ！！？君、ちょっと失礼じゃないか！』

『急に言われてもな・・・・・ちょっとコッチ忙しーんだよ』

『おおっ！？お前、来てくれたのか！？』あ、これは俺じゃないよ。似てる奴のセリフ。

『はい！主君（キング）様のピンチとあらばいつだってっ！』

『ちょうどいい！あそこの女が暴走を始めてて、

『大丈夫です、主君（キング）様！わかってます！』

・・・・・・そ、そうか！』

『クローバーの王（キング）、確かに捕獲しましたっ！これより逃がさないよう私は急いで帰還しますっ！！』

『『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・へ？』』

『では、失礼しますっ！主君（キング）様、頑張って下さいっ！！』

『俺はここに置いてくのかよ！？』『俺は連れてかれるの！？』・・・・・ここはハモッたんだよな。内容は真逆だけど。

『では、クローバーの！飛びますから、逃げないどいて下さい！』

『へ？と、飛ぶって一体・・・・』

『行きます！！』

『うおおおお！？』

：回想シーン終了：

んで、今俺の前にいるのが・・・・・・・

「あうう、すいませんでした～・・・・・・・まさか王（キング）がそこまで酔いやすいタイプだったとは～・・・・・」

「ぐう・・・・無理に大声出したせいで余計に気分が・・・・・・・うぅっ・・・・」

・・・・・・・・・なあ、絶対人には言うなよ？薄々感づいてるだろうからバラしちまうが、俺はジェットコースターに乗るだけでマジで胃の中身がリバースする（コホン。失礼したな。これでも気はつかってるつもりだぜ？）タイプの超がつく乗り物ダメ人間なんだよ！

『天翔人』と『機械皇帝』

「うう・・・・・・げほっ、げほっ・・・・・」

まったく、こんなカッコ知り合いには見せられねえな。ああ、ざまあねえ。

と、向かって右のほうからえらくのんびりしてる割に心配そうな声がしてきた。

「あ、あのぅ・・・・・・・き、気分はいかがですか？もう落ち着きましたか～？」

「・・・・・一応な。どっかの誰かのおかげだ」

「そうですか！何よりですっ！良かったあ～・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

おいおい、本気（マジ）かよ！？今時初めて見たぞ、皮肉言われても（たぶん）気付かなくてあんな素直な返事返す奴！・・・・・・こりゃ強敵だな、なんか。あ、深い意味はないから。

「あ、お水持ってますよ！良かったら飲んで下さい～♪」

「いや、遠慮しとくわ。もうさっきよりはマシになったしな」

・・・・・・・・これを発表するのはものすごいヤなんだけど、はっきり言ってこの娘（こ）はまだ信用できない。なんてったってさっきの話ぶりからいってあのそっくり野郎（俺）・・・・・・えっと、『ダ

イヤ』だっけ？そこと繋がってるとこがあるみたいだからな。彼女には悪いけど。改めて見ると結構可愛いしスタイルもいいし（あ、不謹慎だったか？まあ、俺も男ってことで勘弁してくれ）、あのフワフワした雰囲気には見てるだけで癒されるけど、それとこれとは全く別・・・・・・・だ。言い切るパワーが無いのも気のせい・・・・・だろう、うん。

・・・・見た感じ１９ってトコか？少なくとも俺よりちょっと年上だな・・・・・・ゴホンゴホン！！

「あ、そうですか～。じゃあ、とりあえずココに置いときますから、またいる時には飲んで下さい～」

「おう、わかった」

・・・・・・・ああ、罪悪感。礼ぐらいはするべきだったか？ふむ、思い立ったが吉日だな。

「なあ、アンタ」

「はい？私のことですかぁ～？」

・・・・・・・・・・俺とお前しかいないだろうが、廃ビル屋上。独りごとにでも聞こえたのかよ？

「ま、いいか・・・・・・お前、名前って何なの？」

「私の名前ですか～？私は、『天翔人（エアロダイバー）』って言うんです～。あ、あなたのことは知ってますよ、『機械皇帝（マシンエンペラー）』さん～♪」

「いや、そっちじゃなくてさ」

・・・・・・・別に能力名(コードネーム)は聞いたつもりはなかったんだが・・・・。

とはいえ、一つ貴重なことがわかったな。どうも俺の情報、『ダイヤ』の側には筒抜けになってるらしい。

どうも、いつの間にかちょっとした有名人になっていたよーだ。やれやれ・・・・俺、目立ちすぎるのはあんまり好きじゃねえのにな。

「え～？そっちじゃない方・・・・・・ですか～？」

「そ。つまりは本名な。・・・・・そういやお前、『機械皇帝(マシンエンペラー)』は知ってたみたいだけど、俺の本名も知ってんの？」

「あ、いえ～。そっちは誰も教えて貰ってないんですよ～。私もちょっと気になってたんですけど、どうも主君(キング)様に教える気がなかったみたいで、じゃあしょうがないかなって思って～・・・・・・」

・・・・・・ふむ。多分その主君(キング)様ってのが、俺のそっくり野郎のことなんだろうな。まあ、さしあたっては関係ないか。

「変な話だな・・・・・・ま、これも後で考えればいいか。それで、結局名前は？」

「あ、そうでしたね。私の名前はベル・・・・ベル・アラコー・祓(はらえ)っていうんですよ～。べつに呼ぶ時は『祓』だけで構いませんからね～。・・・・・それで、あなたはどんな名前なんですか～？」

あ、ハーフだったのか。言われてみればなんとなく納得。

「おう、俺だな？俺の名前はな、難波清明（なんばあきら）ってんだ」

「わかりました～、清明君ですね？」

「ああ。別に呼ばれ方にはこだわり無いから、それで構わねえよ、祓さん」

「やめて下さい！」

「ほえ？」

・・・・やべ、つい間抜けな返事しかできなかった！でも、何で俺怒られてんだ？

「『祓さん』なんて呼ばないでくださいよっ！清明君の場合は、『祓』だけでいいんですってば！」

「そ、そうか？んじゃえっと・・・・・そりゃ悪かったな、祓」

「そう、それがいいんですよ～」

ふーん・・・・・まあ、人には色々あるんだろうな。別にこっちも悪い気はしねえけどさ。

『天翔人』と『機械皇帝』（後書き）

・・・・・・祓さんがニューヒロインになるかどうかは、読者の判断にお任せします（笑）。

それでは、また次話で会いましょう！

『天翔人』とは何ぞや？

「それじゃ、えーっと、祓さ・・・・・違う、祓？」

「はい～？あ、もしかしてまた吐き気とかですか～？」

・・・・・いや、お前の中で俺のイメージはどんな風になってんのかと。俺はそこまで体は弱くねえぇ！弱いのはあたm・・・・・・んだと？

ここんとこ誰かは知らねえけど、なーんか馬鹿にされてるような気が・・・・するのは俺の気のせいか？

「いや、そーじゃなくてだな。これから俺、どうすりゃいいんだ？どっから降りろと？」

うん。とりあえずそれが最重要命題ってヤツだな。ここはあくまでも廃ビル。深い意味は無いが繰り返そう、ここは廃ビルだ。この位置から見える唯一の階段は瓦礫っぽいもので見事に埋まっちゃってるし、ハッキリ言って『機械皇帝（マシンエンペラー）』も役に立たない。てか立ちようがない。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・な、なあ祓？なにその無駄に怖い沈黙？ま、まさかとは思うけど降りられないとか言うんじゃ・・・ないんだ・・ろう・・・・な？」

「・・・・・・・・・（コックリ）」

「何ぃ！！？マジ話かぁ！？」

「あうぅ・・・・・すみませ～ん・・・・あの、許して・・・・・・もらえませんか～？」

・・・・・・・・いや、そんなストレートな謝罪（可愛い）なんて反則だろうが。今ちょっと心拍数上がったぞ俺。我ながら情けねえ・・・・。

「な、なあ祓？お前さっき言ってたよな？私の能力は『天翔人（エアロダイバー）』なんですよ～とか何とか。祓の『天翔人（それ）』って、一体、具体的にはどんな能力（チカラ）で、何ができるんだよ？」

「あ、さっきの話、覚えててくれたんですか～！嬉しいです♪」

「・・・・・・・いや、まだ5分と経ってないぜ？嬉しいも何もあったもんじゃないんじゃねえのか？」

「そんなことないです！」

そ、そうなのか？そんなもんなのか？・・・・・・じゃなくてっ！！

「祓・・・・とりあえず人が聞いたことには答えてくれるとありがたいんだが」

「あ、す、すいませんです～。えーっと、『天翔人（私の能力）』に出来ることをまとめると～・・・・・」

その後の話を俺流にまとめてみると・・・・・うん、こんな感じかな。（多分）間違っちゃあいないだろう。

？『天翔人（エアロダイバー）』とは、ざっくりした区分で言うと空中浮遊形である。

・・・・・・当り前じゃねえか。なんでこんなのまとめてんだろ、俺。

？原理としては、まさに『ダイバー』。具体的にどんな物質を使っているかは自分でもわかってないらしいが、『エアー』が続く限り空気中に『潜る』ことができ、『潜って』いる間は空中で好きなように『泳げ』る。

・・・・・・ん？さっぱりわからん？今時誰も言わないよーな体育会系コメントで返してやるよ。それ曰く、

「ンなもん気合と根性で強引に読み切れや！！」異常。・・・・・・もとい、以上。って、もうワケわかんねえな。失礼した。

？一度『エアー』が『切れる』と、だいたい３０分～１時間は『潜る』ことができない。
・・・・・よーするに、弱点はあるってコト。ま、どんな能力（チカラ）でも共通のお約束だな。どんだけ便利でも、なにかしらウィークポイントはあるワケだ。かくいう俺のもな・・・・って、これは前も説明したよな？

「んで、祓は今さっきの移動で『エアー』が切れてるから当分空は飛べない、と。そーゆーワケだな？」

「はい～・・・・・そーゆーワケなんですぅ～」

・・・・・・・ったく、どうしよっかねぇ・・・・・。

『天翔人』とは何ぞや？（後書き）

なんか祓さん、これまでの登場人物の中でも一番能力（チカラ）の説明が細部まで語られましたね。

あ、いや別に、清明君や桑折さんの分がロクに考えてないとか、そんなことは全くないですよ、ないですからね（汗）！！

・・・・・てな冗談はさておき。次回も、読んでくださると嬉しいでーす！

25：どう降りるべきか・・・・

「んじゃさ、祓。ちょっと聞かせてもらうけど、ホンッットに今の祓には、何にも出来ることが無いってワケ？」

「うぅ～。そんな言い方はストレート過ぎますよ～」

「・・・・・・・あー、俺が悪かった」

我ながらのんびりした会話だとは思うぞ？でもなぁ、真面目に考えたら考えたで・・・・・・・

：これより回想シーン：

『チッ、せめてラジコンカーの一台でもありゃあなんとでもなったってのに・・・・』

『私の責任ですね～・・・・・ハア・・・・・』

『ヘリでも飛んで来ねえかなー・・・・・・』

『すいません～。ココ、≪シティ≫でもトップクラスで人通りが少ないことで問題になってるような場所なんです～・・・・・これも私のせいですね～・・・・』

『懐中電灯が一本あればいいんだけどな・・・・・』

『そんなレトロな道具、博物館にでも行かないと置いてないですよ

～。やっぱり私がもうちょっと荷物を持ってきていれば～・・・・・』

『・・・・・・・・・・・・・。』

：回想シーン終了：

・・・・・・な？わかるだろ？祓、妙な所で真面目すぎ。あと背負いこみすぎ。その後一人で落ち込んじゃって、フォローすんのがまた大変だったんだよなー。

これから祓の前に出る時は、独り言にも気ぃ付けないとな。

「祓、なんかいいアイデアとかあるか？」

「うう・・・・・わざわざ気を使ってもらってありがとうございます～。・・・・・・そうですね～、『エアー』がたまるまで待っているなら、あと２０分はかかりますから～、その他の方法だったら～・・・・」

「だったら？」

「でも、これやるのは多分止められそうですし～、もし本当にやったら私、清明君に嫌われちゃいそうですし～・・・・・」

「？一体どんな奥の手があるってんだ？」

「はい～。そのぉ～・・・・」

「？」

「この携帯で『ダイヤ』の他の人に連絡を～・・・・・

「できればやめてくれ」

・・・・ですよね～」

・・・・ちょっと期待したじゃねえか。せめてもったいつけずにさっさと言ってくれ。まあ、いまだに『ダイヤ』だの『クローバー』だのはよくわからんけどな。でも、ここはやめといたほうが無難だろう。

「てか祓、携帯なんて持ってたのか？」

「あ、はい～。決まった所にしか繋がらないようにロックはかけられてますけど～」

その機能、確か小学生の防犯用だったような・・・・・まあ、いいか。本人も特に不便はないみたいだしな。

・・・・いや、今は思いっきり不便だけどな！！

「ちょっと貸してくれないか？」

「え、いいですけど～・・・・・どうせ誰にもかけられないですよ～？」

「ほい、センキュ。すぐ返すから。・・・・・・・・あのな、俺を誰だと思ってんだ？」

「え？清明君は・・・・・・あ～！！」

「まさか『忘れてた〜！！』とか言うんじゃねえだろうな！？」

「きれいに忘れてました〜！！」

「やっぱそうだったのかよ！」

・・・・・・・祓、けっこう天然も入ってんのな。さっきまで『機械皇帝（マシンエンペラー）』連呼してたじゃねえかよ。

２５：どう降りるべきか・・・・（後書き）

・・・・・・・・また悪い癖が出た。全然話が先に進まない（汗）。

急展開！？

「さて、と・・・・・・」

俺は、改めて祓のケータイ（色が紺色なのはあえて問うまい。『見た目のキャラにあってねえ！』とかいちいち言い出すほど俺は子(ガキ)供じゃないつもり・・・・・だからな、うん。でも、やっぱもうちょいカラフルな方が似合うんじゃねえかな？）を眺める。

「見た目は普通の携帯っぽいな（・・・小学生用機能内蔵なんて見たこと無いからよくわからんけど）」

「はい～。そうみたいですね～」

「特に重さも普通のものと変わらん気がするし」

「そうなんですかね～」

「あれ？もしかして祓、普通の携帯って持ってなかったりする？」

「は、は恥ずかしながら持ってないです～・・・・・」

「で、それも実はほとんど使わなくて、実質ケータイ持ってないに等しい状態？」

「な、なんでバレちゃってるんですか～？」

「図星か・・・・・んじゃ俺と同じだな。ま、俺は最初(ハナ)っから持ってねーけど」

「ええっ！清明君も持ってないんですか～！？」

「いや、そこまで驚かなくてもいいだろ！ちょっとヘコんだぞ今」

「い、いえいえとんでもないです～！悪口のつもりは全然～！（た、ただ、あの、清明君と同じっていうのが嬉しくて～・・・・）」

「？何か途中から良く聞き取れなかったけど・・・・何て言ったんだ？」

「何でもないんです～！あ、清明君は忘れて下さい～！！」

「？？」

なんか急に一人で顔真っ赤にして盛り上がって・・・・・どしたんだ祓？

「そ、そんなことより～！ま、まだ準備は終わらないんですか～！」

「・・・・・・あ、忘れてた。スマン」

「忘れないで下さいぃ～！！」

「冗談冗談。もう精神集中も済んだからな」

・・・・・よし、それじゃ軽～くやってみますか、ね。『機械皇帝（カラ）』、上手くいくといいが。

「よっ、と・・・・・」

俺の手の中の携帯を『機械皇帝(マシンエンペラー)』のイメージで包み込み、一気に俺の手中に納める。・・・・・・・・よし、成功だ。

「オッケ・・・・それじゃ、次いってみるぞ。まず、この携帯には、どんな迷惑な機能が組み込まれてるのか調べて・・・・・ッ!!グッ・・・・!」

しまった!これは最初(ハナ)っからただの罠(ブラフ)かっ・・・・・・!!

そう思うより早く、俺の意識が急に沈みはじめる。単純に麻酔でも手のひらから打ちこまれたか、それとも俺の『機械(チカラ)皇帝(チカラ)』がかかった時に現れるようにセットした『呪い系』ＥＳＰの能力でも仕込まれてたか・・・・・ん?何か聞こえる。どうもそれは、祓のひどく慌てたような声だった。

「え、あ、清明君〜!?どうしちゃったんですか〜!?」

嘘をついてるようには聞こえない。・・・・・となると、祓は何も知らなくて、誰か他の奴がこんなことを考えついたのか?ああ、だめだ。もう、感覚・・も、なくなって・・・きた。ただ・・・、とりあえず・・・・死には・・しない・・・だろ・・う。そん・・・・な・・・気が・・する・・。

急展開！？（後書き）

ええ、わかってます。いつも以上に強引に話を動かしちゃいましたね。

はい、反省、も・・・・・してるん・・・・・・・・で・・・・（笑）。

腹黒の黒幕（前書き）

お待たせしました、取り残され組（笑）の出番です。

あ、それと祓さんの名前を『ロベルト・アラコー・祓』から『ベル・アラコー・祓』へと改名しました。

ロベルトって男性名だったんだね・・・・・。

腹黒の黒幕

その頃。

ブンッッッッッ！！――――――――――――――――――――ズゴォンッッッッッッッ！！！

「くっ・・・・・・・不味い、このままだとあの者の精神がっ・・・・・・！」

「ヘイ、おっさん！まずは自分の心配でもしたら・・・・・

ボオンッッッッッ！！

おっと、危ね！・・・・・・どうだいっ？」

・・・・・・・あの二人は、まだ同じことを続けていた。すなわち、桑折もまだ暴走中である。

――――――――――――――――おかしい。

ふと、彼の頭をそんな考えがかすめた。

まず、暴走の時間が異様に長い。どんなＥＳＰでもそれがＥＳＰである限り一度は経験する暴走だが、どんな例でもまず3分もすれば元に戻る。なのに彼女はもう、かれこれ１０分は暴れ続けている。つまりこれが意味するものは――――――――

ダアアアアアアアンッッッッッッッ！！！

「・・・・ぐぁっっっっ！」

そこまで考えた時、タイミング良く右肩に痛みが走る。見ると、肩口の骨が折れていた。そしてその痛みは、

――――――――――やはり、何かがおかしい。

その考えをさらに強めさせた。

・・・・・なぜ、ちょうど考えがまとまってきた瞬間を狙い澄ましたかのように命中した？確かにこちらの動きもやや鈍っていたかも知れんが、それにしても・・・・・

そしてその時を狙ったかのように、横から飛んでくる声。

「へへ、御老体？もうへばってきたとか・・・あらよっと・・・・言うんじゃないだろうな？」

そのタイミングの見事さ、そして振りむいた瞬間ちらりと見えた彼の奇妙な動きに、

――――――――――そうか！そういうことだったのか！！

彼の頭の中で、今夜起きたことが全て一本の線で繋がった。そして、

「もう良いぞ、『ダイヤ』の。全く・・・・・・大したトリックだったな」

横にいる敵に、声をかける。すると、

「へー、もうバレたんだ？なかなかやるんじゃない、おっさん？」

いまだに余裕を失っていない、落ち着いた返事が帰ってきた。と同時に、桑折の体が糸の切れた操り人形のようにその場に崩れ落ちる。

「けっこう自信あったのになー・・・・なあおっさん、いつから気付いてたんだ？とは聞かないけど、これは聞かせて貰うからな？・・・・・・・なんで気付けたんだ？」

「思い返せば、いくつかおかしなことはあったさ。まず、お前が『クローバー（われわれ）』に対し宣戦布告を突き付けた時。あの時確か、自分のことを『限界能力（オーバーヒーター）』だと言ったろう？」

「あー、なるほど・・・こりゃこっちのミスだな」

「『限界能力（オーバーヒーター）』・・・・・確か、『目で追える範囲全ての力を、物理条件をはじめとするいかなる制約も無視して増幅させる』能力（チカラ）・・・・だったかな？なら、話は簡単だろう。初めに何を考えていたかは知らないが、そこの彼女があのタイミングで暴走を始めた時に気が変わり、その『暴走』の力を『限界能力（オーバーヒーター）』させた。そして、そこで・・・・」

「さっきの女・・・・祓に難波清明を連れて行かせるための時間稼ぎとして俺はここに残ったと？そんなとこだな？」

「・・・・・まだ裏でも？」

「いや、大体同じだよ？全く大したモンだからね、おっさんは？ただ・・・・・・」

「・・・・・ただ？ただ何かね？」

「決定的な勘違いが一つあるんだよ、おっさんの推理にさ・・・・・・まだわかんない？要するにさ、俺は時間稼ぎじゃなくて・・・・・」

「ほう・・・・・（・・・・・な、何を仕掛けるつもりだ！？）」

「初めからおっさん目当てでここに残ってたんだからな？」

「なっ・・・・・・！」

次の瞬間、彼の目の前にいきなり現れた『限界能力』の繰り出した右の拳が腹に重い音と共に命中し、意識があっさりと消えていった。

ＳＳ：空飛ぶ彼女のサイドストーリー（前書き）

ちょっとばかり新しいことにチャレンジしてみました・・・・・けど・・・・・この人の視点疲れる！書いてて疲れるよ！しかも上手くいかなかったし！

・・・・てなわけで、祓さん視点での話は今のところこれ以上書く気はありません。まあ、反響でもあったら別ですけど（笑）。

SS：空飛ぶ彼女のサイドストーリー

あ、どうも初めまして・・・・・・じゃなかったですね～、こんばんわ～・・・・アレ？よく考えたら今が『こんにちは』の人もいるんですよね～。それと・・・あ！忘れてました～、おはようございますの人、おはようございますです～。

あれ、でもこんなに挨拶ばっかりしてもしようがない気もしますし～、え～っと・・・・・もう何でもいいですぅ～！

とにかく、いま大変なのは清明君なんですからっ！

～ちょっと回想～

う～、最初からおさらいしてみましょうか～。清明君は携帯と格闘中だし、大人しくしてましょう。

まず、ついさっきまで。せっかく私が『天翔人（エアロダイバー）』で飛んだのに、途中で『エア』が切れちゃって～、それで、その～・・・・・、とりあえず不時着をして、それはただ単に準備が足りなかった私のミスなのに、どこかで察してくれたのかわざと酔ったフリをしてくれて（※1）。

・・・・・・私、いつもいつも『ダイヤ』の皆さんにも同じようなことで迷惑ばっかりかけていて、だからその時も、怒鳴られたりしても文句は言えないですけど～、でもやっぱり哀しいでしょう

ね～、なんて考えていたんですけど、だからあの時は本当に、本当に嬉しかったんです！
・・・・・まあ、ちょっとその様子が可愛かったので後で軽くいじっちゃいましたけど。きっと許してくれてます・・・・よね～。

それで、その後に私、清明君に名前を聞かれたんですよ～！
それまで私達『ダイヤ』の中で清明君はあくまでも『機械皇帝（マシンエンペラー）』だけでした。・・・・・・ただ、清明君本人は自分がわりと有名人だってことを知らなかったみたいですけどね～。なんでなんでしょう？
でもとにかく、その時からあの人は私の中でＥＳＰ：『機械皇帝（マシンエンペラー）』から人間：難波清明（なんばあきら）になったんです～。
・・・・・まあ、最初にさん付けで呼ばれたのにはちょっと寂しかったんですけどね～。でも、これも自分で自分の心がよく分かりませんよ～。だって、『ダイヤ』メンバー含む他の知り合いからは普段さん付けで呼ばれていて、それで別に気にならなかったし、逆に呼び捨てにされるとちょっと怒るぐらいだったのに、清明君にもそう呼ばれると、何というか、ちょっと距離があるみたいで・・・・・・・ヒャッ！？わ、私今なんて言いましたか！？
うぅ～・・・・は、恥ずかしいですよ～・・・・・・。

え、えっと、そ、それから2人で少しお話して～、あ、それもす

ごく楽しかったんです！
確かにあまり大した話はできてません（主に『どうやって降りようか』が主題（メイン）でした～）けど、なぜか楽しかったんですよ～。私がミスをしたせいでこんな助けもないようなところに降りたのに、私のことを全く責めたりしないで前向きに色々考えてくれて、しかも私が存在すら忘れていた携帯に遅まきながら気付いた時も本気で怒る様子が全然無くて～・・・・・私、あの間ずっと嬉し泣きを堪えてましたから～。清明君って、本当はすごく優しい人なんです～。

～回想終わり～

それで～、それから私が外を見ていたら、急に清明君が携帯を持ったまま倒れちゃって！い、一体どうしちゃったんですか～！
そうすると、そこで、彼の握っている右手からどこか聞き覚えのある音楽がしました！え～っと、確か、これはどこで聞いたんでしたっけ～。え～っと・・・・・・あ、私の着メロでした～。もうほとんど使ってない携帯なもんですから～・・・・・。
・・・・・でも、私の携帯にかかってきたなら、やっぱり私宛ての電話ですよね～。とりあえず、出てみますか～。
私は、電話を耳に当てました・・・・・・けど、何も言ってきませんね。おかしいですね～、まだ着信は鳴ってますのに・・・・・。
え？通話ボタンを押すことを思い出すのにどれ位かかりましたか

って？

・・・・はうぅ・・・・それ、言わないとダメですか～？できれば言いたくないです～。

ＳＳ：空飛ぶ彼女のサイドストーリー（後書き）

（※１）：彼女の脳内での難波清明像は、若干美化されてます。そのための勘違いです。マジで彼は酔ってました。

次回、ここで彼女のとった電話を軸にして話を動かしてきます。さあ、電話したのは一体誰でしょう？分かった人はぜひコメントを！

黒幕と電話（上）（前書き）

わーわーわー！！
今回、ビッグニュースがあるんですよっ！！
なんとなんと、ついにこの『四方山』も、累計２０００アクセスの壁を突破！
これまでこの拙い話を読んでくれている皆さん、本当に、心の底から感謝です！

では、これからもよろしくお願いします！

黒幕と電話（上）

「さて、と・・・・・・・そろそろだな、きっと？」

再び舞台は変わり、例の路地裏。３つの影のうち２人は倒れていて、１人だけが立っている。

そしてその１人は、ゆっくりと携帯電話を取りだした。

――――――――――――もうそろそろ、『クローバー』も自滅しているころだろう。

そう思うと、自然と笑みがこぼれてくる。――――――――――

その影は、通称『限界能力（オーバーヒーター）』、あるいは『ダイヤの王（キング）』と呼ばれている。

一方、（廃）ビル屋上では。

プルルルルル――――プルルルルルルルルル――――――プルル
ルルルルルルルルル――――――・・・・・

（中略）

プルルルルルルルルルルル――――――ピッ！

「は、はい～！遅くなってごめんなさい～！と、ところでそちらはどちら様ですか～？」

『・・・・・3分もかけてやっと電話に出たうえに、こっちの名前も確認してないのかよ？』

「え、清明君ですか～！！？・・・・・あ、でも、ちょっと声の調子が違いますね～・・・あ、ま、まさかもももしかして主君様（キング）ですか～！？」

『なんなの、その取り乱し方はさ？それに、僕はそこに伸びてるであろー無能な王（クローバーのキング）の名前を教えたことは無いはずだけど？』

「あ、すいません～・・・・・・清明君が教えてくれました～・・・エヘヘ」

『フン・・・！まあ、後にしておいてやるから、とりあえず一つ確認させてもらうぞ？そこに今、『機械皇帝（マシンエンペラー）』はいるんだろうな？』

「あ～！それなんですよ主君様（キング）～！！い、今ビルの屋上で、それで降りるために私の携帯を渡したら清明君がいきなりバタって倒れちゃって～！」

『じゃあ、今もそこにいるんだな？』

「え？は、はい～。そうですけど～・・・・・・」

『ククク・・・・こんなに面白いことはそうそうないね、こりゃあ！？正に予想通りじゃないの、僕！？ハッハッハッハッハ！！！』

「へ？あ、あの・・・・主君（キング）様～？ど、どうしたんですか～？」

『ん？まあ後で説明してやるからな？よし、とりあえずお前には命令を下させてもらうぞ、はーらえさん・・・・・じゃないな、『祓』だけでいいんだっけか？クククククッ』

「・・・・・やめて、もらえませんか～？いくら主君（キング）様でも、私の名前を呼び捨てにしないでください～」

『ほう？そこの奴には『呼び捨てでいいんです！！』とかなんとか言ってたのにか？ククク・・・・本当に分かりやすいな、ウチの祓さんは？・・・・・・まあ、こっちも少々急いでるから、早めに用件に入らせてもらうぞ？いいな、もうすぐそっちに『ダイヤ（ウチ）』の奴が来るはずだから、そうつが来るまで万が一にも『機械皇帝（マシンエンペラー）』の意識が戻らないようになんとかしとけ、わかったな？』

「あ、あの・・・・・・」

『ん？何かあったのか？』

「清明君は・・・・・清明君は、どうなっちゃうんですか～？」

黒幕と電話（上）（後書き）

さあ、どうなっちゃうんでしょう（笑）。

それでは、次回で会いましょう！

またアクセス数が３０００超えたら報告（自慢）しまーす♪

３０：黒幕と電話（下）

『清明君は・・・・・清明君は、どうなっちゃうんですか～？』

聞こえた瞬間、僕はついつい電話を切っていた。・・・・・・・本当につまらないことだ、そうだろう？

・・・・・・一分後。

僕の携帯が鳴っていた。・・・・・ま、まさか祓の奴、あっちからかけてきてんのか？

・・・・・・あの野郎がぁ！つい一分前『起こすな、待ってろ』的なこと僕言ったよね！？言ったんじゃない！？てか言った！なのに堂々と電話ですか！？音うるさいよ！？

「ふ～ざ～け～んなよ！！あの女（アマ）ぁ！」

怒鳴りながらも、一応誰からの電話かチェック。よくある展開だと実は全く違うとんでもないお偉いさんからの電話で、そうとも知らず怒鳴りつけたアホ（悪役）が恐縮しまくるんだけど。

・・・・・いや、勘違いしないでほしいなー？僕は『ダイヤ』の頂点（トップ）だからね？だからンな展開ありえないんだけど、まあ僕にだって人間かんけーってもんがあるんだからさ？ね、わかるだろ？

・・・・っておっと、肝心の携帯を無視したまんまだったね。

「で、どちらさんですかーっ、と？」

《ベル・アラコー・祓》

・・・・・結局アンタかいっ！？いや、予想はしてたけどさ！？ふと思った。

「ああ、もしかしてこれ出ないとずっと鳴りやまないのかなぁ・・・・・？」

だとしたらもういいや、出よ。それボタンをピッ、と。

「やかましーぞ、はら・・・・・・」

『あ、やっと繋がりましたね～！なんで出てくれないんですか主君（キン）様（グ）～！！』

うわー！！とんでもない大音量だよー！？もっかい聞きなおそう。僕、『静かにしてろ』的なコト言ってたよねー！？何なんだよこの命令無視っぷり！？むしろ爽快だね☆

・・・・・・・って、阿呆がぁぁぁぁぁぁ！！！？爽快なんかじゃないよ！？

「あ、あのな祓、せめて静・・・・・・・」

『あ、それと！私にはきちんとさん付けで呼んで下さいって確かつい一分前にも言ったじゃないですか～！？』

・・・・・・ヲイ、お前がそれを言うのかと。何を偉そうに吐（ぬ）かしてんだと。ねえ？

でも、そこにケチつけたら余計に騒ぐだろうし、まあ聞かなかったことにしよう。・・・・・・これが一番マシな反応ってもんじゃないの？

「なあ、わかったからさ祓・・・・さん、とりあえず静かにしてくんないかな？」

『あ～！わ、忘れてました～。そういえばさっきもそんなこと言ってましたね～』

「・・・・・・やっと思い出したのかよ？」

やれやれ、これで一息つける。そう思ったのもつかの間、

『はい～。・・・・・・あ～！そういえば～！あの主君（キング）様、清明君は結局どうなっちゃうんですか～！？まだそれを聞いてませんよ私～！』

「チッ・・・まだ覚えてたのか？」

『忘れませんよ～！ってアレ？今チラッと見えたあれってまさか・・・・・』

「お、やっと着いたのか？ご想像通りの物だけど？・・・・・それじゃなっ！」

言うなり、光の速さで携帯を電源ごと切り、さらにポケット奥深くにしまいこんで財布で蓋をする。はあ、はあ・・・・・こ、これくらいやっとけばさすがにもう連絡はできないだろう・・・・・・ね？

３０：黒幕と電話（下）（後書き）

いやー、彼も色々苦労してるんですねぇ（笑）。

それでは、次回もよろしくです。

舞台変更（前書き）

えーと・・・・・ハイ。３０話も引っ張っていきなり昼になりました。
だから、今までの話は全部一夜のうちに起きた出来事です。
作者もきれいに忘れてた・・・・（汗）時間かかり過ぎだろ・・・・・。

舞台変更

・・・・・・・暗い。寒い。テンション下がる。
え、何かって？目ぇ覚ました時の第一感想だけど何か文句でも？俺低血圧気味なんだから、起きぬけは弱いんだよなー。てかどこだよココ・・・・・。
と、横から聞き覚えのある声がした。それも２つ。
「お、目が覚めたかね王（キング）？」
「まったく・・・・・アンタはいつまでグースカ寝てれば気が済むのよ！」
・・・・・・・あ、めんどくさい奴らだ。でも、ここで二度寝（シカト）したらまーーーーたなんて言われるかわかったもんじゃねえしなぁ・・・・・あー、やっぱ起きなきゃよかった。ごー、よーん、さーん、にーい、いーち・・・・
ハイ、後悔タイム終了。これまでのパターンからいくと、あと５秒以上の放置で桑折の『手』が飛んでくる。朝っぱらから痛い思いで目が覚めるのはまっぴらだ。
「・・・・・よお、おっさん、桑折」
「なんで私が後になるのっ！！」
「・・・・・・起きたのが間違いだったな、うん」
「どういう意味よ！？」

「いんや、別に」

「・・・・・・・・君たち二人はどこに行ってもその調子なのかい？若いねぇ・・・」

「「うるさい！！！」」

顔を赤くしてうつむく桑折に（どうせ怒ってるんだろうなぁ・・・・・んで、きっと俺が殴られる・・・・ハア）、はっはっはとのんびり笑うおっさん。ああ、何でこの部屋はこんなに狭いんだ・・・・・ん？この部屋？ああそうだそうだ、すっかり忘れてたぜ。

「おっさん、ちょっといいか？」

「うん？どうしたんだい？」

「結局俺はまだここがどこかわかんねーんだけど・・・・・どこだここ？」

「予想はつく・・・・・な」

なんなんだそのハッキリしない物言いは。わかりにくいぞオイ。すると、多分そんな顔をしていたのだろう、おっさんも言葉を付け加えた。

「まあ考えていることはわからなくもないが、まだ情報が無さすぎる。いいかい、これはあくまでも『予想』だということを忘れないでほしいのだが、ここは恐らく牢の中だ」

「牢？つまり、いわゆる牢屋のこと・・・・・ですか？」

なんだ。俺より先に起きてた桑折も知らなかったのか。
それにしても、俺も入れて誰も驚いてねえな。まあ、桑折はあの暴走後どうなったかは知らねえけど、まだ反動で今一つ頭が働いてないだけだろ。

「ああ。ただ、もうひとつ言えることがある。ここがどこにせよ、とにかく≪シティ≫の内部だ。それだけは言える」

「証拠は？」

「まずこの壁・・・・この金属は、まだ≪外≫の技術では加工ができないほど量が少ないレアメタルだ。つまり、これは≪シティ≫の人工モノということだ。それに、今の時間帯だ。まだだいたい昼の1時といったところ・・・・・壁でも越えない限り、仮に≪外≫に出るにしてもまだ手続きの最中だろう。こんなところだが？」

「で、ここからの脱出は？」

「まあ無理だろうな」

「？ここは見た感じ電子ロックだぞ？なら俺が一発『機械（チカラ）皇帝』で解除してやれば・・・・・」

「いや、この金属は少々特殊な性質を持っていてだな。それは難しいだろう」

「ん？漫画やゲームみたく『この中では能力（チカラ）が使えない～』とか、そんな感じのオチでもあんのか？」

「いや、開けようと思えば開けられる。ただ、ここから出た瞬間バレるだろうな。この金属は音を非常に伝えやすい。その普通の靴では、一歩歩いただけで靴音が響き渡るだろう」

なるほどねぇ・・・・・『出ようと思えば出られる』ってのが、余計にイライラするな。

「あの、じゃあここの中の人は、どうやって歩いているんですか？」

「ふむ。恐らく衝撃を吸収できるような靴でも履いているのか・・・・・あるいはどこかで普通の床になっているのか・・・・さすがにオートで動いている、ということはなかろう。とにかく、王の能力（キング チカラ）から言ってもリスクが大きすぎる」

うーん・・・・どうすっかねえ？

脱出間の暇潰し？（前書き）

今回、ちょいと清明君がぶっ壊れてます。
内容も大したことないから、別にここだけ飛ばして読んでも構いません（笑）。

脱出間の暇潰し？

「どうすっかねえ、と言われてもな・・・・・ふむ、少し考えさせてくれ」

よーするに静かにしてろってことか？りょーかいりょーかい。のんびり待っててやるよ。

～15分経過～

あ～・・・・・・・ヒマだ。ひまヒマ暇だ退屈だ。つまらん！まったくもってつまらん！つまらんぞぉぉぉぉ！！！！！・・・・・・・・↑誰ー！？

あん？ついにお前も壊れたかって？ったく、えらい言われようだな。ちょっとふざけてただけじゃねえかよ。・・・・・え？ならせめてもうちょい面白いのをやれと？ンなもん面白くもなんともないと？・・・・貴様ら全員やかましいわぁ！！今すぐ帰れぇぇぇ！！はぁ、はぁ・・・・。

「・・・・・・ア、アンタ、さっきから何一人で膝抱えてぶつぶつ言ってるのよ・・・・・？」

・・・・・ドン引きされた。精神的にだけじゃなく、物理的にも離れていってる気がするぞ。しょうがねえ、おっさんにでも話振ってみるか。

「おっさん、どうだ？なんか思いついたか？」

「・・・・・・・・・・。」

はい、無視もらいました。いや、いらねえから。ったく、することねえなぁ・・・・・。

「そんなに暇なら、この部屋でも調べてみたら？そんなグチグチ言われるといいかげんイライラするのよ！！」

まあ初対面の奴がこの怒りよう見たら違った感想持つんだろうが、あいにく俺とはけっこうな腐れ縁だからな。これがあんま長続きしないことも知ってる。いっぺん怒ったフリじゃねえかと思ったこともあるけど、さすがにそれはないだろう。

「センキュー、桑折。それじゃ少し嗅ぎまわってみるか」

しかしあれだな、ゲームとかでもよくありそうな展開だな、こんなのって。で、こんな部屋に実はアイテムが隠れてたり・・・・・・え、現実と空想の違いぐらいわかれって？でも大体、牢屋（こんなとこ）に閉じ込められるなんて、普通誰もやられたりしねえだろ？なら、これだけでじゅーぶんゲーム的じゃねえか。

「さて、と。なんか見つかっかねぇ・・・・・・」

俺は早速見回り開始。おっさんは黙想中。・・・・・・ん？桑折は？

「なあ、そういや桑折は今何か頑張ってんのか？」

「え、私？私は今・・・えっと・・・・料理・・・・・かな？」

「はあ！！？何やってんのかと思えば、お前今までメシ作ってたのか！？アホだなアホ！」

はっ！マズイ、前方から殺気！・・・・・・・ん？ちょっと待てよ？

「べ、別にそんなこと今してるワケない・・・・・・

「ちょっと待て、桑折！」

・・・・な、何よ急に！！」

『何よ』だ？決まってるだろ！・・・・・・・まあ、桑折のことを

考えると気乗りはしないけど・・・・な。

「桑折、ちょっと真剣に聞いてくれ」

「え？な、何？」

気のせいか、声が緊張してるような・・・？まあ、後でいいか。

「いいか、俺・・・・・。」

「え？え、え？ど、どうしたのよ？ま、まさか、でも、い、一応そこにおじさんだっているワケだし・・・その、そんな急に・・・・・」

「俺、多分こっから出る方法・・・・・思いついたわ」

いざ行かん！的な感じで？（前書き）

いやー、６月になりましたね。まあ、だからと言って特に何もないですが（じゃあ書くな）。

いざ行かん！的な感じで？

・・・・で、中略。とりあえず5～6分後だとでも思っといてくれ。・・・え？せつめーが雑だ？悪ぃな、これも性分だ。何、それじゃ理由になってない？でもなぁ・・・・こう、何があってこうなったかってのは文脈から読み取ってくれよ。ハッハッハ。

「せぇ、のっ・・・・・！」

「よし、やれー、桑折！」

「すみませんな、女王（クイーン）・・・・ですが、今回はその御力、利用させてもらいます」

ボオオオオオオオォォォォォンンン・・・・・・・・・・

・・・・・・・よしっ！やっと壊れたか！俺らの目の前には、立派な壁・・・・・もとい、『元』壁が展開されている。これをさらに分かりやすく言うと、瓦礫の山が広がってるワケだ。きれいにポッカリと穴の開いた、な。

「おう、センキュな桑折！」

「べ、別にアンタから礼言われても、私だってここから出たかっただけだし、だから、あの、その・・・・・」

なんかゴニョゴニョ言ってるけど、

「いやー、お前のその暴力的及超超超大迷惑（ぼうりょくてきおよびちょうちょうちょうちょうだいめいわく）を形にしたような『創（マジック ハンド）

造手』も少しは役に立つんだなぁ！やっぱ『ナントカとハサミは使いよう』ってのは正しい言葉なワケdグワワワアアアアア！！？」

あー・・・・・・・・・・・・・バタッ。あ、とおくのほうからこえがきこえてくるよー・・・。

「ク、女王（クイーン）！？さすがに少々やり過ぎでは！？」

「はぁ、はぁ、はぁ・・・・い、いいのよ、どうせこの位で気絶したり動けなくなってるほどヤワじゃあそうそう喧嘩の勝ち星も伸ばしてないし」

そりゃどーも。・・・・念のため聞いときたいんだけど、俺褒められてるわけじゃないよな？

「それに、私ならもうコイツに対する加減もわかってる・・・から・・・・はぁ、はぁ・・・」

「やかましいわぁぁぁッ！！」

「はぁ、はぁ・・・・ね？もう復活」

「おぉ・・・・・！」

おいおっさん、一体何に感心してるんだー？別にいいけどよ！ちくしょう！

「はぁ・・・それで？どっち行けばいいわけなんですか？」

壁の向こう側はちょうど廊下になってたらしく、右も左も壁ばっ

かり。まったく・・・・・ここまできたんだったら、俺がやるしかないじゃないか。いいかお前ら、『機械皇帝(マシンエンペラー)』ってのは伊達や酔狂で『皇帝』名乗ってるわけじゃねえんだよ。こいつはいくらでも応用が利くんだぜ?例えば・・・・・そうだな、まずは道だな道。どこから出るのが一番近いか、というと・・・・えーと何々?

「・・・・よし。後は俺に任せろ」

いざ行かん！

ん？何をやったのかわからんと？簡単なこった。まず、ここが牢屋だろうと何だろうと、とにかく建物である以上『見取り図』ってーもんがどこかに作られている。これ常識。なにしろ、ただ単にだだっ広いだけの公園にだってあるもんだからな、見取り図。

で、そのデータは十中八、九の割合でその建物のメインコンピューターか制御室にコピーがある。

そうしたら後は簡単なもんだ。何回だってくり返してやる、この程度楽勝だぜ！

「なんっか腹立つのよね～、その偉そうな傲慢口調・・・・・」

「・・・・・・（ウルセー）」

「ちょっと！今何か言った！？」

「・・・・・なんでもないですチクショウ」

「ふむ、前々から思っていたんだが、王（キング）はもう完全に尻に敷・・・・・・・」

「だあらっしゃい！！！」

おっさん・・・・・・テメエ、常に誰かの神経逆撫でしてないと気が済まないタイプなのか・・・？だとしたら、『馬鹿は死ななきゃ直らない』の意味をその体にたっぷり叩き込んどいてやるからよ、希望があるならいつでも俺に言ってくれ、な？いいな？

「ははははは・・・・」

ふっ・・・・・声がほんの少し震えてるぜ、おっさん。残念だったな、隠しきれなくてよ。

「・・・・・・ねえアンタ」

「おう、どした？」

「で、どっちが出口なの？」

「・・・・・・悪ィ、忘れてたグガァッッッ！！」

・・・・これ、悪いのは俺だけなのか？久しぶりだけどやっぱ痛いな、コレ。多分明日にはコブになってんだろうな、ハア。

まあ、悔しいけど桑折の言うことにも一理ある。えっと、近道は・・・右だ！

「よし、それじゃあ脱走とでも洒落込（シャレ）んでみっか！」

・・・・・・・・・・・・んで、それが１０分前の話。

「ねえ、なんでどこにも着かないワケ？ずっと同じような廊下ばっかり続いて・・・・・」

ンなモン俺に聞くな。

「ふむ・・・・・なにかの罠（トラップ）にでも引っ掛かったのかね？」

俺が知るかバーロー。

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・口答えしてスイマセンでした、ハイ」

おっかしいなぁ・・・・・・確かにこれはおかしい。何回頭の中に地図をダウンロード（まあ、言葉のあやってヤツだな。念のため）しても、この位置で合ってるはずだ。現在地も、監視カメラの映像から完璧に割り出してある。だから今、右の方向には扉が一つないとおかしいんだよなー・・・・・。ハイ、壁。どう見ても種も仕掛

けもないただの壁。カメラ映像にも、ただの壁が映っている。ホログラムかと思って何回か探ってみても、全くの無駄。一体・・・・

「一体どうなってるワケなの！」

「だ・か・ら！俺が知るか俺だって悩んでんだからお前も何かやれ！！」

「何かって何よ！」

「知らんわ！もっかい壁でもブチ抜いてろ！」

「いいわよ、そこまで言うならやってやるわよ！」

「よし、とっととやれ桑折！」

グオオオオオオン！！！・・・・・・・・ドゴオオオオオオン！！！！

「どうだ、開いたか・・・・何ィ！？」

「ハア、ハア、・・・・・・！？」

壁にはなんと、傷一つついてない。それどころか、埃一つ舞ってない。んで、それに『おかしい』と思ったのは三人とも同時だったらしい。示し合わせることもなく、一斉に来た道に走りだしたんだよなー。まあ、余所から見てる分には面白い見世物だったろうよ。

35：いざ行かん！なハズだった・・・

は、走った・・・・・・。ったく、さすがに・・・予備動作抜き・・・・で、走りづめ、は・・・！しんどい！

ただまあ、あの何だかわからん廊下は正直、下手な怪談より数段怖かったわけだが。よし、困った時にはとりあえずおっさんに当たってみよう。

「てなワケで、どういう代物（しろもん）だアレはぁぁぁ！！！」

おら、桑折も突っ立ってねえで加勢しろ！そんなアイコンタクトを（おっさんの肩を揺すりながら）肩越しに送ってみると、一発で反応が帰ってきた。ありがたいな、コイツのこういうとこは。

「一体何なんですかあの気持ち悪い頑丈な壁！！・・・・・・てちょっとアンタねえ！それはさすがにやり過ぎじゃない！？ここで意識飛ばせちゃったらどうするつもりなの！？」

おっと。ちょっとばかし揺さぶり過ぎたか？おーい、おっさん意識あるかー？

「・・・・・・・・まったく、ゲホ、ゲホ・・・・いくら王（キング）とはいえ、少しは年上のことを労わってみてはどうかね・・・？」

お、まだ平気だったか。良かった良かった・・・・・じゃなくてだなぁ！

「まだ起きてんならとっとと質問に答えろぉぉ！」

「わかった、わかったからとりあえず胸ぐらを掴むのはやめてくれ！」

・・・・・・ちっ。それで、どんなワケなんだよさっきのは。あんなの見たことねえぞ。幻術系にしても、この俺の『機械皇帝（マシンエンペラー）』を騙し切るほど強力な能力（スキル）なんて、そんなの無いはずなんだよ！

「まあ、そう睨まないでほしいものだが・・・・しょうがあるまい。自分の能力（スキル）が破られる恐怖と苦しみは、一応私にも覚えがある。気が動転しても無理はないだろう、な」

ふん・・・・・・まあな。俺らＥＳＰにとって、自分の能力（スキル）ってのは実は相当に大事なもんだ。さすがに『生命より～』とまで言う奴は少ないが、『全財産より大事』とか言う奴は相当数いる。かく言う俺もそのグループの一人だし、もっと言うと桑折なんかは『医者としての全てより能力（コレ）の方が上』って言ってたのを聞いたことがある。

ん。話が脇にそれたな。とにかく、自分の能力（スキル）ってのは、どんなにちっぽけなものだとしてもＥＳＰなら誰でも大事に思ってるんだよ。だから、自分よりも能力的に格上の相手がいるとまず警戒してかかる。そんなもんだ。だからおれはいま、焦っている。それはわかっちゃあいる。わかっちゃいるんだ。

「・・・・・・・・・・・で？」

「と、言うと？」

あくまでも、おっさんの声は冷静だった。俺は・・・・・・・少なくとも上機嫌には聞こえなかっただろうな。

「とぼけんなよ。さっきの答え・・・・まだ聞いてねえぞ」

一体、さっきのは何だったんだ？教えてくれよ。

「あの現象は・・・・・恐らく、ＥＳＰの手によるもののはずだ。それも、王の『機械皇帝（マシンエンペラー）』、貴方の『創造手（マジックハンド）』、両方同じＥＳＰの仕業だろう」

ちっ・・・・まあそうだろうな。・・・・・・・俺が能力（スキル）で負けた、か・・・って、ん？ん？今おっさん、『同じＥＳＰの～』とか言ってなかったか？

「・・・・・・ああ。私には、大体見当も付いている。恐らく・・・・」

そこまで喋ったところで、後ろの方からゆっくりと、ゆっくりと、靴音が響いてきた。

いざ行k・・・もう諦めたよ。

なあ、突然で悪いがお前ら知ってるか？カツ、コツと響く靴音ってもんは、相手の姿が見えないとな、それはそれは心臓に悪いしイライラするし（以下略）・・・・な心理状態になるもんなんだぜ。特に、人に探されるような何かをした身に覚えがある場合はな。

「（おいおっさん、今度は何が起きるってんだよ！）」

とりあえず声は落として、おっさんに恒例・質問タイム。

「（そ、それを私に聞くのかね！？）」

そりゃそうか。考えてみればただの八つ当たりだったな・・・・・・って違ぁぁう！！和みながら反省なんぞしてる場合じゃねええ！！！

「（や、やっぱり脱獄ばれちまったのか！？くそっ、監視カメラの映像も適当にいじっとけばよかったか！）」

「（い、いや、多分それは無いだろう王（キング）。いくらなんでも到着が早すぎる・・・から・・・のはずだ）」

うわあああああ！！今セリフの後半が凄いことになってなかったか！？大丈夫かよオイ！？

「（・・・・・二人とも、ちょっとうるさいわよっ！）」

「（・・・否定のしようもないな）」

「（全くだ）」

えらい余裕な会話だなって？逆だ逆。もう今更逃げも隠れもできないからな、まあ三人とも腹を決めたんだろう。・・・・・何だ、今もしかして俺らがあっさり諦め⇒捕まる⇒もっかい牢屋へＧＯ！的なかんじのコトでもやると思ったのか？ふざけんな！俺ら・・・・・あー、まあ、少なくとも俺の考えてるのはかんな感じだ。

見つかる⇒後頭部あたりに一発ぶちかます⇒廊下でいきなり偶然にも昼寝を始めた誰かさんの横を通って外へ！

どうだ、完璧な計画だろう！まあ、一つだけ穴が空いてたりもする計画なんだけどな。・・・・・どこに穴があるのか、なんてひどい質問は頼むからしないでくれよな。

おっと、アホなこと言ってる間にもう来たな！

「（・・・・よし、俺がやるからお前ら邪魔だけはすんなよ）」

「（ちょっと待ちなさいよ！私の『創造手（マジックハンド）』のほうがこの手のことには向いてるんじゃないの？）」

「（王（キング）、確かにその意見には一理あると私も思うのだが。そちらの方が見えづらいし、射程も長いからな）」

フン・・・・・一理あろうがなかろうが、俺の答えは一つだよ。

「（桑折、それにおっさんも）」

「（何？）」

「（何かな？）」

「（・・・・・・そんな作業お前ら素人に任しとけるかっての）」

とりあえずああは言っておいたが、あれはただの方便だ。ちなみに、地味に恥ずかしいの我慢して本当のこと言うと、俺はこう思ってる。

『手を出すのは俺だけで十分だ』ってな。

人を殴るだの何だのってのは、俺は正直好きじゃない。『この力で殴られるとこの位痛い』のがリアルに想像できるようになるぐらい昔殴られた記憶があるから、どうしても相手がソレ（昔の自分）とダブって見えてくるんだよな。で、我ながらとんでもない矛盾だとは思うけど、だからこそ俺は喧嘩で乱戦になった場合に率先して人を殴る。人に手を出すと、後で本当に嫌な気分になる。んな感覚、俺の周りには誰一人として味わってほしくねえからな。俺一人でじゅーぶん。それが俺の考え方。身勝手に自分の甘ちゃんな考えを押しつけてんのはわかってる。わかっちゃあいる、さ。

「（ふむ、確かに私は直接の戦闘では素人だが・・・）」

「（だろ？ほら、桑折も頼むからよ。今だけでいい。今だけでいいから、ここは俺の言うとおりにしてくれよ！・・・・・・・おっと、いよいよだな）」

言うなりできる限り壁に張り付くようにし、息をひそめて動かな

いようにする。
そら来たな、3，2，1・・・・・・んん！？
「あ、あれ～！？清明君ですか～！？」
「は、祓！！？」
もう、どうなってんだ。

いざ行ｋ・・・もう諦めたよ。（後書き）

ベタなのはわかってますが、出しちゃいました、祓さん。

脱出・・・したいなあ・・・・（前書き）

祝・三千アクセス突破♪
これまで読んでくれた皆さんに、改めて心から感謝します！
そして、これからもどうぞよろしくです！

脱出・・・したいなあ・・・・

「え、えーと・・・祓・・・・・だよな？」

我ながら、間抜けな質問だ。うん。でもなぁ、まさか祓がここになあ・・・・・いや待て俺、ちょっと待て。廃ビル屋上じゃあ特に意識してなかったけど、こいつって確か・・・・えと、なんていったっけな・・・・ああ思い出した、『ダイヤ』とかいうグループの一員だったよな？うん、そういやそうだった。ならそこに捕まってる（らしい）俺たちのすぐ近くにいても不思議はない・・・のか。うぅむ。要するになんですね、ほら、アレだ、つまり俺の方が、

「・・・・なに間抜けそうな顔してフリーズしてるのよ」

「どうせ間抜けだよ、俺はよ！いま自分でもそう思ったぐらいのな！」

ああ、ついつい反射で怒鳴り返すこの癖、いい加減なんとかならないもんだろうか。なんか、どうにもならないような気もするけど。

「あ、清明君はなんでここにいるんですか～？」

ああ、もっともな質問だよな。なにしろ俺たちは囚われの身だったもんな、ついさっきまで。

「ああ、そりゃな祓、実は痛ァァッッッ！！・・・・・・・テメ桑折、いくらなんでも時間差で殴るのは卑きょ・・・・・ありゃ？」

今回手を出したのはおっさんらしい。で、そのままえらい剣幕で

俺にヘッドロックを掛けて・・・・・グッ、中年の割には妙に力強いヘッドロックじゃねえか・・・・・・ずりずりと頭を固定したまま壁際まで引きずっていく。・・・・・く、息が・・・・！

「（王（キング）ぅ！！き、君は一体どういうつもりなのかねえぇぇぇぇぇっ！）」

・・・・なんか、声を抑えて絶叫してた。器用な真似だなオイ。あとなおっさん、半泣きになられると正直さすがの俺もちょびっとだけ引きたくなるから勘弁してくれ。・・・・・・あ、もちろんこれを声に出して言うほど俺は失礼な人間じゃねえからな。何か勘違いされそうだから念押ししとくけど、俺はこんなこと（心の中でしか）言ってねえよ！

「（そ、それ、どういった意味なんだ？）」

そう言うと、

「（君はもしかしてふざけているのかねぇぇ！！）」

さらに締め付けられた。別にそこまで苦しいわけじゃないが、やっぱ息がしにくいのは間違いない。でも、今のセリフはどういう意味だ？

「（ハア・・・・・・・王（キング）、ここは『ダイヤ』の本拠地とまでは言わないまでも、ある程度重要なポイントであることは間違いなさそうなんだよ・・・・。そんな場所にいるというのに、なぜ君は堂々と『ダイヤ』の一人であることが分かっている相手に堂々と情報公開なんてしようとしているんだい！？）」

ここでもし『あぁー、忘れてたな～』的な答えを返したりしてみろ、ただでさえ殺意の見え隠れしてる目で睨まれてるんだ、本っ気で生命(いのち)の危機を感じるハメになることは請け合いだな。ハハハ・・・・・・おい、誰だ今それも面白そうとか吐(ぬ)かした奴？

「（わ、わかってるって・・・・で、でもえっとほらアレだ、あいつならここの道も知ってるだろうし俺にも別に敵意は持ってないみたいだし、どの道誰かに聞きでもしなきゃ道もわかんねえだろ、な？え、えっと・・・・だからホラ、上手いこと油断させて道案内だけさせれば・・・・いいんじゃねえ・・・の？）」

うわー・・・・まさに腐ったような考え方だな。俺こういうの大っっっ嫌い。まあ、方便ってやつの範囲内だろ？

さて、この完全即興論理で、はたしておっさんを言いくるめることはできるんだろーか。

いろいろな修羅場

さて、果たしておっさんはどんな反応を示すだろうか。今のところはじっと目を閉じて考え込んでいる。・・・・・・・・あの、そろそろ首が痛いんでこのヘッドロック外してもらえませんかー？

「・・・・・ああ、そうだったな」

やっと首が自由になる。あーやれやれ。首が凝った。

「で、おっさん？返事はどうなんだ？」

まーーーーた長い沈黙。く、空気が重い・・・・・・重い・・・・・・重い・・・・・・おも・・

「よし、わかった」

お、やっと進展があったか。しかも今のセリフ、結構好感触じゃねえか？

「ただし、条件があるのだが。・・・・・私に、少し彼女と話をさせてほしいのだが、構わないかな、王（キング）？」

ふむ、『条件』ね。

「へ？んー・・・・・俺はどっちでもいいけど、祓（あっち）が何ていうか・・・・それに、そんなのんびりしたことしてる時間なんてあんのか？」

「王（キング）・・・・よりによって君がそれを言うのかい・・・・・・まあ

諦めよう、それが君の性格のようだし・・・・・それに、時間ならある。というより、作らざるを得ない」

「？」

「少し考えてみたのだが、確かに王（キング）の言うことにも一理ある。・・・・私たちにとって、現時点では彼女が唯一の情報源だからな。ならば、多少の時間を惜しむ余裕はない」

いや、パッと思いついた案をそのまま言っただけなんだから、そこまで真剣になられても逆に困るんだけどなぁ・・・・・

「と、いうわけだ。いいかな、王（キング）？」

「・・・ダメ、つっても聞く耳持ってねーんだろ、どうせ？」

「ふむ・・・まあ、な」

そこは否定してほしかったぞ・・・・・ったって、そりゃさすがに期待しすぎか。俺の性格からいっても今のトコで『そうとは限らない』とか何とか言われたらその場で「んじゃ却下」とか言ってそうだもんな。てか間違いなく言ってる。

「わかったわかった・・・・おーい祓、ちょっと悪いけどこっち来てくんねーか？」

「あ、はい～。お話終わりましたか～？」

「ああ、ほとんど終わってるんだけどな、こっちのおっさんがちょっとお前と話がしたいらしくてな・・・・・いいか？」

「私は構いませんけど～」

「んじゃ、頼むわ。悪いな祓」

「いえいえ～」

何事か話し始めた二人を見るともなく見ていると、横からなんだか知らないけど凄まじい・・・・えーと妖気？殺気？まあとにかくそんな『ゴゴゴゴゴ・・・・・』とかいった文字がバックに浮かび上がってるような重っ苦しい声が飛んできた。・・・・・うわー、怖ぇー・・・・。

「で？」

「・・・ハ、ハイ？な、な、なん、何だ？いえ、な、なん、何で、何でしょうか？」

落ちつけ落ち着け。声、裏返ってるぞ俺。しかも噛みまくり。

「・・・・あの娘（こ）、話聞く限りだと何かアンタの知り合いみたいだけど・・・・・誰？」

「あ、ああ、そういやあの時のお前は意識飛んでたからな、そ、そりゃ覚えてなくて無理ねーか・・・・い、いえ、ないですな、ハイ」

「前置きは、い・い・か・ら」

怖あぁぁぁ！！！

「え、えっと、要するにほら、お前も聞いてたおっさんの話遮った『ダイヤ』とかいう俺にやたらと似たやつがいただろ、あいつの部下・・・みたいな感じらしい」

「・・・・・・ふーん」

なんか信じてないよオーラがビシビシ伝わってくるのですが。挙句の果てにそっぽ向かれてますが。

・・・・・じゃあ何て言っとけばよかったんだよ！！？

いろいろな修羅場（後書き）

なんか桑折さんやたらと怖がられてますが、彼もまあ本気で言ってるわけではありません。そういう意味では、実は清明君が一番ツンデレ系なのかな・・・・？

脱出！？あ、もう期待してない。

と、そこで。

「・・・・・よし、わかった。本気なんだな？」

「は、はい～！ま、間違いありません！」

えらく重々しい声と、えらく緊張した声が聞こえてきた。どっちも大声だったもんな。でも、ここは素直に礼を言わせてもらうぜ！ナイスタイミング、二人とも！

「お、終わったのか！？」

というか、今ので話が終わってないと桑折が怖い。これ以上二人でいると近いうちに骨でも折られちまいそうだ。頼む、とっとと場面転換させてくれぇ！！

「・・・・・ああ・・

「はい～！お待たせしてすいませんでした、清明君！」

・・・・・せめて、人の話が終わってからにしてはどうかな、祓さん」

ん？気のせいかこの二人、さっきより仲良くなってねえ？いや、別に思う所があるとか、そんなんじゃなく。・・・・・ほんとだぞ？

「・・・・ま、気のせいだろ」

「？どうしたんだい、王（キング）？」

「いや、こっちの話」

で、女性陣二人（こんなくくり方してんのがばれたら後で・・・・少なくとも桑折は怒るだろうな。ま、黙ってりゃいいだろう）の方は？・・・・・方は？

・・・・・・だーーーーーー！！！わーーーーーーーー！！！

いや無理無理無理無理！！！あれは無理！何が無理かって、もうあの二人のとこだけ空気がとんでもなく重いうえに真っ黒に染まっちゃってるし！！ちょっとマジで『ゴゴゴゴゴゴ・・・・・』とかいうオーラ出てきそうだし！さっき俺がぶつけられたのよりさらに暗い！重い！ああ、なんかもう後ろ向いて走って逃げたくなってきました・・・・・。

「キ、王（キング）、そ、それはさすがに、ひ、卑怯だろう、な、な、な？」

「う、うるせえ！何が悲しゅうておっさんと一蓮托生（いちれんたくしょう）やんなきゃいけねえんだっての！俺は少なくともまだ死にたいとは思わねえよ！」

ああ、最近俺（とおっさん）の株がガンガン下がってるような気がする・・・・でも命の方が大事だからな、間違いなく！

「てなワケで、バーイッ！・・・・・・・っていねえええ！！？」

お、おおおおっさん！？に、逃げたのか！？もしかして一人で逃げたのか！！？あ・の・野・郎！！
後で覚えとけよゴラァァァァ！！

脱出！？あ、もう期待してない。（後書き）

・・・・最近、ホントに男性陣の株が下がってきてるよね（↑他人事かよ！？）

４０：誰か逃げ場を！（前書き）

実に後ろ向きなタイトルですな（笑）。

ところで、例のおっさん（名前、出したげなきゃな。まだ決まってないけど）はどこに行ったんでしょう？

それと、会話ネタで引っ張るのはとりあえず今回でやめます。いいかげんアクション起こしたいもんで。ただ、ネタが尽きると自動的に会話ネタに戻りそうな気が・・・・。そうなっても怒らないでくださいね（汗）。

４０：誰か逃げ場を！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・。

・・・・・・どうも、最近俺、思います。いま目の前に悪魔が現れたら、魂なんて速攻で売り渡してやる・・・・・だから、今すぐこの場から俺を退散させてくれ！

・・・ああわかってるとも、どーせ『現実逃避するな』だろ！？勘違いしないでくれ。俺は別に、女の子が嫌いなわけじゃない。まあ、この年代ではせいぜい平均よりちょっと下なだけだと思う。ただ、昔っから女性と話をするのはどーも苦手なんだよな・・・ああ？ヘタレ！？

・・・・否定、できねえかもな。ホンット苦手なんだよ、なんか知んないけど。あ、そろそろあっちも会話になりそうだ。

「で、」

まず口火を切ったのは桑折。まあ、アイツの性格からいってもそうだろうな。実はアイツ、自分だけならまだしも周りがじっとして

る空間ってのが大っっっ嫌いなヤツだからなぁ。

「あなたは、誰な訳なの？」

これさ、文字とかに書き表してみたらそんな大したことないだろうけど、相当な圧力かかってるんだぜ？さっき説明したとか突っ込めないぐらいに。てか何なのこいつら？ずっと思ってんだけど、なんでいきなり仲悪いわけ？泣きたいわぁ・・・・・さすがにそこまではしねえけど。

「私ですかー？」

ほら、祓も祓でいつもより声が硬くて怖い。もっとこう、ふわっとした喋り方するキャラだったろう、お前はさぁ！？いや、別に気にしてねえけど！全然気にしねえけどさぁ！！

「私は、清明君のとーもーだーち、ですよ～。（今は）それで、あなたは一体どちら様ですか～？」

『友達』にやたら力がこもってた気がする・・・・それ以前に、俺『友達だ』なんて言った（言われた）覚えねえぞ？まあ、べつに文句をつける筋合いはないからいいか。というより、ちょっと感動した。ただ、その後に『今は』って三文字をぼそっと呟いたような気がしたのは多分俺だけじゃないはずだ。

「わ、私！？私は、えっと、その、だからコイツの・・・・・・・えっと・・・・」

ふむ、桑折が言葉に詰まるなんて珍し・・・・くねえか、特にここ2日ほど。

「何ですか～？何でもないなら部外者は引っ込んでいて下さいね～。もう少し正直に言うと、せっかく一日ぶりに会えてるんですから邪魔しないでください～、ってところですかね～」

目が・・・・・顔は笑ってるけど目が全っ然笑ってませんよ祓さん・・・・。

「ひどいですよ清明君、『祓』、にして下さいねっていうのはもう頼んだじゃないですか～」

・・・・・それは覚えてます。ただ、今の祓を脳内以外で呼び捨てにするほど俺は無謀（バカ）じゃありませんので。

「（わかってはいましたけど、本当に鈍感な人ですね～）」

「へ？今何か言ったか？」

「いえ～、なんでもないです～」

まあ、いいか。それより、話変えて悪いけど何かいつの間にか空気が爽やかになってる気がする。なぜだろう？・・・・・・あ。

「あれ？桑折はどした？」

「あ、さっきの女性（ひと）ならそこに～」

「わっ！？ど、どしたんだ桑折！？」

少なくともさっきまでの敵意は消えてたけど（だから空気が軽く・

・・・）、なんか目に見えて落ち込んでた。ったく、ころころ感情の変わる奴だ。

「あ、な、何でもないわよっ！そ、それで！？け、結局どっちが、で、出口になってるわけなの！？」

うわぁ・・・・コイツがここまで顔真っ赤にして噛みまくるのは初めて見たな・・・うん？他には見たことあるのかって？一人いるぞ、凄いのが。

・・・・・・・・・俺だぁぁぁぁぁ！！！

４０：誰か逃げ場を！（後書き）

半端なトコで切っちゃいましたが、勘弁して下さい（汗）。
さて、突然ですが月曜から修学旅行に行くので少なくとも木曜まではこの『四方山』も更新ストップになっちゃいます。

以上、業務連絡でした♪

そろそろ真面目にやるとしよう（前書き）

お久です。ハイ、すいませんでした遅れました。で、でも！木曜に一回書いたんですよ！信じてくれないかもしれないけどいつもの１，５倍ぐらいの長さのを！

・・・・・で、途中で変なボタン間違えて押して。気が付いたら全部パア～に（泣）。この二日（これを書いてるのは土曜）、そのダメージから立ち直れなくて。

・・・・・ええわかってます、ただの言い訳です。事実だけど。だから今回のタイトルは、作者の決意でもあります。『・・・・真面目にやろう』

そろそろ真面目にやるとしよう

・・・・・・・・・・・・ん？なんか忘れてねえか俺？えーっと、確か・・・・・・・アッ！！！やばい、これはやばい！！

「な、なあ祓、急で悪いが一つ聞きたいんだけど」

「はい～？」

「・・・・今って、何時ぐらいなんだ？」

返事によっちゃ、ひじょーーにマズイことになる。何がって？学校がだよ！・・・・・・ったく、ただでさえ『素行が悪い』とかで停学の一歩手前をうろついてるんだから、ここで無断欠席なんてしたら、・・・その先は考えたくねえな。あ、勘違いしないでくれ。別に俺が真面目ちゃんなわけじゃない。そんな柄じゃねえし。ただ、ウチの担任がなぁ・・・・。

「え～と、三時ちょっとすぎですね～」

「午前、だよな！？」

うう、なんかいやな汗が出てきた・・・・頼む、午前であってくれ！同じ三時でもそっちにはまだ救いがある！！

「午後・・・・ですよ～？・・・・・って、ちょっと清明君どうしたんですか！？顔色が土気色になってますよ～！？」

はい、アウト。ふわーっと意識が飛んでいく・・・・・・。

「あ、ああ・・・何でもない、何でもないから」

俺の声、掠れてないだろうか？俺の主観では掠れた上に震えてる気がしたんだが。ふと気付くと、無意識にこんな言葉を口走っていた。

「・・・・・真面目にやろう」

「あ、あの～？」

ちょっと今は、無駄口叩いてるヒマねえな。無駄なことしてるヒマも。本気の本気で行こう。せめて無断欠席は一日で抑えよう。

「てなワケで桑折！今すぐ起きろ！！問答無用だ、この壁全部ブチ抜け！！」

「ハ、ハイ！？」

「清明君、ダメですよ！？」

祓には悪いが、もう建物破壊だろうとなんだろうとやってやる！というかやらせてやる！

「何だかよくわかんないけど、要するに思いっきりやっていいってことね？」

あっという間に復活して、ムチャクチャ頼もしい笑みと共に聞いてくる桑折。俺の返事か？もちろん決まってんだろ！

「よし、やってｙ・・・」

「ダ、ダメです！！」

「「へ？」」

「あ、あなた達もしかして、壁を壊すしながらここまで来たんですか～！？」

「・・・・・・一回だけだぞ？」

「ええ！そんな二回も三回もやってないわよ！」

「じゃ、じゃあ迷って当然ですよ～！いいですか、この建物は全部、ウチの一人の監視下に入ってるような所なんですよ～！つまり、その人の・・・・・・」

「なるほど・・・・・空間をいじる、なんて能力は聞いた事ねえから、おおかたアレだろ？感情操作とか・・・・」

「熱血冷徹」

「ん？」

「熱血冷徹・・・・・それが、ここの監視人・・・まあ、言葉のあやですけど・・・・の能力名ですよ～」

熱血冷徹、ねえ・・・・・ふーん、少なくともそいつにはばれてるらしいな、俺ら。

後に尾を引く忘れ物

「で、何でその熱血冷徹（センチメンタル）とやらは、俺らのことを放っといてくれてんだ？いまだによくわかんねえけど、俺の『クローバー』とお前らの『ダイヤ』ってのは敵同士なんだろ？」

「理由は二つありますね～」

教えてくれないかとも思ったけど、祓さんあっさり喋りだしたよ。ありがたいっちゃあその通りだけどよ、情報管理とか大丈夫なのかこいつら？

同じことを考えたらしく、横から口を出された。

「ねえ・・・・・あなた、何でそんなに協力的なの？正直言って、私はあなたの話が信用できない。それとも、何か裏でもあるのかしら？」

う～ん・・・・・端（はた）から聞いてると、ずいぶんキツイ言い方だな・・・・なんか祓が出てきてからのコイツ、ミョーに機嫌悪いよなぁ。誰か理由わかる奴いるか？

「そうですね～、もちろんこの場にいるのがあなただけならどうするかはわかりませんけど、清明君がここにいる以上私は全面的に協力しますよ～。私は清明君の友達ですからね～・・・・これでは理由になりませんか～？」

オイ祓。んな面と向かって友達呼ばわりされると、さすがにちょっと照れるじゃねえか。ただ・・・・やっぱり嬉しいな、うん。

と、そんな気持ちが顔に出ていたらしい。なにしろ桑折がこっち

の顔見るなり思いっきり睨みつけてきたからな。・・・・・・ただ、ほんの少し、ほんの少しだけ、泣き出しそうな表情に見えるのは気のせいだろうか。気のせいだろうな。

「・・・・・・・ま、いっか。それで、まず一つ目の理由ってのは？」

「まず、彼は体がものすごく弱いので、そもそもここに来ることができないんですね～」

「体が弱い？そんなの2～3回矯正かければどうにでもなるんじゃねえの？」

「ええ～。普通なら確かにそうですけど、≪シティ≫の科学力でも・・・・・いえ～、だからこそどうにもならないんですよ、あの人の場合は～」

「金が無いとか？」

「不謹慎ですよ～」

・・・・・怒られた。じゃあ、なんでダメだったんだ？

「それはですね～・・・・・あの、清明君はこの建物、何かおかしなことに気がつきませんでしたか～？」

・・・・・・？そういや、一つあるな。ひらたく言うとこの建物・・・・

「機械類が・・・・」

「極端に少ない・・・・・ですよね～」

「・・・・・ああ」

それは気になってた。言わなかっただけで。最初に目が覚めた時も、脱走してコンピュータに『機械皇帝（マシンエンペラー）』をつないだ時も・・・・・ここには『ホントに≪シティ≫の中かよ！？』と突っ込みたくなるくらい機械類が少ない。というか無い。

「そうなんです～。熱血冷徹（センチメンタル）さんは、一言で言うと機械アレルギーなんですよ～」

「ふーん・・・・・機械に対するアレルギー、ねえ・・・・・」

「だから治療ができない・・・・・なまじアレルギーだから治療で直せるぶんだけ苦しいですよね～、でも機械に近寄り過ぎるだけで発症するからムリなんですよ～」

「なるほどなー・・・・・二つ目の理由ってのもそれ、なのか？」

「ええ～。『機械』を無条件で操る『機械皇帝（そのスキル）』とは、ちょっと相性が悪すぎるんですよ～。だから出てきても何もできない、それゆえに出てこず、能力（スキル）で手を出してくるぐらいしかできないんですね～」

ふーん・・・・。

後に尾を引く忘れ物（後書き）

タイトルの理由はまたいつか（笑）！

でも、なんとなく予想付くのでは？

なんか今回、熱血冷徹（センチメンタル）が直接出てこない理由の説明（他人はそれを後付けと呼ぶ・・・・）で終わっちゃったなあ・・・なかなかアクションにならないですね（汗）。

なにはともあれ・・・・？（前書き）

祝♪累計４０００アクセス突破ー！

本当に、ありがとうございます。

なんか今回ノリがえらいことになっちゃってます（特に前半）が、多分作者が舞いあがってるからですな（笑）。

なにはともあれ・・・・？

「・・・・・・・・・で、なんでなんだ？」

「・・・・・・・・ちょっとこれは・・・拍子抜け・・・よね・・・・・」

「えっと～・・・・わ、私に聞かれても～・・・・なんででしょう？」

あ、ちなみにこの会話だけで今俺らの現在地がどこだかわかるか？ちなみにヒントはなし。

A：まーーーだ廊下のまんま。

B：何というか・・・とにかく怪しい感じの部屋（笑）。

C：なんと再び牢の中。

D：それ以外。

さあどれでしょう？正解者にはもれなく・・・・えーと、そこらのコンビニで１０円駄菓子でも奢ってやるよ。・・・・・俺はケチ

なんじゃない、ただただ金欠病なだけだ。ホントに桑折みたいな金持ちが羨ましーぜ、全く。
え、話をそらすな？わかったわかった、んじゃ正解発表～♪
答えは・・・・・・・・・D！

いやー、何と俺らは今、例のビルの外にいるんだよねーハッハッハ！
・・・・ってオイ。そんなんでいいのか！？熱血冷徹（センチメンタル）がダメならダメで他の奴がやってくる・・・・ぐらいのことは予想して少しは用心してたんだぞ！？いやいいんだけど！何もないのが一番楽だけど！！俺ら逃げるぞ！？本当にこのまま逃走するぞ！？

まあそんなワケで、冒頭の会話があると思ってくれ。

「・・・・・まあおふざけはこの辺にしてだ」

「？どうしたのよ急に改まって」

「いや・・・・なんかここまであっけないと本当に帰っていいのかなーって・・・・」

「まあ、別にいいんじゃない？そんなこと気にしてるなんて、らしくないじゃない・・・のっ！」

うおっ！？痛（っ）つつ・・・・・ったく、なんでいきなり俺が背中ひっぱたかれなきゃいけないんだ？
・・・・・まあ、昨日今日で喰らったダメージの中じゃまだ軽い方ではあるけど。ああ、なんかつくづく情けねえなぁ、俺・・・・。

ただ、桑折の言うことにも一理ある。別にこのまま帰っていけない事もないだろうし、第一『俺らしくない』な。

「じゃ、帰るか」

「とりあえずは、ね」

と、その時。

「あの、私も連れて行ってくれますか～？」

・・・・・・・・・へ？え？あ、あの？

「は、祓？えっと、今のってもしかして・・・」

「ええ、私も一緒に行きたいんですけど・・・・ダメだったですか～？」

んなにこやかに言われても・・・・あ、普通に可愛い。ちくしょう、心が折れちゃいそうじゃねえか。おいおい、これが一つとはいえ年上のお姉さんのすることかよ？

なにはともあれ・・・・？（後書き）

一つ注訳を（字、これで合ってるよね？）。

最後の場面での気の迷いは、『一応とはいえ敵方の人間を連れていく』ということに対する行為に対して引っかかるものを感じた、と。ただそんだけなんで深い意味は皆無です。

日常の一歩手前（前書き）

これが投稿される時にはもう七夕ですねっ！

いいですよね、七月七日。七夕。

・・・・まあ、本編には全く関係しませんけど。何はともあれ、おめでとうございます♪

日常の一歩手前

「・・・・・・まあ、こんなもんかね」

ソファに寝っ転がったまま、思わず独り言が漏れる。当然ながら、返事はどっからもない。ふむ、静かな環境なんてアイツらがいるうちはまず望めないもんだからもうちょい喜んでてもいいはずなのに。なんなんだろうな、このミョーなもやもや感は。いや、だから答えがあるわけねえだろうが。

桑折&祓

「しっかしまあ、色々異常にあったよなあ・・・・・」

一人暮らしは昔から、答えが無いのはもうよくわかってる。なのに、なんでこんなに面白くないんだ？なあ、一体何なんだよ・・・・・

「ホントによ！・・・・・・・・ん？ゆ・・・・・・め・・・？」

え、嘘。今もしかして俺ずっと寝てた？今までの思考は全部寝オチだったりするわけ？・・・・・なんだそりゃ。ひでえオチがついたもんだ。

「ま、ひでえオチなら今日の時点で十分以上あったんだけどな」

これはホント。ついさっきここまで来たわけだけど、またそこに到達するまでの道のりが長かったのなんの・・・・だいたいこんな感じだったかな。

～こっから回想シーン～

『あれ・・・・私が来たら迷惑なんですか～？」』

『いや、だからそーじゃなく・・・・』

『ええ！だからあなたはもう帰ってちょうだいよ！！』

『またそんなキツい言い方して・・・・それに慣れてるのは俺だけだぞ？』

『清明君、お願いします～！！』

『あ、えっとー・・・・・・』

『ほら、アンｔ・・・・ああもう！あ、清明！』

『な、なんだなんだどうした桑折！？』

『何がそんなにおかしいのよ！？・・・・・・清明！』

『いやいやいや、どう考えたって違和感全開だろ！？』

『あの～・・・・・・あ～きらく～ん？』

『は、ハイ（怖ぇ！）！・・・・ああわかった！わかったから！じ

ゃあ祓！お前もとりあえず一緒に来てくれ！もう俺は早く帰って飯食って寝るからな！』

『あ、私が作りましょうか～？手料理手料理～♪』

『そ、そうか。悪いな、なんか（なんで嬉しそうなわけ？）』

『ちょ、ちょっと清明！』

『ん？』

『も、もしかしてその娘（こ）を家まで上がらせる気！？』

『ん～・・・・そっか、そういうことになるのか・・・じゃあ祓、さすがにそれはまずいだろ』

『（別に私は気にしませんのに～）・・・・・じゃあこうしましょう、そこにいる桑折さん・・・でしたか～？あなたの家に上がらせてもらいますね～、ホラ清明君も来て下さいよ～』

『え、私の！？』

『いやでしたら私が清明君の家に・・・・・』

『な・・・・・・い、いいでしょう、今すぐ入れてあげるから付いてきなさいよ！・・・・ほら清明、アンタも来る！』

～回想終了～

・・・・・・で、以下略。つまりここは、また桑折の家。で、

今俺が寝てんのは、昨日寝てたのとおんなじソファ。
　まったくめんどくさくてイヤミなオチだね、もっかいここに戻ってくるなんてよ。あ、でも夕飯は美味かったな。そういや、あのメニュー桑折もだいたい三分の一ぐらい作ってたんだよな。ん、俺か？俺は俺で米砥いだり米炊いたり魚焼いたりで忙しかったぞ。んな他人様が働いてるってのに自分だけ寝転がってられるかってんだ。当然だろ？

４５：はい、リターン！ｈｉｇｈリターン！（前書き）

お久しぶりです久本です。いつの間にやらお気に入り登録数８件！！感謝します。

ただ、今のところその中の３人しか割り出せてないので、残り５人の方、もしよかったらお名前の方を教えて下さいな（笑）。

それともういっこ注意。今回クオリティ低いです。久しぶりなんで腕が鈍りまくってます。そんなんで良ければ・・・・・。

４５：はい、リターン！ｈｉｇｈリターン！

あー・・・しんどい、眠い・・・・・あ、どーも。俺だ。流石に荷物やら何やらもあるんで、桑折ん家からダイレクトで学校は無理・・・・んな当ったり前のことに気づいたのが深夜３時２８分１９秒８５（電波時計がすぐ近くにあった）・・・・・俺らは全員アホだな。

・・・・・あーわかってるよそうだよそうだねそーですね！！どうせ学校行ってるかどうかもわからん祓にも元から自宅な桑折にも関係無いハナシですよ！だからアホは俺だけだよ！・・・・・ちくしょう。だからって『一人で行ってきて♪』はナシだよなぁ。

んで、そんな感じで不毛なことを考えながら約１０分。本坊初公開っ！アレが俺の家なのだっ！・・・・・いや、寮なんだけどさ。それより、なんかテンション高くねえか俺。これが深夜帯のノリってやつなのか、二日続けてロクに寝れてねえからいい加減精神（こころ）の方が参ってきてんのか・・・・まあ、どっちにしろすこし自重しとこう。

・・・・・・・・・・・・・・・で、それがちょっと前の話なんだが。

「・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・何」

なぜか鍵が開いていて、さては泥棒でも入ったかとドア蹴り飛ばして入ってみれば。

「・・・・・・どうした？お前の家だ」

いやいやいや、どうしたもこうしたもあるかって。なんなんだコレ。なんでこんなトコにいるんだ。一体どーなってんだ。

「話すと長い」

そうですか。いやそうじゃなくて！

「なんでお前がここにいるんだよっ！？てか怪我は？え、アレ直ってんのか！？」

「・・・・・・・（コクリ）」

「そ、そっか・・・・・・・（な、なんなんだこの軽くあしらわれた感は？）」

カンのいい人なら・・・・まあ、よくなくったって普通わかるだろうな。かれこれ二日ぶりの登場、えーと・・・・そういや名前、聞いてねえよな。それどころか、最初にあった時は気絶してたし気付いたら消えてるしその後色々あってすっかり忘れてた・・・・・・こ、これ本人には内緒な！

「そ、それで？一体どうしたんだ？」

「・・・・・『クローバー』」

・・・・・・っ！こいつもか！

「やはりこれで通じたか」

「・・・・いや、正直今だにさっぱりなんだよ。お前が知ってるなら、頼む。教えてくれ」

ずいぶん殊勝だなって？俺だって、人に素直に頭を下げることくらいできるのさ。

「嫌だ」

何イィィィィーーーー!!?ふざけんなぁぁぁぁぁッ!!!!!ソコ断るところかよ!?流れ的に教えてくれたっていいだろ!なあ、いいだろ!?

「・・・・・・冗談。でも、条件がある」

ん?条件?

「そう」

「よし、その条件ってやつ、飲める限りは飲んでやるぜ。んで?俺は一体何すりゃいいんだ?」

「わかった・・・・実は・・・・・・・・」

45：はい、リターン！ｈｉｇｈリターン！（後書き）

ついに彼女の復活（死んでないけど）！まだキャラに候補が二つ三つあって決まんないけど！今回もっと書くつもりだったけど諸般の都合により（便利な言葉だね）次に持ち越しとなりました。

読者の皆様、これからもよろしくお願いします！

非日常の一歩手前（前書き）

お久しぶりです&すいません。
でも、これからは毎回こんな感じになりそうな予感が・・・。

非日常の一歩手前

ふむ。条件・・・ねえ・・・・・さてさて、一体何を押しつける気だ？

「実は・・・・・」

「おう」

「その・・・・・か、勘違いしないでくれ。私だって、こんなことをいきなり頼むのは抵抗があるのだし、済まないと思っているのだが・・・・」

ん？なんかちょーーーっと不穏な空気的なモンが満ち溢れてきてね？え、あれこれ現実？え、実は夢オチでしたーとかいって目ぇ覚めるパターン？それかあれか、もうじき窓突き破って、

『ドッキリ大成功！！』

とかいうプラカード持ったカメラマンが飛び込んでくるとか？そしたら窓の修理代くらいは出してもらわないと困・・・・・って何言ってんだ俺は、なんでドッキリが前提なんだ。それ以前に言葉がムチャクチャだし。

ん？ってことは・・・・・まさかまさかもしかしてこれから１８歳以下はお断りなイベントが？

「え、えっと・・・？」

「その・・・・あの・・」

「あ、あ、ああああ・・・」

うわ恥ずかし。噛みまくったし声裏返ってる。でもその上目づかい、破壊力抜群です。でもこの流れってまさか本当に・・・・・・

「し、しばらくかくまってほしい！！」

頭の中が真っ白になった。

ホワッツ？・・・・え、発音が悪いだと！？やかましいわこのスットコドッコイ共がぁぁ！！

「え、えっと？」

「あ、ああ済まない、少々熱くなりすぎたな・・・・。もう少し詳しく話すから、それから決めてほしい」

「お、おう・・・・」

とりあえず、そっち方面なイベントは起きなさそうだな。ふう・・・・とりあえず安心、か。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・じゃあなんなんだろうこのガッカリ感は？それと、俺の印象がどんどん悪くなっていくような感じがするんだが？

別にいいじゃないか、俺だって年頃の男子なんだし。ちょっとぐらい不純な夢見たってさ。な？な！？な！！？

「それで、その話なんだが。・・・・・どうした？何かおかしなことでも言ったのか、私は？」

「いえ・・・・・・悪いのは俺一人です・・・」

「？・・・そうか、なら話すから聞いてくれ。二日前、私が貴方に拾われてから・・・」

うおぃ。いくら自分のこととはいえ、死にかけてたのを『捨て犬拾った』のノリかよ。

「・・・・そうだ、今まで言い忘れていたな。済まなかった。あそこで死を待つばかりだった私に気付いてくれただけでなく、この命を助けてくれた事は感謝する・・・・本当にありがとう」

「あ、いや、ほらさ」

「・・・・・・？」

「そんなんさ、別に気にすんなって」

「だが・・・・・」

「いや、いいっていいって。まああれだ、ちょっとした気まぐれってやつだから、さ！」

顔が赤いから照れ隠しになってないって？いちいちうるせえな、ったく。あ、ほら！いらんこと言うから気付かれたみたいじゃねえか！ああ、恥ずかしい。

「・・・・・クスッ」

笑われた。まあ、悪意のこもった笑いじゃなさそうだからいいか。

「そ、それで？拾いました、助かりました、それでどうなったんだ？」

「その後出て行ったのは・・・・自分の意志だ。その時はまだ、敵か味方かわからなかったからな。まあ後で『シエル、お前は例一つ言わずに出てきたのか』と祖父からネチネチと言われて初めて気付・・・・ああ、シエルというのは私の名前だ、覚えておいてくれると嬉しい・・・・・まあそれはいいとして・・・・・」

シエルの話はまだ続く・・・どころか本題にも入ってねえよな、こりゃ。

非日常の一歩手前（後書き）

中盤のあたり、ベタなオチですね（汗）。

一応今回のシエルさんでこの話の三大ヒロインは出しました。増やすつもりはありません（今の設定では）。

・・・・・ちなみにこの名前の由来、多分わかる人は少ないと思います。

どうしても気になった人は、『カシエール　アルファポリス』とＹａｈｏｏ検索（僕はグーグルよりＹａｈｏｏのほうが好・・・・・私情ですいません）してみましょう。

多分何件かヒットするはずです。どうしてもいい名前が思いつかなくって、ついつい自棄になっちゃってね、はっはっは・・・・・あれも僕だよ～。

シエルのその後

「それで、私が貴方達の所を抜け出してからなんだが」

お、やっと本題っぽいな。この二日間、一体お前はどこで何をやってたんだ？

「うん。あの後私は、まず自分が何処にいるのかわからなかった。・・・・・・・これは貴方のせいだと思うのだが」

あー・・・・・それは俺のせいか。まあ、でもそうだろうな。結構距離あったもんな、桑折の家。

「そりゃ悪か――――――――」

「・・・・・・・・・・・・冗談なんだが」

「・・・・・・・・・・」

うわぁぁぁ！！いらん！この場面にユーモアはいらんぞ絶対！・・・・・・っていうツッコミも厳禁、だろうな今は。「面白くもなんともない」そんな感想共々今は我慢しよ・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・私の非は認めるが、幾らなんでも酷いと思うぞ、それは」

「って口に出してたっけ俺！？」

「しっかりと言ってくれた」

「・・・・・悪かった」

「いや、悪いのは私だ・・・・」

ん、目を逸らして顔をちょっと赤くしてる様子が何とも・・・・・・って、これじゃただのアブナイ人だな。最近俺の理性がどっかぶっ壊れてる気がするのは、俺の気のせいか？

「何を考えているかはわからないが、なかなか見ていて面白いな、貴方は。まるで百面相だ」

なんてこった、全部顔に出てたのか・・・・・・・・・・これからは気をつけよう。

「まあ、それで話を戻すとだな。私は結局、家を出てすぐに倒れてしまったんだ」

「出血量ハンパじゃ無かったもんな・・・・・・・・」

誰も驚かねえよ。当り前過ぎるっての。

「それでそのまま、何処かの路地で力尽きた」

「お前路地で倒れんの好きなのな・・・・・・」

「・・・・・・・一回ごとに茶々を入れないで欲しい。それでもう一度眼が覚めた時、・・・・・・何処にいたと思う？」

「ってそこでクイズかよ！・・・・・んー・・・・」

とりあえず突っ込んだ後で真面目に考える俺は大馬鹿野郎だろうか？

「やはり気付いていなかったのか・・・・・ほら、あそこだあそこ」

そんなんでわかってたまるか。

「つい昨日貴方達が大暴れした所だ」

「もしかして、あの牢屋のことか？」

あ、頷かれた。

「・・・・そりゃ、悪かったな。知らんかったとはいえ」

「いや、それも感謝している」

「へ？」

「貴方達が派手にやってくれたおかげで、騒ぎに便乗することが出来た」

「ああ・・・・・そりゃどーも。ところで、そろそろ俺の聞きたい話に・・・・・」

「その前に、済まないが喉が渇いてしまったので何かないか？」

「・・・・・・・・・・緑茶。あとお茶うけにかりんとう（芋け〇ぴ）」

ちくしょう、俺はどっちも大好きなんだよ！なのにウチに遊びに来るやつらは１０人中１０人『お前のイメージに合わねえ（笑）』って！笑うなソコ！

「芋けん〇は私も好きだ」

ああ・・・・・いいな、自分の趣味を真面目に受け取ってくれる人って・・・・・

「・・・・・ただ、貴方のイメージには合わないかと」

・・・・・・もう泣いていいか？

シエルのその後：中途休憩（前書き）

もう最近謝ってばっかで読者のみなさんも嫌になっているでしょう。
それでも言います、週一更新できなくてすいません（言うんかい）。

シエルのその後：中途休憩

で、5分後。何のかんの言いながら、結局卓袱台を挟んで無言で芋〇んぴをポリポリとつまむ俺とシエル。うん、なんか気まずい。

「え～、えーと・・・・ど、どうだ？」

「うん。甘い」

いや、そりゃそうだろう。これはお菓子以外の何物でもないし。俺は甘くない菓子以外は菓子と認めたくないタイプだ。辛いポテチ？あれは・・・・・・うん、まあ、何でしょうな（笑）。

「いや、そういう意味じゃなくってな」

「・・・・・なら？」

「いや、だいぶ湿気（しけっ）てるけど大丈夫かな、って。俺はまあ自分の貧乏を自認してるから湿気る黴（かび）るは日常茶飯事だけどな」

実際、こういうのって生モノと違ってヘタに保存が効くだけ放っておきがちなんだよなぁ・・・・・

ってまあ、俺の家庭話はさておいておこう。

「む、これは元々こんな食感の物ではないのか？私は初めて食べたから良く分からないのだが・・・・・」

ん？

「あれ？でもさっき『私も好きだ～』とか言ってなかったか？あと『俺のイメージに～』とか」

「・・・・済まない、あれは見栄だ。後者は私の祖父が好んで食べていたのを見た記憶があったから」

見栄？芋けんｐ（苦肉の策だ。悪いか）にそんなもんがいるのか？そんな？？？？？？？（クエスチョンマーク）を頭の上にくるくる飛ばしてる俺の様子に気づいたらしく、若干暗い目をして、

「・・・・・・正直言って、ついこの間まで家から外に出たことすら無かったからな。生活に関する娯楽は一切知らなかったし、知りようがなかった」

「・・・・・・・・・？」

これは・・・・・・爆弾発言・・・・・・なのか？ふむ、これ以上の話が聞いてみたい所だけど、ヘタに聞いて怒らせるのもまずかろう。これで相手が桑折とかだったら多分平気なんだろうけどなー。

「済まない、詳しい話はまたにさせて欲しい」

ちっ。あ、いや何でもない。まったく、野次馬根性丸出しじゃねーか。

「・・・・・・・・・さてと、それじゃあ片付けるとするか」

誤魔化すために席を立つ。あぁ、気まずい気まずい。

シエルのその後：中途休憩（後書き）

・・・・・・・・短いです。反省します。しかも話も進まない・・・・。

投了×ダイヤ＝！？（前書き）

もう謝んない！いい加減マンネリだから謝んない！

さ、本文へgo！！

・・・・・結局気まずいまま軽く皿を洗って戻ると、シエルも同じような顔をして元の場所に座っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

・・・・・なーーーんか気まずい沈黙。念のため言っとくと別に４人いるわけじゃない。『ひたすら押し黙ってる』のを上手いこと表現したかっただけなんだ。

「なぁ」

「その」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

・・・・・かぶった。チッ、後３秒、たった３秒だけ我慢してりゃあ会話につながったってのに・・・・タイミング悪いな俺！

そんなことを考えて一人でイライラしてると突然、

ピーンポ～ン♪

チャイムが鳴った。普段だったら『今取り込み中だ！』とか言って無視する所だけど、正直今はどんなもんでもこの空気を変えてくれるなら大歓迎だ。

「はいはい、今出ますよ、っと・・・・・」

ドンドンドン！！（ドアを盛大にノックする音）

「今出るっつーの・・・・・・」

バンバンバンバンバン！！！（同上。より激しくなった）

「だから・・・今・・・・・」

ドガドガドガドガ！！！！（同上、以下略）

「やかましいわぁあああああっ！！！！！」

思わず怒鳴りながら思いっきりドアを引きあける。ったく、こんな朝早くから何の用なんだこの近所迷惑馬鹿野郎！

「誰だか知らんが喧嘩売ってんのかコラ・・・・・・・・・って、ん！！！？？？」

「全く・・・・随分な・・・ご挨拶・・・・・・だ・・・・ね・・・・？相も変わらず・・・・やかましい声だ・・・・よ？」

「お、おま・・・・・・・！！」

そこにいたのは、

ついこの間俺の人生観をひっくり返した一人、いまだに名前も知らない男、俺のそっくり野郎がいた。・・・・・それも、血まみれのボロボロで。

「んな、な、な・・・・・・・・・・・・？」

「やれやれ・・・・ちょっと・・・・シロートさん・・・には・・・・・・刺激が強・・・・・・・かった・・・かい？」

「んな、そ、それ・・・・！だ、大じょ・・・・・・・・いや、何でもねえ」

途中で『大丈夫なのか！？』と言うのを抑える。無論パッと見だが、多分命は大丈夫だろう。血が多く見えるのは服にこびりついて

いるから・・・・・だと思いたいな。それを言うと、

「へぇ・・・・・・！なるほ・・・ど・・・・・・それくらい・・は分かる・・・ワケ・・・・何だ？なら、・・・・ちょっとは・・・・・・僕の・・・プライドも・・・満足・・・・できる・・・かな？」

「おい、一体何の話――――――――――」

投了×ダイヤ＝！？（後書き）

さて、今回は（も？）中途半端なトコで切ります。

これまでの流れを一新して話を加速させようと思い立ってのこの流れだったのですが、正直これだけじゃあクエスチョンマークが浮かんでいると思います。ですが、まだしばらくお付き合いください。不透明な部分もジワリジワリと明かしていきますので。

これまでの『四方山』は前哨戦。こっからが本番ですよ～♪

一服：復習其の一（前書き）

ちょっと本編を外れて総括です。
『１０日も書かんどいて何やっとんだぁ！』等の苦情は一切受け付けませんのであしからず。

一服：復習其の一

難波清明（以下清明）「え～、おかげさんでこの『四方山』も５０話目（前章は含まない）！」

天下谷桑折（以下桑折）「と、いうことで今回は、いつもの趣旨からちょっと外れまして」

ベル・アラコー・祓（以下祓）「前回までのまとめをするんですよ～！あ、本編の続きを期待してた人にはすいませんですね～」

清明「（・・・・・作者もアレだな、素直に『自分でもこんがらがってきた』って言っときゃいいｎ・・・）」

桑折＆祓「しっ！！」

清明「はいはい」

桑折「さ、気を取り直して始めます」

シエル「・・・・・私は・・・？」

祓「あれ、あなたも出るんですか～？」

シエル「当然だ。一応私は作者公認の三大ヒロインの一人だからな。貴方達だけでは私の立場が・・・」

祓「三大・・・ですか～・・・・」

桑折「ま、覚悟はしてたけどね」

清明「お前ら、さっきから何の話してんだ？」

桑折＆祓＆シエル「「「な、なんでもない（わよっ！）（ですよ～！）（！）」」」

清明「？」

清明「さ、今度こそ本題だ。まずはこの俺、難波清明からな。主人公だし」

難波清明（なんばあきら）

略歴：生まれは≪シティ≫の外。親の顔は知らずに育ち、小学生ぐらいから≪シティ≫にやってくる。

能力：『機械皇帝（マシンエンペラー）』。自分の周りの機械に対して自分の命令を最優先命令として実行させることができるという、一人でも世界を大混乱させられるようなもの。まだ本編で使ったことは無いが、『変な回路に無理やり電気を送らせてショートさせる』と言った荒業も可能。

性格：特筆するほどの点は無いが、割とアツい奴。また、重度のトラブルメーカーであることは自他共に認める所。

備考：この2～3日で一瞬にして自分を中心に置いた三角関係を作り上げた（笑）。

清明「こりゃまた・・・・・褒めてんのか馬鹿にしてんのかよくわかんねえな」

桑折「まあ清明なんだし、こんなものじゃないの？」

清明「それどーゆー意味？あ、ほら次お前だぞ」

天下谷桑折（あまがいこおり）

略歴：不明。ただ、清明と同じで≪シティ≫外出身のよう。

能力：『創造手（マジックハンド）』。念力で作り上げた腕（完全な透明だが、そこだけ空気が歪んで見えるので明るい所なら輪郭ではっきり見える）を自由自在に使い回す。腕力（？）の上限は不明だが、ヒョイヒョイとソファーを放り投げたりするところをみると相当なものらしい。

性格：ツンデレさん（のつもりで書いてます）。一応目上の人に対する礼儀は心得ている模様。

備考：親が医者らしく、かなりの金持ち（特に本人に執着は無いようだが）。本人も医者としては十分な実力がある。

桑折「・・・・・・・・」

ベル・アラコー・祓（はらえ）

略歴：一切不明。名前と見た目から言って日本とどこかのハーフらしい。

能力：『天翔人（エアロダイバー）』。能力を使わないでいることで『エアー』を溜め、それを消費することでそれに見合った時間の間空を自由に駆け回ることができるという、ややゲームチックな能力。『エアー』の消費量が多いのに溜まるスピードがゆっくりなので、いまいち使いづらい。

性格：おっとりのんびり。清明がからむと多少活発になる。

備考：『ダイヤ』のメンバーの一人。実質もう抜けたようなものだが、正式ではない。

祓「そう言えば、『ダイヤ』は今どうなっちゃってるんでしょうね～・・・・・・」

シエル（フルネーム不明）
略歴：祓以上に訳がわからん。国籍も不明。
能力：これまた不明。
性格：真面目で礼儀正しい。他の面はまだ特に見せていない。
備考：清明が偶然通りかかっていた時死にかかっていた、という衝撃的デビュー。セリフが一つもなかったため見落としがちだが、実は桑折より出番が先。

シエル「これは・・・・手抜きじゃないのか？」

清明「まあ出番が増えればもっとマシになれるって。・・・・・さ、こっからは脇役陣だ」

祓「ダメですよ、清明君。そのくくり方はあんまりじゃありませんか～？」

清明二号（仮）
略歴：何か相当暗いものを抱えているらしい。髪や目の色などがちょっとずつ違う以外清明と瓜二つで、何か関連があるようだ。
能力：『限界能力（オーバーヒーター）』。目で追える範囲全ての力を、物理条件をはじめとするいかなる制約も無視して増幅させるＥＳＰの能力をことごとく暴走させて好きに使うという恐ろしい能力。対ＥＳＰとしてもピンポイントで使うことができる。この能力で暴走させている間は、普段より能力の質が上がるというおまけまであったりする。
性格：イヤミでうっとうしい。だがそれはポーズのようで、内面は清明と大して変わんない。
備考：『ダイヤ』のチームリーダー。

おっさん（仮）
総括：清明を『クローバー』の王（キング）だと最初に言った張本人。能力は不明だが、精神感応系（テレパス）の物だと思われる。第二十七話で捕まってしまい、行方不明・・・・・だったのだが、その後すぐに出会う。しかし、三十九話で再び行方不明に。

熱血冷徹（センチメンタル）
総括：よく分からない建物の中で、清明たちの動きを見張っていた。祓が一行に加わってからは、何にも仕掛けてこなかったため、本人が直接は出てこなかったことも相まって大変影が薄い。

清明「さて、後は誰かいたっけか？」

シエル「いや、こんな所ではないか？」

桑折「私も・・・・・特に思いつかないわね」

祓「ですね～」

清明「んじゃおしまいだな。さてと、次回からもまたよろしく頼むぜっ！・・・・ほら、お前達も早く早く」

桑折&祓&シエル「よ、よろしくお願いします（～）！」

５０：前科、出来ました。（前書き）

しばらく桑折＆祓は出番が薄そうです。

５０：前科、出来ました。

「よし・・・・・！今・・話すよ・・・・だからさ・・・少しはさ・・・静かにでき・・・ないかな？」

いや、血。血出てますけど。と言うよりこれで落ち着けって言う方が無理だよねどう見てもこれは不味いよね何が不味いってもうとにかく不味いよねいやだって血が血が血が・・・・・・・

「・・・・・・・・はあ・・・・まったく・・・怪我人に・・こんなこと・・・させるなんて・・・・大した神経・・・だね？」

言いざまに弱々しく指を鳴らす。と、パニック状態になってた感情がいっぺんに落ち着いた。いや、というのもちょっと違う。何というか・・・・そう、押さえつけられた。そんな感じ。

「もう・・・いいね？」

「あ、ああ・・・・」

多分、こいつが何かやったんだろう。そういえば、こいつの能力（スキル）は何なんだろうか。まったく予想できねーけど。

「さて、どこから話そうかな・・・・」

ゆっくりと口を開いた、瞬間。

「誰が、来ているんだ？」

部屋の方から声がした。おっと、いけね。忘れてた。・・・・・・これ、本人（シエル）には内緒だぞ？

「ちょっと待ってろ、今連れてくから！」

「・・・・私の知り合いか？」

・・・・もちろん、そう言おうとしてちょっとためらった。第一、彼女がどこまで知ってるのかもいまだにさっぱりだし。

「まー、ちょい待ってろって」

いったん保留にして、よっこらせいと担ぎあげる。と、今度は担がれた本人から注文が入った。

「・・・・・・待った！」

「ん？」

「いいか、誰かは分からないけど、その彼女さんにも来てもらうんだ。ＯＫ？」

「な、何！？てかそんな興奮したら傷に響くぞ！？」

「いいから！この甘ちゃんがっ！」

「・・・・・んだと？俺が怪我人相手に加減するとでも思ってんのか？」

「じゃあ君は、ついこの間手も足も出ず（笑）ボロッボロにされた

ことをもう忘れたのかい？ははは、ずいぶんと大した記憶力じゃないか？」

こいつ殴りてぇェェェェ！！！いいか俺、こいつは怪我人・・・怪我人だぞ・・・・・！！ん？殴んないのかって？ふん、怪我人なんて殴っても楽しくないね。つまりはそーゆーこと。

「・・・・ま、あんまり馬鹿話をやるほどの時間もないしね。とりあえず、彼女さんを呼んで下に降りてくれ」

・・・・・たく、ここは折れといてやるか。

～3分後～

「ほら、着いたぞ。んで、どーすんだ？」

「ああ、簡単だよ。手間も一切かからないね」

ふーん。さっきから分かったことによると、どうもどこかに移動するらしい。ただその肝心の移動手段・・・・つまり『脚』がさっぱり見当もつかない。こいつ、車でも持ってんのか？バイクで三人乗りは地味にきついもんなんだぞ？

「ん？ほらほら、さっさと頼むよ？」

ん？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あ、読めた。

なるほど、そーゆーことね。

「ヤだ。この年で前科はさすがに・・・」

「ま、そこを何とか、ね？」

「拒否」

「そう言わずにさぁ」

「断固、拒否」

「ケチ」

「あー聞こえない聞こえない」

「バーカ」

「今日はいい天気だな。な、シエル？」

「え？あ、ああ、確かによく晴れているな、うん。なあ、私は一つ聞きたい事があるのだが」

「何を？」

「一体さっきまでの会話は、何について話し合っていたんだ？」

「ちょっと、道徳と論理について高尚な話題をな」

「・・・・・・・つまり？」

「そこらにある車俺の能力（スキル）使ってテキトーに一台盗ってけと」

「『盗る』なんて人聞き悪いね？『借用』とか『売買』とか、世の中には素晴らしー言葉があふれてんだよ？」

「『無断』借用に『金を払わない』売買、な。要するにただの泥棒だろ？」

「・・・・・・・ふむ・・・・・・だが、そちらの人は怪我人なのだろう？」

「・・・・・・お前までそれ言うか？」

結局そのわずか5分後、俺達は誰の物とも知らない車を乗り回していた。ねえ、俺無免許でもあるんだけど？

盗難車でGO♪・・・・その？

・・・・あー、空眩しい。太陽、明るいなぁ・・・・。
昔どっかの本で、こんな一節があった（ような気がする）。いわく、『悪いことをするほど眩しいモンが光って見える。善いことしてりゃあ世の中全部光って見える』。
今の俺には、無駄に太陽が明るいです・・・・・前科、窃盗か・・・・ハァ。
なんて、ちょっと落ち込んでる俺。あぁ、太陽眩ｓ・・・・・

「ちょっと悪いんだけど、そろそろ現実・・・戻ってきてくれる・・・・かな？」

やかましいな。でもまあ、無限ループ止めてくれたことだけはちょーーーっとだけ感謝してもいいか。絶対口には出さねぇけど。

「ま、くよくよしてもしょうがないか・・・・・」

けだし名言。ただ、どう言った所で、前科ねえ・・・暴力沙汰なら何回もおこしてるけど、他人様の物に手つけるのは初めてなんだよなぁ。

「さ、もう喋っても・・・・いいかい？」

「んー。そういやお前、もう体は落ち着いたのか？まあ血はだいぶ止まってるっぽいけど・・・」

「安心しなよ。まだ君に心配・・・・されるほど鈍（なま）っちゃ・・・いないから、さ」

ま、減らず口が叩けるなら大丈夫か。・・・・・いや待てよ、ホントに大丈夫か？こいつ、気持ち悪い位俺にそっくりだし、もしかしたら性格まで似た所があったりして・・・・俺ならこういう時、確実に大嘘吐くだろうから。

「・・・・・・（そんなもん、考えたってどうにもならんか）」

「何か言ったか、清明？」

「いや、シエル。別に」

大体、この車には救急箱なんて便利グッズ乗ってない。乗ってるとしても探す気ないというのは、本人には黙っておこう。

「さて、それじゃ話そっか。ただその前に、一つだけ理不尽な恨み言を言わせてもらうよ？いいね？

・・・・・・・・・・全部、君のせいだ。

・・・・もちろん君のせいじゃないのは分かってるからね？ただ、今から話すことは全部、君の存在が中心になって回っていることなんだよ？だから・・・・・どうしても言いたくてね」

「あ、ああ・・・・」

今の一瞬、常に食えない性格だったこいつが泣きそうな顔をしたように見えたのは、俺の気のせいなんだろうか。一瞬のことだったから、よく分からない。

「それじゃ、話は君が生まれて、色々あってこの≪シティ≫に来た所から始まるんだよ・・・・・」

そこから始まったハナシ。どんな内容になるのか、さっぱりわからない。なんとなく、助手席にいるシエルの横顔を眺めてみた。果たしてこの話、こいつはどこまで知ってるんだろうか。その顔からは、今は何の表情も読み取れなかった。・・・・・・ただ、改めてこいつは可愛いと思・・・・って違う違う！いや違わないけど！そういうことじゃない！ただ、話を聞いているだけなんだろうな。

盗難車でＧＯ♪・・・・その？（後書き）

ちなみに言っときましょう。

僕はそんな格言、聞いたこともなければ読んだこともないです（笑）。

早い話がでっちあげですので、もし使用する場合は十分に気を付けてくださいね～。

盗難車でＧＯ♪・・・・・その？（前書き）

いっこ忘れてたけど忠告。もうちょっとの間、タイトルの軽さに反して割と暗い方向に進んできます。

・・・・・すぐ終わるけどね？

盗難車でＧＯ♪・・・・・その？

怪我人の割にはえらくのんびりした口調で、話は始まった。

「まず、この≪シティ≫に君が来た時、君は結構話題になってた・・・・らしいよ？ま、僕も直接見たり聞いたりしたワケじゃないけどさ」

「はぁ！？なんで俺が？大体そんな有名だったなんて丸っきり気付かなかったけど・・・・・うん、むしろＥＳＰだらけな≪シティ≫にきてやっと・・・・・・あ、悪い。何でもない」

暗い話はやめておこうじゃないの。ここでなら人間扱いされるってのは嬉しいけどさ。

「・・・・・・・ふーん」

ちょっとは察してくれたのか、何も突っ込んでこなかった。

「・・・・・それで、話を戻すよ？まず、君が自分が有名人だということを知らなかったのは、当たり前すぎて笑えるくらい当り前の理由があるから。表の世界で暮らす人は、裏のことなんて知る必要ない・・・・・つまりはそういうことさ。それで、君が有名になった理由は・・・・・・その前にちょっと確認したいんだけど、君自身はどう思う？何か心当たりはあるかい？」

え、俺？う～ん・・・・・

「・・・シエル、なんか思いつく？」

困った時は近くの人に助け(責任をパスし)を求めましょう。

「・・・他人(ひと)任せなんだ？」

「・・・・私に聞くのか？」

・・・・・・・・・・・・・はいはい。どうせ見当もつきませんよーだ。

「全く・・・・・あのね、君はどれだけ自分が歩く大量破壊兵器になれるのか分かった上でそんな情けないことを言っているのかい？もしそうならがっかりだよ・・・・」

「大量・・・破壊兵器？」

「そ。それも、世界中の軍隊を理論上は一人で壊滅させられるレベルの、ね」

「ど、どういう・・・・・・」

「全く、これだから平和ボケは困ったもんだね？いいかい、君の力は全ての機械を操る。つまり、戦闘機だろうが軍艦だろうが問答無用で行動不能に・・・いやそれどころか強制的な自爆・・・・・いやいや、そんな生易しい話じゃない。内部からの操縦を完全に無視させて乗っ取れば、戦力を送れば送るだけそれを丸々君の力に出来る・・・・・ミサイルを撃ち込んだ所で、不発になればただの鉄。細菌兵器を使った所でその菌を作っている所を叩くだけでやっぱり意味がなくなる・・・・・・・・あれ？まだまだ他にもあるけど、とりあえずこんな所で押さえておこうか？随分ショックな話だった

みたいだしね？」

「・・・・・・・・！」

何か言ってきたけど、正直自分のことで今は精いっぱいだ。そんな、そんな！！嘘だろ？誰か嘘だって言ってくれ！！そんな、そんな能力（スキル）だったんならそれを、持ってる俺は・・・・・

マルデ、バケモノジャナイカ。

「あ、そうそう・・・今の話を聞いてどんな自己嫌悪になろうが僕の知ったこっちゃないけど、下らないことは考えない方がいいよ？大体、君が化け物なら僕は・・・・・・いや、今これを言っても余計に混乱するだけ、か」

「それに、善い方に考えれば問題ない。世界をひっくり返せるほどの力なら、きっと何かのために使うこともできる。そして貴方は、そういうタイプの人間のはずだ」

横の方からせっかく入ってきたフォローも、今の俺にとっては頭の中を虚しく通り過ぎるだけだった。

「（チッ・・・今話したのは僕のミスだったかな？そう言えば彼はあくまでも『一般人』だったか・・・・ちょっと荷が重すぎたね）」

何事かつぶやいていたけど、そんなことはどうだっていい。俺は・・・・俺は・・・・・。

盗難車でGO♪・・・・・その？（後書き）

ちょっと自慢。
今前回までの四方山を軽く手直し（キャラの性格を現在の物に合わせる等）してたんだけど、数ヶ月前に比べれば僕もちょっとはマシになってきたと思いません？
嘘だと思ったら、最初の方に戻ってみて下さいな。
あの頃は下手で執筆力無かったなぁ・・・・・。

※あんま変わってないとか言わないように。

盗難車でGO♪・・・・・・その？

時間の、感覚が、・・・・・・・ない。
あれから、何分たった？それとも、何時間か経ってんのか？ああ、だめだ。さっぱりわかんね。覚えてるのはただ、無意識のうちにも聞こえてきた、

『あ、そこ左ね』

だの、

『ほら右行って！信号変わるよ！』

だの、

『あ、ここはまっすぐね』

とか言った感じの声に従って車を動かしていっていることだけ・・・・・・・ってアレ？何か俺、ボーッとしてる間にいいように使われてね？

「ほらほら働く働く！あ、そこ左ね？」

「・・・・・・・」

「ん。それじゃ、三つめの角をまたひだｒ・・・・」

「いい加減にしてくれえっ！」

過労死でもさせる気か、ったく。人が反論できない精神状態なのをいい事にこき使うなんて、ひどい話だぜ。

「ん、ちょっとは調子戻ったね？」

「・・・・・え？」

もしかして、俺の為・・・・・？いかん、不覚にもちょっと感動した。次の瞬間！

「んじゃ、そこ右ね」

さ、さらっと言いやがった・・・・！開いた口がふさがらないってこのことだな、間違いなく。でもまあ、ちょっとはましな気分にもなれたの『だけは』確かだし、ここは黙っておこう。

・・・・・若干腹立った分が多いけどな！

「そのまま真っすぐ」

「いつになったら着くんだよ！？」

もう俺ぶっ続けで二時間近く運転してるぞ！？無免許者にとって運転(これ)ってすんごい神経使うんだからな！？いい加減事故っても俺は知らんぞ、ったく。

「ほら、そこに水色のビルが見えるでしょ？」

「ああ・・・・あそこか？」

やれやれ、やっと着いたのか。もういい加減休ませてもらいたい

よ。

「いや、そのビルを左に曲がって」

「ふざけんなぁぁぁぁぁぁぁッッッッ！！！」

「じょーだんだって・・・・・・ハイ、そこの駐車場に止めといて」

その偉そうな言い方にはわりと腹が立ったけど、でもまあこれで運転も終わりなんだ。わざわざ喧嘩吹っ掛けるほどのことでもない。とりあえず自分を納得させる。

・・・・やっぱ納得、できなかった。いやだってさ、ここまで来れたのは誰のおかげだと思ってんのさ？おまけに車は盗んだ物だしさ、いい加減聞く方もしつこいだろうけど俺前科一犯になってるしさ、なんかこう言うことないわけ？人に何かやってもらったら礼ぐらいは言うもんだろ？

「ほらほら、早く入ったら？どこぞの監視カメラに引っ掛かっても知らないよ？」

いつ入ったのか、扉の中の方から声が響く。ちぇっ、でも確かに見つかりでもしたらえらい目にあうだろうからな。

てな訳で、俺は目の前の扉を開けた。さてさて、今度は何がある

ことやら。

「・・・・・暇なんだ」

「偶然だな。実は俺もなんだ」

「君たち、もうちょっと静かにできない？」

「「それはもう五回は聞いた」」

「じゃあ黙っててよ・・・・・」

「大体、さっきから何やってんだ？ずーーーっとパソコンいじったりしてさ」

その疑問には、シエルが代わりに答えた。

「多分、証拠の隠滅だろうな。貴方の言う『前科』を裏の方から握り潰してでもいるんだろう。・・・・・違うか？」

「うんにゃ、御名算だよ。よく分かったね？」

「・・・・別に。貴方がやらなければ、私がやろうと思っていただ

けのことだ」

正直よくわからん。でも、なんとなく予想はついた。

「・・・・・（ありがと、な）」

「・・・？何か言ったか？」

「どうしたのさ、ちょっとニヤニヤなんかしちゃって？気持ち悪いよ？」

「いや、何でもないさ」

なんだか、嬉しかった。

盗難車でＧＯ♪・・・・・その？（後書き）

ちょーーーっとだけ終わり方をいつもと違う趣向にしてみましたが、いかがだったでしょうか。

違和感を感じたら素直にそう言ってもらって構いませんので、よければ感想とか感想とか感想とか（笑）お願いします。

とりあえず最後の静けさ

「えーっと・・・・確かここのデータとここの記録をいじってそれから・・・・・」

なんか脇の方から随分と物騒なセリフが聞こえてきた。まだ終わんないのか、証拠消し・・・・・。

「な、なぁ？」

「んー？今忙しいんだけど・・・・・何？」

「そのデータ消し、よかったら俺が変わろっか？」

そう言うと、まるで方程式をはじめてみた幼稚園児の様な顔を・・・・スマン、わかりにくいな。要するに、『何を言ってるんだこいつは』的な顔ってコト。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・悪い。ホンッッッッと悪い。さっきの例えは忘れてくれ。そして二度と思いだすな。いいよな？な？な！？

「全く、君ってヤツ(馬鹿)は・・・・悪いけどさ、めんどくさいから君、代わりに説明してくれる？」

君っていうのはシエルのことだ。ところで今、さらっと馬鹿にされたような。

「私か？別に構わないが・・・・。要するに今貴方のした提案は、確かに決まれば早いだろうがその分リスクが高いんだ」

「悪い。でもさっぱりわかんない」

「済まない。説明が漠然とし過ぎていた・・・・。つまり、平たく言えば逆探知の危険がある、ということなんだ」

「そういうこと。君みたいな能力（スキル）は世界中合わせてもまずいないからね、一発で痕跡がばれちゃうのさ☆」

なるほどねえ・・・・・あと、気持ち悪いから男は語尾に☆なんぞつけるな。

「個人の自由だろ？」

「それを人にまで押し付けんなって言ってんの！」

冗談抜きで嫌だっつーの！ましてや、こいつの見た目は・・・・・見た目だけは俺そっくりなんだ。見た目だけはな。余計に嫌な気分になってくる。

「はい、これで終わり、と・・・・・とりあえず都合の悪い証拠は全部消しておいたけど、まだどこで足がつくか分かんないからね？過信はしないでよ？」

「あれ？もう終わったのか？思ったより早いんだな」

思わずそういうと、呆れたように肩をすくめながら、

「そりゃまあ、君がどう思おうと勝手だけどたかが窃盗程度のことだからね・・・・・ただ、ちょっとばかり予想外だったけどね、ここまで早く終わるなんて」

「操作をかけられた、か・・・・どうやら、貴方は私の思っていたよりも重要人物だったんだな。正直驚きだ」

「まあ、彼の場合はただ単に運が悪かった、ってのもあるとは思うけどね？下手に外の世界で生まれた分、お偉いさんも色々と不安なんだろうし」

「やはり、そこは大きい、か・・・・まあ仕方ないことだが」

「だね。今更グチグチ言ってもしょうがないし、とりあえず何が来てもいいようにはしておこうかなっ、と」

へ？俺？いつも通り会話についていけないでひたすら黙りこくってましたが何か？

その後、しばらく暇にしていた俺を見かねたのか、シエルが俺に声をかけてきた。

「・・・・・少し、貴方と話したい事があるのだが」

「おう、どした？随分難しい顔だな」

「私だって今話すべきではないのは分かっているのだが・・・・・時間のあるうちに言っておかないと何があるか分からないからな」

「ふーん・・・・・んで、何？」

「あの、車の中でした話の・・・続きなのだが・・・・・」

「ああ・・・・・そーゆー事ね。・・・・・・わかった。俺は大丈夫だから、その続きの話とやらをしてくれ」

「本当に・・・・大丈夫か？私は、貴方が無理をしたり苦しんだり、それを隠して強がったりするのは見たくないんだが・・・・・」

「・・・・・・どうせ、いつかは聞くことになるんだろ？なら、せめて今、お前の口から聞いておく方がずっと良さそうだからな」

「わかった・・・・・なら、聞いてほしい。これが・・・・貴方の話だ」

55：大修羅場☆（前書き）

清明「・・・・・悪い、作者。一ついいか？」

あれ？どしたの清明君？珍しいね、前書きに出てくるなんて。

清明「俺だって別に来る気は無かったさ！でも今回はタイトルがあんまりにも気になったんでな！」

ああ、今回のタイトル？・・・・・えーっと、なんだっけ？

・・・・・スイマセン自分調子こいてましたっ！

清明「わかればよし。んで？何なの、今回のタイトル？」

え？まあ、ちょっとね。すぐわかるよ、うん。

清明「（何言っても無駄か・・・・）なあ作者、折るんだったら骨と歯のどっちがいい？」

怖あぁぁぁ！！

55：大修羅場☆

そして、それから数分・・・・いや、もしかしたら数時間・・・・・過ぎた。今日はもう朝から時間間隔がなくなってるけど、そんなことどうだっていい。なんてったって、そんな・・・・・・

「嘘・・・・・じゃねえ、よな？」

もちろん、そんなことがあるはずないのはよく分かってる。少なくとも、俺の印象ではシエルはそんな嘘をつくやつじゃない。まったくもってベタな質問。でもそれしか出てこない。

「（・・・・・・・コクン）」

「ん、そっか・・・・・ん、わかった。わかったから。・・・・・ちょい悪い、席、外しててくんね？」

気を使ってくれたのか、目の前に湯気を立てるお茶のコップをそっと置いて、何も言わず静かにその場を離れた。

「・・・・悪いな」

もちろん聞こえてやしないだろうけど、言わずにはいられなかった。

・・・・・・・・・・・・。今、何時だっけ？

「えーっと・・・・・・あーダメだ、ぜんぜんわかんないか」

今日は朝から色々あったからなぁ・・・・・いや待て、それ以前にそもそもまだ『今日』なのか？日付またいでてもおかしくないぞ？まあ、後で時計でも見とくか。そういや、桑折と祓は今、何やってんだろうか。祓はどうだかわかんねえけど、桑折にはもう学校行ってないことバレてるよなあ・・・・・まあ、当り前か。やれやれだ。

「・・・・・・・よし、起きるか」

現実逃避終了。とりあえず腹も減ったしな。それにしても、あそこまでの話を聞いておいて数時間たっただけで『腹減った』なんてな・・・・・やっぱり俺も、世間から見たら壊れた奴なんだろう。わかっちゃいたけど。それでも、今悩んでたってどうにもならないものはどうにもならないからな。俺はそのいつの間にか誰もいなくなっていた部屋を出て、明かりがついてる方向に歩き出した。

「お、やっと起きた？」

「まーな・・・・ってアレ？シエルはどこ行った？」

「あ、やっぱ僕より彼女といる方がいい？」

「んな！！？そ、そんなんじゃないっての！・・・・・・・大体、まだ初対面から一週間と経ってねえ程度の付き合いだしな！」

「ははっ！隠すな隠すなって～。あ、それとも本命はこの間会った時にいたあの娘？確かにあっちも可愛いかったもんね？」

「ダ、だからそんなんじゃ・・・・！」

「んん～？それにしちゃ随分と動揺しちゃってますね～？あ、それともウチの祓だったりとか？わかるわかる、腹立ってくるあの性格を帳消しにしてまだ余りあるぐらい見た目は超良いからねー」

「だぁからな、俺はまだフリーだっつーの・・・・・それと、俺なら祓の性格が腹立つとは思わねえぞ」

「はいはい、惚気ごちそうさま。それじゃ、夕飯にでもする？」

「へ？あ、ああ・・・・・そういや、それで結局シエルはどこ行ったんだ？」

「いや、何で夕飯で女の子の名前が出てくるかな？まあ、僕のことじゃないからいいけどさ・・・・それであの娘・・・・シエルちゃん？今は買いだし中だよ。いやー、ここって食料らしいものがほとんどないからさぁー、悪いとは思ってるよ、僕だってさ？」

「いや、そう思うなら荷物持ちでもやってやれって」

一人で行かせたのか・・・・結構こいつ、心が腐ってんだな。

「やれやれ・・・・あのね、データはごまかせても人間の目は騙せないんだよ？車泥棒たる君似のこの僕が外なんて行ってみ？あっという間に逮捕じゃないか！」

そ、そっか・・・・・・ん？僕『似』？

「な、なぁお前って・・・・・」

「お、帰ってきた帰ってきた。噂をすれば何とやら、さあ夕飯夕飯っ・・・・・てありゃ？あれ！？」

一人で監視カメラの物であろうモニターを覗いていたと思いきや、いきなり素っ頓狂な声を上げた。こいつ、こんなにやかましい男だったか？

「ど、どうした！？」

「いや一、驚いたよ・・・・・こういうのもこう言うんだろうね、ほら『噂をすれば・・・・・』」

そこまで聞いた時点で、俺にもピンときた。

「あ、もしかして・・・・・？」

「もしかしなくても、ご想像どうりさ☆いやー、モテる男はなかな

か大変みたいだね？」

「やっぱりかぁぁぁぁ！！」

そう叫んだ時、ちょうどドアが開いた。そして、そこから聞こえてくる声。

「清明っ！なんで今日勝手にいなくなるのっ！少しはこっちの身にもなって・・・・・って、別に今のは違うんだから！と、とにかく、なんでアンタはこんな所にいるの！」

「清明君、清明君、清明君～！私、凄く心配したんですよ～！もしこのまま清明君がいなくなったらって思うと私・・・・清明君～！！」

「す、済まない！途中で見つかった・・・・！くっ、余計な人間が増え・・・いや、今のは忘れて欲しい・・・・」

いっぺんに賑やかになった。

５５：大修羅場☆（後書き）

桑折「やっと・・・！私にも出番が！」

祓「私もです～！清明君にまた会えました～！」

・・・・・本当にモテてんなアイツ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8707q/

科学な都市の四方山話

2011年10月7日20時02分発行